

2022年度
大学院国際文化研究科
講義概要 (シラバス)



法政大学

科目一覽

【発行日：2022/5/2】最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

【X2001】	国際文化研究A [石森 大知、田島 樹里奈]	春学期授業/Spring	1
【X2002】	国際文化研究B [大野 ロベルト、市岡 卓]	秋学期授業/Fall	2
【X2003】	国際文化共同研究A [熊田 泰章、市岡 卓]	春学期授業/Spring	3
【X2004】	国際文化共同研究B [今泉 裕美子、市岡 卓]	秋学期授業/Fall	4
【X2005】	多言語相関論ⅡA [大野 ロベルト]	春学期授業/Spring	5
【X2006】	多言語相関論ⅡB [大野 ロベルト]	秋学期授業/Fall	6
【X2007】	多言語相関論ⅢA [輿石 哲哉]	春学期授業/Spring	7
【X2008】	多言語相関論ⅢB [輿石 哲哉]	秋学期授業/Fall	8
【X2009】	多文化相関論ⅠA [グアリーニ レティツィア]	春学期授業/Spring	10
【X2010】	多文化相関論ⅠB [グアリーニ レティツィア]	秋学期授業/Fall	11
【X2011】	多文化相関論ⅡA [熊田 泰章]	春学期授業/Spring	12
【X2012】	多文化相関論ⅡB [熊田 泰章]	秋学期授業/Fall	13
【X2013】	多文化相関論Ⅲ [佐々木 一恵]	春学期授業/Spring	14
【X2014】	多文化芸術論Ⅰ [佐藤 千登勢]	春学期授業/Spring	15
【X2015】	多文化芸術論Ⅱ [廣松 勲]	秋学期授業/Fall	17
【X2016】	異文化社会論ⅠA [今泉 裕美子]	春学期授業/Spring	18
【X2017】	異文化社会論ⅠB [今泉 裕美子]	秋学期授業/Fall	19
【X2018】	異文化社会論ⅡA [浅川 希洋志]	春学期授業/Spring	20
【X2019】	異文化社会論ⅡB [浅川 希洋志]	秋学期授業/Fall	21
【X2020】	ナショナリズム/エスニシティ論A [石森 大知]	春学期授業/Spring	22
【X2021】	ナショナリズム/エスニシティ論B [石森 大知]	秋学期授業/Fall	23
【X2022】	マイノリティ社会論A [曾 士才]	春学期授業/Spring	24
【X2023】	マイノリティ社会論B [曾 士才]	秋学期授業/Fall	25
【X2024】	ジェンダー論 [佐々木 一恵]	秋学期授業/Fall	26
【X2025】	多言語社会論A [大中 一彌]	春学期授業/Spring	27
【X2026】	多言語社会論B [大中 一彌]	秋学期授業/Fall	29
【X2027】	多民族共生論ⅠA [松本 悟]	春学期授業/Spring	30
【X2028】	多民族共生論ⅠB [松本 悟]	秋学期授業/Fall	31
【X2029】	多民族共生論ⅡA [高柳 俊男]	春学期授業/Spring	32
【X2030】	多民族共生論ⅡB [高柳 俊男]	秋学期授業/Fall	33
【X2031】	国際ジャーナリズム論 [神林 毅彦]	秋学期授業/Fall	34
【X2032】	国際文化交流論ⅡA [木村 真]	秋学期授業/Fall	35
【X2033】	比較宗教文明論 [白杵 陽]	秋学期授業/Fall	36
【X2034】	多文化情報空間論ⅠA [森村 修]	春学期授業/Spring	37
【X2035】	多文化情報空間論ⅠB [森村 修]	秋学期授業/Fall	39
【X2036】	多文化情報メディア論ⅠA [大嶋 良明]	春学期授業/Spring	40
【X2037】	多文化情報メディア論ⅠB [大嶋 良明]	秋学期授業/Fall	41
【X2038】	多文化情報メディア論Ⅱ [重定 如彦]	秋学期授業/Fall	43
【X2039】	外国語実践研究A (英語) [MARK E FIELD]	春学期授業/Spring	44
【X2040】	外国語実践研究B (英語) [大野 ロベルト]	秋学期授業/Fall	45
【X2041】	外国語実践研究A (ドイツ語) [熊田 泰章]	春学期授業/Spring	46
【X2042】	外国語実践研究B (中国語) [曾 士才]	秋学期授業/Fall	47
【X2043】	外国語実践研究A (ロシア語) [佐藤 千登勢]	春学期授業/Spring	48
【X2044】	外国語実践研究B (ロシア語) [佐藤 千登勢]	秋学期授業/Fall	49
【X2045】	Thesis Writing A [ジェイソン ポール スミス]	春学期授業/Spring	50
【X2046】	Thesis Writing B [ジェイソン ポール スミス]	秋学期授業/Fall	51
【X2047】	Oral Presentation [MARK E FIELD]	春学期授業/Spring	52
【X2048】	国際協力論 [松本 悟]	春学期授業/Spring	53
【X2049】	国際人権論 [藤岡 美恵子]	春学期授業/Spring	54
【X2050】	多文化情報ネットワーク論A [和泉 順子]	春学期授業/Spring	56
【X2051】	多文化情報ネットワーク論B [和泉 順子]	秋学期授業/Fall	57
【X2052】	国際文化研究日本語論文演習A [浅利 文子]	春学期授業/Spring	58
【X2053】	国際文化研究日本語論文演習B [浅利 文子]	秋学期授業/Fall	59

【X2054】	国際文化研究日本語論文演習C [浅利 文子] 春学期授業/Spring	60
【X2070】	修士論文演習A (代表シラバス) [輿石 哲哉、石森 大知] 春学期授業/Spring	61
【X2071】	修士論文演習B (代表シラバス) [輿石 哲哉、石森 大知] 秋学期授業/Fall	62
【X2072】	修士論文演習A [松本 悟] 春学期授業/Spring	63
【X2078】	修士論文演習A [浅川 希洋志] 春学期授業/Spring	64
【X2073】	修士論文演習B [松本 悟] 秋学期授業/Fall	65
【X2079】	修士論文演習B [浅川 希洋志] 秋学期授業/Fall	66
【X2074】	修士論文演習A [曾 士才] 春学期授業/Spring	67
【X2075】	修士論文演習B [曾 士才] 秋学期授業/Fall	68
【X2076】	修士論文演習A [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	69
【X2077】	修士論文演習B [佐藤 千登勢] 秋学期授業/Fall	70
【X2101】	博士論文演習I A (代表シラバス) [輿石 哲哉、石森 大知] 春学期授業/Spring	71
【X2102】	博士論文演習I B (代表シラバス) [輿石 哲哉、石森 大知] 秋学期授業/Fall	72
【X2103】	博士論文演習II A (代表シラバス) [輿石 哲哉、石森 大知] 春学期授業/Spring	73
【X2104】	博士論文演習II B (代表シラバス) [輿石 哲哉、石森 大知] 秋学期授業/Fall	74
【X2105】	博士論文演習III A (代表シラバス) [輿石 哲哉、石森 大知] 春学期授業/Spring	75
【X2106】	博士論文演習III B (代表シラバス) [輿石 哲哉、石森 大知] 秋学期授業/Fall	76
【X2111】	博士論文演習I A [森村 修] 春学期授業/Spring	77
【X2112】	博士論文演習I B [森村 修] 秋学期授業/Fall	78
【X2113】	博士論文演習I A [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	79
【X2114】	博士論文演習I B [佐藤 千登勢] 秋学期授業/Fall	80
【X2107】	博士論文演習II A [高柳 俊男] 春学期授業/Spring	81
【X2108】	博士論文演習II B [高柳 俊男] 秋学期授業/Fall	82
【X2109】	博士論文演習III A [佐々木 一恵] 春学期授業/Spring	83
【X2110】	博士論文演習III B [佐々木 一恵] 秋学期授業/Fall	84
【X2121】	博士ワークショップI A [浅川 希洋志、石森 大知] 春学期授業/Spring	85
【X2122】	博士ワークショップI B [浅川 希洋志、石森 大知] 秋学期授業/Fall	86
【X2123】	博士ワークショップII A [浅川 希洋志、石森 大知] 春学期授業/Spring	87
【X2124】	博士ワークショップII B [浅川 希洋志、石森 大知] 秋学期授業/Fall	88
【X2125】	博士ワークショップIII A [浅川 希洋志、石森 大知] 春学期授業/Spring	89
【X2126】	博士ワークショップIII B [浅川 希洋志、石森 大知] 秋学期授業/Fall	90

OTR500G1 - 001

国際文化研究 A

石森 大知、田島 樹里奈

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコツボ的専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」においては、必読文献を読み連ねる。加えて、本研究科において学位論文執筆に必要となる研究方法・手続きなどについても学ぶ。

(*なお、扱われる「4つのテーマ」についてその順序が前後する場合には、初回授業などにおいてその旨を学生に通知する。)

【到達目標】

- (1) 国際文化研究の広がり及可能性を入門のレベルで理解できること。
- (2) 国際文化研究を行うための方法論を理解できること。
- (3) 大学院で研究を遂行する上での手続き・心得を理解できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。

- (1) 本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が1本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
- (2) この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士1年生のレベルを基準まで引き上げることが重要な点である。
- (3) 基礎文献は1本20～30ページ程度で、雑誌論文または書籍1～2章分を目途とし、日本語文献（適書がない場合、英語も可）とする。
- (4) 授業3回を1セットとして、基礎文献を1本ずつ取り上げ討議する。当該文献を選定した教員はディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方向による討議の活性化を図る。そのさい、学生からのコメントや質問等に対するフィードバックも行う。
- (5) 大学院における研究遂行のために、注意すべき手続き・心得などについても教示する。
- (6) 本授業は、Zoomを用いたリアルタイム・オンライン授業とする(変更がある場合は、学習支援システム等を通して事前に通知する)。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・自己紹介・関心紹介 ・文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。
2	テーマ1：リサーチデザイン（第一回）	・大学院における学習・研究について解説する。 ・受講学生たちのこれまでの研究状況を確認する。
3	テーマ1：リサーチデザイン（第二回）	・引き続き、大学院における学習・研究について解説する。 ・研究計画作成の重要性について意識を高める。

4	図書館ガイダンス（第三回）	・図書館員による図書館ガイダンスを利用しつつ、法政大学図書館を介した文献調査のイロハを学ぶ。
5	テーマ2：質的調査（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
6	テーマ2：質的調査（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
7	テーマ2：質的調査（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
8	テーマ3：歴史分析（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
9	テーマ3：歴史分析（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
10	テーマ3：歴史分析（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
11	テーマ4：文学研究（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
12	テーマ4：文学研究（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
13	テーマ4：文学研究（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
14	補足授業 まとめ	・これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読みこむことは当然ながら、それ以上に自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

上記の方法によって選定された輪読文献を用いる。

【参考書】

各授業において必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、下記の①+②+③の提出物などを総合的に判断して行う。
①リサーチデザイン（テーマ1） ②3つのテーマ（テーマ2・3・4）ごとに「ミニ課題」と「レジュメ」にて採点：20%×4 ③「期末レポート」：20%
以上の合計100%となる。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

大学院における初年次教育に当たる授業でもあるため、できるだけ学生同士の議論ができるような雰囲気・授業の流れを実現できるように心がけた。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出等は、主に学習支援システムを通して行う。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【Outline (in English)】

This course introduces the foundations of the intercultural communication studies according to three domains of interdisciplinary research: multicultural interrelations, multiethnic coexistence and multicultural informatics. At the end of the course, students are expected to understand basic theories and methodologies of these studies. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on briefing paper and mini-report (20%×4) and term-end report (20%).

OTR500G1 - 002

国際文化研究 B

大野 ロベルト、市岡 卓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコソボの専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」においては、必読文献を読み進める。春学期の「国際文化研究 A」で修得した文献購読の力をさらに伸ばし、研究の方法論についての理解を深める。なお、今年度は本研究科で学位論文執筆に必要となる研究方法についても学ぶ。

【到達目標】

- (1) 国際文化研究の広がり可能性を入門のレベルで理解できること
- (2) 国際文化研究を行うための方法論を理解できること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。

- (1) 本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が1本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
- (2) この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士1年生のレベルを基準まで引き上げることも重要な点である。
- (3) 基礎文献は1本20～30ページ程度で、雑誌論文または書籍1～2章分を目途とし、日本語文献（適書がない場合、英語も可）とする。
- (4) 授業3回を1セットとして、基礎文献を1本ずつ取り上げ討議する。

当該文献を選定した教員はディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方による討議の活性化を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。
2	テーマ1（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
3	テーマ1（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
4	テーマ1（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
5	テーマ2（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
6	テーマ2（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
7	テーマ2（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
8	テーマ3（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。

9	テーマ3（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
10	テーマ3（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
11	テーマ4（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
12	テーマ4（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
13	テーマ4（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
14	補足授業	これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読み、自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

上記の方法によって選定する必読文献を用いる。

【参考書】

必要に応じて、指示する。

【成績評価の方法と基準】

4つのテーマごとの課題提出（60%）と授業中の討論への貢献（40%）によって評価する。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【Outline (in English)】

This course is the continuation of the spring semester, and is required for all the 1st year graduate students. It provides students with a general scope in three prominent research areas of this graduate school, and attempts to cultivate desirable views to encompass in such a broad cross-disciplinary environment.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.

The grading criteria is as follows: 40% participation, 60% assignments. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 003

国際文化共同研究 A

熊田 泰章、市岡 卓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科では、「多文化相関」、「多文化共生」、「多文化情報空間」の三領域が今日的な研究課題のスクープの中で深く連関することを学んでいきますが、本科目は、テーマ設定・リサーチ等を共有しながら、それが自らの研究で達成できているか確認していくことを目的とします。

受講者は、自らの研究発表を蓄積し、それを共有・公開することにより、問題意識や研究成果を外に発信して共有していく研究スタイルを身につけていきます。

その上で、上記の研究スタイルを身につけることを通じて、各自の研究の中に、本研究科の特色である「学際的志向の強みを編み込んでいく」ことを目指します。

【到達目標】

上記のテーマを念頭におきながら、受講者各自が修士論文を完成させることが第一の到達目標です。

その中で、特に、既存の学問の枠組みから飛び出して学際的なアプローチをしていくこと、「今、ここ、自分」といった切実な問題として、研究対象を捉えていくことを目指します。

また、「部屋にこもって、一人でしっかりと学級を極める」タイプの研究から踏み出し、自ら外に発信しつつ、他者の研究テーマについても一緒に考えていく中で、発信すること、研究と一緒にやっていくことの意義を実感していくことも、到達目標として掲げます。「共同研究」と取敢えて謳っているのは、そういう意味があるのです。

さらに、プレゼンテーション（プレゼン、発表）には delivery（表出の仕方）のテクニックがありますし、論文には引用、注の付け方などの規則がありますが、そういうことについても再度確認しながら身につけていくことも、目標の一つです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

大学と研究科の授業実施方針に則して授業を行います。基本的に教室での対面授業としますが、必要に応じてオンラインでの受講を可とするように処置します。本授業の基本的な授業計画はシラバスに沿って進めますが、変更がある場合には、「学習支援システム」で提示いたします。本授業の開始日までに具体的な授業方法などを同システムで提示します。

発表者（プレゼンター）は自分のプレゼンに関するレジュメ等を作成し、プレゼンを行い、出席者皆で討論していきます。プレゼンター以外の受講生は、疑問点・意見等を準備した上で、討論に参加します。

修士論文構想発表会を大きな節目と捉え、それに向けて進捗状況や、研究上の悩み・問題点などを受講者・教員間で共有していきます。

上記の節目を意識しながら、受講者の「書く行為による成果物」（例えば、報告書・論文など）についても、その内容、論の提示の仕方、形式などについて、随時指導していきます。

受講者の質問等には、授業時、あるいは授業後に「学習支援システム」あるいは個人メール等を用いてフィードバックを行います。そのようなかたちで、毎回の授業の成果の共有・蓄積を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	<ul style="list-style-type: none"> 授業の進め方について周知する。 発表のスケジュールを立てる。 受講者の研究の進捗状況について報告してもらう。
第 2 回	論文の書き方について	<ul style="list-style-type: none"> 論文を書くことの意味と書き方について確認する。
第 3 回	発表とその指導 1	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第 4 回	発表とその指導 2	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第 5 回	発表とその指導 3	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。

第 6 回	発表とその指導 4	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第 7 回	発表とその指導 5	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第 8 回	前半総括・その他	<ul style="list-style-type: none"> 前半の発表の総括、いい点は何か見つけつつ、悩み・問題点等の共有と、その解決を図る。
第 9 回	発表とその指導 6	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第 10 回	発表とその指導 7	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第 11 回	発表とその指導 8	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第 12 回	発表とその指導 9	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第 13 回	発表とその指導 10	学生 2 名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第 14 回	総括	<ul style="list-style-type: none"> 授業の総括、いい点は何か見つけつつ、悩み・問題点等の共有と、それらの解決を図る。これ以降どう進めたらいいか考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 発表者は、各自レジュメ、プレゼン・スライド等を作成し、自らの発表を用意する。
- 発表回のみならず、常に修士論文の執筆を念頭に置き、意味をかみしめながら、「書くという行為」を積極的に行う。
- 発表者以外の受講者は、発表者の内容を可能な限り授業で検討できるよう、発表の内容に関する事柄を調べておく。さらに、発表者に対する質問・コメント等を用意しておく。
- 修士論文のよりよい完成を目指すために、本授業を積極的に活用する。
- 授業後に、指摘された点を見直したり、関連文献等を積極的に読んだりすることで、自分の視点を広げていく。

【テキスト（教科書）】

随時指定しますが、取りあえずは、以下のものを用意してください。

- 斉藤孝・西岡達裕(2005)、『学術論文の技法』[新訂版]、東京：日本エディタースクール出版部。（論文の基本的な形式等については、この本を中心に解説します。）
- 刈谷武彦(2002)、『知的複眼思考法 誰でも持っている想像力のスイッチ』、東京：講談社。（通読することで、読む・書くという行為の意味を再確認させてくれます。）

【参考書】

授業において適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

発表 70 %

討論への参加度・貢献度 30 %

上記はあくまで目安であり、担当者の協議により、必ずしも数値化に寄らない側面も考慮することがありますが、ご理解ください。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

新規担当につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

辞書・パソコンなど。

【その他の重要事項】

- 1) 受講者数により、発表の回数が増減することがあります。
- 2) 修士課程 2 年目の春学期の科目であることを、特に意識して運営していきます。従って、修士論文の基本方針等を固めていくことを念頭に置き進めていきます。
- 3) 発信していくことは、それだけでも意味があることです。それを意識し、同時に自分と異なった意見を受け入れていく姿勢を身につけます。
- 4) 問題と同次元で「ベタに」（あるいは「ガチに」といってもいいかも）問題に取り組むだけでなく、より高い次元で、自分の研究の意味に括弧を付けてその意味を問いかけていく、「メタな」取り組みを取り入れる必要があります。是非、ある時点で立ち止まって考えてみてください。
- 5) 「論文を書く」というのは、自分の研究してきたことに自分自身で「区切りをつける」仕事でもあります。そのことを意識し、必要な文献等をしっかり読み込み、執筆に向けての準備をしてください。

【担当教員の専門分野等】

熊田

<専門領域>文化記号論、テキスト論

<研究テーマ> 間文化性研究

<主要研究業績> 「グローバル化の原理としての記号的従属および動的編成と相互受容－個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第16号, 2015年

市岡

<専門領域> 政治社会学

<研究テーマ> 民族・宗教と政治社会との関わり

<主要研究業績> 『シンガポールのムスリム：宗教の管理と社会的包摂・排除』明石書店、2018年。

【カリキュラム上の位置づけ】

修士論文を完成される年度の前半に配当され、「国際文化研究 A, B」の延長線上で、かつ秋学期の「国際文化共同研究 B」の直前の科目です。この科目は修士1年目での研究の上に、いよいよ修士論文執筆を視野に入れる点で、極めて重要な意味を持ちます。

【Outline (in English)】

【Course outline】

With respect to our Graduate School, it is of fundamental importance to study how the three fields — 'Intercultural Correlation Studies', 'Multiculturalism Studies', and 'Multicultural Information Space Studies' — are intertwined with each other in the scope of today's research enquiries. The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.

By the end of course, you should be able to acquire a research style, wherein you disseminate your own problem awareness and research results by accumulating, sharing and publicising your own research results.

Besides that, through this acquisition process, you are expected to go up to the stage where you can make this 'strong point of our graduate school interwoven' with your own research.

【Learning Objectives】

The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.

【Learning activities outside of classroom】

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】

Final grade will be calculated according to presentation(70%) and contribution in each class meeting(30%).

OTR600G1 - 004

国際文化共同研究 B

今泉 裕美子、市岡 卓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、修士論文あるいはリサーチペーパーの完成に向けて、受講する2年次の院生と教員で切磋琢磨する授業で、1年次の「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」、2年次春学期の「国際文化共同研究 A」の延長線上にある。

「共同研究」というと、通常は共通テーマのもと、複数人が分担しながらもに研究することを意味するが、この場合の「共同」には、修士論文作成という共通の課題に向けて、それぞれ知恵を出し合い、協力し合う意味が込められている。

研究科の3領域、すなわち「異文化相関関係」「多文化共生」「多文化情報空間」に目配りしつつ、自分の研究の位置づけや方法論などを他者のそれと比較し、再検証することを通して、より完成度の高い論文を目指す。

とりわけ、本研究科の特色である学際的思考を組み込んでいく。

【到達目標】

上記の「授業の概要と目的」を念頭に置き、受講者各自がそれに見合った修士論文を完成させることを、本科目の最大の到達目標とする。

一定の構成・分量と主張をもつ論文の執筆は、誰にとってもたやすいことではない。一人で悩んだり、壁にぶつかって立ち往生することなく、同様の課題に直面している他の受講生からアドバイスをもらい、この道の先輩である教員の体験を聴くことで、困難な作業を順調に進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文の進捗状況に関する受講者の発表を中心に進めていく。発表者はレジュメもしくはパワーポイントを作成して発表を行い、他の出席者からの疑問・意見・助言等をまじえ、全員で討論していく。

修士論文中間発表会、修士論文の提出を二つの大きな節目と捉え、それに向けての進捗状況や研究上の悩み・問題点を受講者・教員間で共有していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	自分の研究テーマを中心とした自己紹介、本授業の進め方とスケジュール決定。
2	修士論文中間発表(1)	発表者 1、2、3 による 1 回目の発表。7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
3	修士論文中間発表(2)	発表者 4、5、6 による 1 回目の発表。7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
4	修士論文中間発表(3)	発表者 7、8、9 による 1 回目の発表。7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
5	修士論文中間発表(4)	発表者 10、11、12 による 1 回目の発表。7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
6	修士論文中間発表(5)	発表者 13 による 1 回目の発表および発表者 1 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
7	修士論文中間発表(6)	発表者 2、3 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
8	修士論文中間発表(7)	発表者 4、5 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。

9	修士論文中間発表 (8)	発表者 6、7 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
10	修士論文中間発表 (9)	発表者 8、9 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
11	修士論文中間発表 (10)	発表者 10、11 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
12	修士論文中間発表 (11)	発表者 12、13 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
13	論文提出前ディスカッション	修士論文提出を間近に控え、各自が直面している問題や課題について議論し、その解決策等を検討する。
14	まとめ	提出した修士論文を振り返り、反省会を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- (1) 自分の発表時に与えられた質問・批判・助言などを参考にし、常に自分の論文の質を高めるよう努めること。
- (2) 他者の発表時に得られたヒントや着想を、常に自らの論文に活かし、質の向上をはかること。
- (3) 自分の研究テーマを常に頭の片隅におき、アイデアを遊ばせながら日常生活を送ること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

自分の発表時の内容 40%、他者の発表時の貢献度 30%、平常点 30% を目安に、総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

受講生が論文執筆について疑問や不安に感じていることを、できるだけ授業内で共有し、適切なアドバイスを得られるようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パワーポイントなどを使って報告する場合は、パソコンを持参し、対面授業の場合は教室でプロジェクターの準備をしておくこと。

【その他の重要事項】

・受講生の人数によって、授業計画が変更される場合もある。

【Outline (in English)】

The seminar is designed to enhance participants' knowledge and methodologies in three key areas of study - intercultural correlation studies, multiculturalism studies, and multicultural information space studies.

At the end of the course, participants are expected to improve their interdisciplinary thinking and to write up the Master's thesis/the Research paper.

【Learning Objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper by providing feedback and support from other students, seniors and instructors. Students may update on their progress and discuss tasks they accomplish for the thesis. Based on [Outline] of the seminar, students are expected to prepare for interim presentation and to complete the thesis.

【Learning activities outside of classroom】

- (1) Students should develop the Master's thesis/the Research paper based on questions, comments and advice given in the class.
 - (2) Students should develop the Master's thesis/the Research paper by discussing and reviewing other students' work.
 - (3) Students are expected to refine their research subject.
- The standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

Presentation (40 %), Contribution(30%), Participation (30%)
Students are required to take more than 60% score in total to pass.

LIN500G1 - 103

多言語相関論Ⅱ A

大野 ロベルト

サブタイトル：パロディと文化

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

パロディという概念を軸に、主に 20 世紀の文学理論を道連れしたうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析や比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】

文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテキストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP4」の達成のために重要であり、「DP3」の達成のために望ましい

【授業の進め方と方法】

リアルタイム配信型のオンライン授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはあり得ない。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内に随時行う。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編 1	ソシユールをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編 2	レヴィ＝ストロースをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編 3	バルトをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編 4	ジュネットをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編 5	デリダをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編 1	小説とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編 2	映画とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編 3	舞台とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編 4	音楽とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編 5	サブカルチャーとパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマとなるテキストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】

リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】

発表と議論への貢献 50%、レポート 50%
成績評価は 100 点満点とし、60 点以上が合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学

<研究テーマ>

古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究

<主要研究業績>

『Butoh 入門』（共編）文学通信、2021

『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019

『日記文化から近代日本を問う』（共著）笠間書院、2017

【Outline (in English)】

This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages.

While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each participant. Students are encouraged to provide topics they can honestly relate to, including various genres of so-called subculture.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.

The grading criteria is as follows: 50% presentation and participation in discussions, 50% final paper. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIN500G1 - 104

多言語相関論ⅡB

大野 ロベルト

サブタイトル：パロディと文化

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

パロディという概念を軸に、主に 20 世紀の文学理論を道連れしたうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析や比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】

文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテキストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP4」の達成のために重要であり、「DP3」の達成のために望ましい

【授業の進め方と方法】

リアルタイム配信型のオンライン授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはあり得ない。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内に随時行う。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編 1	エーゴをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編 2	パフチンをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編 3	バンヴェニストをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編 4	サイドをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編 5	フーコーをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編 1	政治とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編 2	教育とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編 3	経済とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編 4	司法とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編 5	科学とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマとなるテキストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】

リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】

発表と議論への貢献 50%、レポート 50%
成績評価は 100 点満点とし、60 点以上が合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学

<研究テーマ>

古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究

<主要研究業績>

『Butoh 入門』（共編）文学通信、2021

『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019

『日記文化から近代日本を問う』（共著）笠間書院、2017

【Outline (in English)】

This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages.

While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each participant. Students are encouraged to provide topics they can honestly relate to, including various genres of so-called subculture.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.

The grading criteria is as follows: 50% presentation and participation in discussions, 50% final paper. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIN500G1 - 105

多言語相関論Ⅲ A

興石 哲哉

サブタイトル：言語の研究方法を学ぶ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが、言語の研究法についてはテクニカルなところがあり、なかなか理解が難しいのが現実です。本授業では、それを克服すべく、基本的な文献を読みながら言語研究の基本である音声研究を学んでいきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

基本的にオンラインでの開講となります。各回の授業計画は変更はありませんが、もし変更がある場合には、「学習支援システム」で提示します。本授業の開始日までに具体的なオンライン授業の方法などを、同システムを用いて提示します。

授業は演習形式で行います。授業では学生にどんどん意味を問いかけていき、教材を日本語にしていってもらいます。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
 - 2) 分からない場合、積極的に質問したり、意見を出し合うこと、
- の 2 点です。

課題や授業内容については、「学習支援システム」を用いて、基本的に事後に詳細なコメントを担当者が出しますので、それをさらなる研究等に活かしてください。

最終授業だけでなく、中途でも、折を見て、フィードバックの時間を設けますので、内容についての質問等には随時対処していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	Introduction	本科目の概略、学習の仕方等についての説明。その上で、教材を読み始める。
2	Organs of Speech	発話に用いられるところの器官について学ぶ。
3	Speech Sounds, Classification of Vowels	言語音、母音の分類について学ぶ。
4	Classification of Vowels	母音の分類について学び、様々な言語の母音を概観する。
5	Further Classification of Vowels	母音の分類についてさらに見る。
6	Classification of Consonants	子音の分類について学ぶ。
7	Classification of Consonants	子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。
8	Classification of Consonants	子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。
9	Classification of Consonants, Further Analysis of Consonants	子音の発音について見た後、副次的調音について学ぶ。
10	Combination of Sounds	音の連続について学ぶ。
11	Syllables	言語の音声記述で重要な概念である音節という概念について学ぶ。
12	Quantity, Accent	音長、アクセントについてその概略を学ぶ。
13	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について、学ぶ。
14	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について、引き続き学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、必ず内容について質問しますので、必ず読んできてください。さらに関与する概念で新しいものについては、先にご自身で調べておくと、非常に理解が深まります。

まず、文献を読むべく、英語に習熟することが非常に重要です。常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで、発表の準備を怠りなくすること。他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること。の2点が大切です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

Takebayashi, Shigeru (1976). *A Primer of Phonetics*. Tokyo: Iwasaki Linguistic Circle. [入手困難なため、授業支援システム等により配布します。]

【参考書】

以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。
・高橋作太郎（編集）『リーダーズ英和辞典』。第三版。東京：研究社。
学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むには必須です。
・Janssen, S. (ed.) (2019). *The World Almanac and Book of Facts 2020*. New York: The World Almanac Books.
・Philip's Maps (2019). *Philip's Modern School Atlas*. (99th edition.) London: Philip's.

以上の2冊は、英語の文献を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表（50%）、討論への参加（50%）、欠席は基本的に認めません。この評価法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用しますので、パソコンなどの情報端末を用意することが望ましいです。

【その他の重要事項】

言語研究の基礎として、音声に関する研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です。今回のテキストは、とても基礎的なテキストですので、初歩から言語学・音声学の考え方が分かるような構成になっています。授業では、教材の内容を理解するだけでなく、その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように、一緒に議論しながら解説を加えていきます。言語の研究の基礎固めをしたい方、構造主義を基本から理解したい方には、特にオススメの内容になっています。言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します。なお、進め方などについては、履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります。

【担当教員の専門分野等】

言語学、英語学（形態論、統語論、音声学）、英語史など。

【カリキュラム上の位置づけ】

言語・文化に関して、比較・対照するというのを軸に学んでいく2単位の科目です。（今年度は言語の研究法の基本を学んでいきます。）

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key for understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading a textbook on phonetics, which constitutes the foundation of linguistic studies.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three-fold:

1. to familiarise yourself with basic concepts and methodology of language studies,
2. to pursue generalisations through applying them,
3. to get accustomed to reading literature in foreign language(s).

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You should read in advance and be ready for being asked various questions, or being asked for giving comments. According to the MEX regulation, the course of this type expects you to spend 4 hours for preparation and reviewing.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Basically, no absence allowed. Active participation in class sessions 50%, presentations 50%.

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIN500G1 - 106

多言語相関論Ⅲ B

興石 哲哉

サブタイトル：言語の研究方法を学ぶ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが、言語の研究法についてはテクニカルなところがあり、なかなか理解が難しいのが現実です。本授業では、それを克服すべく、基本的な文献を読みながら、主に音声研究以外の言語研究の基本を固めていきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行います。授業では学生にどんどん意味を問いかけていき、教材を日本語にしていってもらいます。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
- 2) 分からない場合、積極的に質問したり、意見を出し合うこと、

の2点です。

課題や授業内容については、「学習支援システム」を用いて、基本的に事後に詳細なコメントを担当者が出しますので、それをさらなる研究等に活かしてください。

最終授業だけでなく、中途でも、折を見て、フィードバックの時間を設けますので、内容についての質問等には随時対処していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	導入、音声学と音韻論について	本科目の概略、学習の仕方等についての説明。その上で、教材を読み始める。
第2回	音韻論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第3回	音韻論について	担当者に順次発表してもらい、第2回の次の部分を読み進め、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第4回	形態論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第5回	形態論について	担当者に順次発表してもらい、第4回の次の部分を読み進め、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第6回	統語論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第7回	統語論について	担当者に順次発表してもらい、第6回の次の部分を読み進め、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第8回	統語論について	担当者に順次発表してもらい、第7回の次の部分を読み進め、関連トピックをより詳細に議論、考察していく。
第9回	意味論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第10回	語用論について	担当者に順次発表してもらい、第9回の次の部分を読み進め、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第11回	言語と文化について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第12回	社会言語学について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第13回	言語接触について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第14回	言語変化について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、必ず内容について質問しますので、必ず読んできてください。さらに関与する概念で新しいものについては、先にご自身で調べておくと、非常に理解が深まります。

まず、文献を読むべく、英語に習熟することが非常に重要です。常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで、発表の準備を怠りなくすること。他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること。の2点が大切です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

基本的に、*Language Files*, 12th edition (2016年版, Department of Linguistics, The Ohio State University, Columbus: The Ohio State University Press) を用いますが、内容は選択します。その他を用いる場合には、授業で指示します。いずれも、「学習支援システム」等を通じ配布します。

【参考書】

以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。
 ・高橋作太郎ら（編集）『リーダーズ英和辞典』第三版。東京：研究社。
 学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むには必須です。
 ・Janssen, S. (ed.) (2019). *The World Almanac and Book of Facts 2020*. New York: The World Almanac Books.
 ・Philip's Maps (2019). *Philip's Modern School Atlas*. (99th edition.) London: Philip's.

以上の2冊は、英語の文献を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

報告、発表（50%）、討論への参加（50%）。場合によっては、小論文を課すこともあります（その場合、「討論への参加」に代えて、「小論文」が50%となります）。欠席は基本的に認めません。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用しますので、パソコンなどの情報端末を用意することが望ましいです。

【その他の重要事項】

言語研究の基礎として、様々な領域の研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です。今回のテキストは非常に基礎的なテキストで、初歩から言語の研究についての考え方が分かるように書かれています。授業では、教材の内容を理解するだけではなく、その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように、一緒に議論しながら解説を加えていきます。言語の研究の基礎固めをしたい人には、特にオススメの内容になっています。言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します。なお、進め方など、履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>英語学、音声学、言語学
 <研究テーマ>英語の形態論を中心とする領域。
 <主要研究業績>

Koshiishi, Tetsuya (2011). *Collateral Adjectives and Related Issues*. Bern: Peter Lang.

【カリキュラム上の位置】

言語・文化に関して、比較・対照するということを軸に学んでいく2単位の科目です。（今年度は言語の研究法の基本を学んでいきます。）

【オフィスアワーについて】

基本的に、木曜日の昼休みに設定していますが、担当者宛にメールをいただければ、随時設定することが可能です。

【進行に関しての注記】

昨年度がそうでしたが、受講者の理解を見て、進路を遅らせます。昨年度の場合には、具体的には、11月半ばまでを、音韻論に費やし、その後形態論に入っただけで、統語論には入りませんでした。

これは、言語学の考え方そのものに、時間をかけて慣れていただくためです。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key to understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading some of the basic literature related to the fields other than phonetics.

【到達目標 (Learning Objectives)】

Three-fold:

1. to familiarise yourself with basic concepts and methodology of language studies,
2. to pursue generalisations through applying them,
3. to get accustomed to reading literature in foreign language(s).

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

You should read in advance and be ready for being asked various questions, or being asked for giving comments. According to the MEX regulation, the course of this type expects you to spend 4 hours for preparation and reviewing.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

- Basically, no absence allowed. Active participation in class sessions 50%, presentations 50%.

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

CUA500G1 - 107

多文化関連論 I A

グアリーニ レティツィア

サブタイトル：ケアから現代文学を読む

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

コロナ禍の影響によってケア労働の重要性、そしてそれを疎かにしてきた社会のあり方を明確となった。この授業では、ジョアン・C. トロントと岡野八代『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』（白澤社、2020年）とケア・コレクティブ『ケア宣言:相互依存の政治へ』（大月書店、2021年）を読んで、家族、コミュニティ、国家など、様々なレベルにおけるケアの実践について考える力を養う。また、具体的な文学作品や文学研究の論文を読んで、ケアの視座から文学・文化研究を分析する方法を身につける。

【到達目標】

- 1) ケアについての基礎的な知識を身につける。
- 2) フェミニズムとケアの視座から文学・文化作品を読むことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

ジョアン・C. トロントと岡野八代『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』（白澤社、2020年）とケア・コレクティブ『ケア宣言:相互依存の政治へ』（大月書店、2021年）を読む。毎回、2名の発表者が、担当する章の内容をまとめ、論点整理やディスカッションのための問題提起を行う（発表時間は20分程度）。

また、ケアと文学研究に関する論文やケアを描く作品を読んで、グループでディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	4/7 オリエンテーション	受講者の自己紹介。授業計画について説明を行う。発表の順番を決める。
第2回	4/14 文学におけるケア	小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』の序章を読んで、文学における“ケア”について考える。
第3回	4/21 『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』第1章	『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』の第1章についての発表
第4回	4/28 『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』第2章	『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』の第2章についての発表
第5回	5/12 『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』第3章	『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』の第3章についての発表
第6回	5/19 文学とケア（論文1）	育児の現代小説に関する論文を読む。
第7回	5/26 文学とケア（論文2）	介護の現代小説に関する論文を読む。
第8回	6/2 『ケア宣言:相互依存の政治へ』序章、第1章	『ケア宣言:相互依存の政治へ』序章、第1章についての発表
第9回	6/9 『ケア宣言:相互依存の政治へ』第2章、第3章	『ケア宣言:相互依存の政治へ』第2章、第3章についての発表
第10回	6/16 『ケア宣言:相互依存の政治へ』第4章、第5章	『ケア宣言:相互依存の政治へ』第4章、第5章についての発表
第11回	6/23 『ケア宣言:相互依存の政治へ』第6章、訳者解説	『ケア宣言:相互依存の政治へ』第6章、訳者解説についての発表
第12回	6/30 文学とケア（作品分析1）	『緊急事態下の物語』から短編小説を読んで、グループでディスカッションを行う。
第13回	7/7 文学とケア（作品分析2）	小林エリカ『脱皮』を読んで、グループでディスカッションを行う。
第14回	7/14 文学とケア（作品分析3）	松田青子「誰のものでもない帽子」を読んで、グループでディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。課題のテキストを必ず事前に読む。発表者は、テキストの内容をまとめ、議論を喚起する形で発表できるように準備する。

【テキスト（教科書）】

ジョアン・C. トロントと岡野八代『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』（白澤社、2020年）価格 ¥ 1,870

ケア・コレクティブ『ケア宣言:相互依存の政治へ』（大月書店、2021年）価格 ¥ 2,420

【参考書】

小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』（講談社、2021年）

佐々木亜紀子、光石亜由美（編）『ケアを描く - 育児と介護の現代小説』（七月社、2019年）

【成績評価の方法と基準】

研究発表とグループワーク 60%、学期末レポート 40%で総合的に評価する。学期末レポートでは、ケアの視座から授業で取り上げられた文学作品について書評を書く（1500字程度）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

発表やレポートを準備するためのパソコンなど。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論

<研究テーマ>現代日本社会における家族、とりわけ父親や父娘関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳に焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。

<主要研究業績>

「娘は父の支配から逃れられるのか? 一角田光代の『ゆうべの神様』と『父のボール』に見る父娘関係」『ジェンダー研究』第23号（公益財団法人東海ジェンダー研究所発）、2021-2

“Mothers Who Kill: Motherhood and Loneliness in Mori ni nemuru sakana and Saka no tochi no ie by Kakuta Mitsuyo,” Il Giappone. Studi e Ricerche (Vol. 1), 2020-12

“An Ustopic Trip to the Country of Amanon: An Analysis of the Father/Daughter Relationship in Kurahashi Yumiko’s Amanonkoku ōkanki,” Orientalia Parthenopea (Vol. 19), 2019-12

「男性支配的社会における女性間の友情物語—一角田光代『対岸の彼女』に見る女同士の絆」『ジェンダー研究』第22号（お茶の水女子大学ジェンダー研究所）、2019-7

【Outline (in English)】

Course outline:

In this class, we will discuss Joan C. Toronto’s “Who Cares? How to Reshape a Democratic Politics,” along with the chapters by Yayoi Okano included in the Japanese edition (2020), and “The Care Manifesto: The Politics of Interdependence” by the Care Collective (2021). Students will learn about the practice of care at various levels, including family, community, and the nation. They will also read specific literary works and academic articles on literary studies.

Learning objectives:

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- 1) Acquire basic knowledge about the ethics of care.
- 2) Read literary and cultural works from the perspective of feminism and care.

Learning activities outside of the classroom:

Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session). They are also expected to be prepared to deliver presentations in class.

Grading Criteria /Policy:

The final grade will be decided based on the following:

Involvement during discussion and presentation: 60%

Final essay: 40%

CUA500G1 - 108

多文化相関論 I B

グアリーニ レティツィア

サブタイトル：ユートピア/ディストピアの視座から身体を表象を見る

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、ユートピアとディストピアの視座から妊娠と出産の表象について学ぶ。文学、映画、アート、サブカルチャーなど、様々なジャンルにおける妊婦/妊夫の身体の可能性について考える。また、社会的な背景を考察しながら、具体的な作品を取り上げ、現代文学・文化が生み出した「ustopia」(utopia+dystopia)の世界を分析する力を養う。

【到達目標】

1. 文学・文化研究におけるユートピア/ディストピアについての知見を得る。
2. 幅広くメディアにおける身体を表象を分析する能力を身につける。
3. 妊娠・出産にまつわる歴史的・社会的な背景を理解し、ジェンダー規範を批判的に考察することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- 第2回～第9回：山崎明子、藤木直実編『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』（青弓社、2018年）や小谷真理『性差事変—平成のポップカルチャーとフェミニズム』（青土社、2021年）などを読む。毎回、2名の発表者が、担当する章の内容をまとめ、論点整理やディスカッションのための問題提起を行う（発表時間は20分程度）。
- 第10回：唯野未歩子監督『三年身籠る』（2006年）を中心にグループディスカッションを行う。
- 第11回：『ヒヤマケンタロウの妊娠』（漫画、NETFLIX ドラマ）を取り上げて、グループディスカッションを行う。
- 第12回～第13回：受講者の個人研究発表

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	9/22 オリエンテーション	受講者の自己紹介。授業計画について説明を行う。発表の順番を決める。
第2回	9/29 『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』序章	『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』序章を読んで、グループディスカッションを行う。
第3回	10/6 『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』第2章、第3章	『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』第2章、第3章についての発表。
第4回	10/13 『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』第4章、第5章	『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』第4章、第5章についての発表。
第5回	10/20 『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』第6章、第7章	『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』第6章、第7章についての発表。
第6回	10/27 『母性のディストピア』第3部	『母性のディストピア』第3部「宮崎駿と母性のユートピア」についての発表。
第7回	11/10 『身体で読むファンタジー』第1章と第5章	『身体で読むファンタジー』第1章「フランケンシュタイン・コンプレックス」と第5章「もののけ姫の汚い、危険な身体」についての発表。
第8回	11/17 『性差事変—平成のポップカルチャーとフェミニズム』第3章	『性差事変—平成のポップカルチャーとフェミニズム』第3章「テクノロジーと世界の変貌」についての発表。
第9回	11/24 『性差事変—平成のポップカルチャーとフェミニズム』第5章	『性差事変—平成のポップカルチャーとフェミニズム』第5章「ディストピアの現在形」についての発表。
第10回	12/1 『三年身籠る』	唯野未歩子『三年身籠る』（小説、映画）を取り上げて、妊婦の表象について考える。
第11回	12/8 『ヒヤマケンタロウの妊娠』	『ヒヤマケンタロウの妊娠』（漫画、NETFLIX ドラマ）を取り上げて、妊夫の表象について考える。
第12回	12/15 個人研究発表（1）	修士論文についての個人研究発表をしてもらいます。
第13回	12/22 個人研究発表（2）	修士論文についての個人研究発表をもらいます。
第14回	1/12 まとめ	授業全体のまとめを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

課題のテキストを必ず事前に読む。

発表者は、テキストの内容をまとめ、議論を喚起する形で発表できるように準備する。

【テキスト（教科書）】

山崎明子、藤木直実（編）『〈妊婦〉アート論- 孕む身体を奪取する』（青弓社、2018年）、価格 ¥ 2,640

【参考書】

宇野常寛『母性のディストピア』（早川書房、2019年）
吉田純子（編）『身体で読むファンタジー—フランケンシュタインからものけ姫まで』（人文書院、2004年）
小谷真理『性差事変—平成のポップカルチャーとフェミニズム』（青土社、2021年）

【成績評価の方法と基準】

研究発表とグループワーク 60%、学期末レポート 40%で総合的に評価する。学期末レポートでは、授業で取り上げられた作品について書評を書く（1500字程度）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

発表やレポートを準備するためのパソコンなど。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論
<研究テーマ>現代日本社会における家族、とりわけ父親や父娘関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳に焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。
<主要研究業績>
「娘は父の支配から逃れられるのか? 一角田光代の『ゆうべの神様』と『父のボール』に見る父娘関係」『ジェンダー研究』第23号（公益財団法人東海ジェンダー研究所発）、2021-2
“Mothers Who Kill: Motherhood and Loneliness in Mori ni nemuru sakana and Saka no tochu no ie by Kakuta Mitsuyo,” Il Giappone. Studi e Ricerche (Vol. 1), 2020-12
“An Ustopic Trip to the Country of Amanon: An Analysis of the Father/Daughter Relationship in Kurahashi Yumiko's Amanonkoku okanki,” Orientalia Parthenopea (Vol. 19), 2019-12
「男性支配的社会における女性間の友情物語—一角田光代『対岸の彼女』に見る女同士の絆」『ジェンダー研究』第22号（お茶の水女子大学ジェンダー研究所）、2019-7

【Outline (in English)】

Course outline:

This course is designed to enhance students' understanding of the representation of pregnancy and childbirth in utopian and dystopian worlds. Students will explore the possibilities of pregnant women/men's bodies as they are depicted in various genres such as literature, film, art, and subculture. In addition, they will learn how ideologies relative to pregnancy, childbirth, and childcare are socially constructed and reproduced. Moreover, they will learn to analyze the "ustopic" worlds created within contemporary literature and culture.

Learning objectives:

- 1) Understand the role of utopia/dystopia in literary and cultural studies.
- 2) Analyze representations of the body in a wide range of media.
- 3) Understand the historical and social context in relation to pregnancy and childbirth, and critically examine gender norms.

Learning activities outside of the classroom:

Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session). They are also expected to be prepared to deliver presentations in class.

Grading Criteria /Policy:

The final grade will be decided based on the following:

Involvement during discussion and presentation: 60%

Final essay: 40%

CUA500G1 - 109

多文化相関論Ⅱ A

熊田 泰章

サブタイトル：人の表象の間文化性

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では間文化性研究の基本的考え方を理論と実例によって学ぶ。そのために、間文化的に生成された文化活動であるヨーロッパ絵画を例として取り上げる。諸文化が相互に共通点を有していることと、その共通点がゆえに相違点が際立つこと、そして、それらの共通点と相違点を相互に認識し合いながら、諸文化が間文化的関係性の中で相互に影響を与えあうことを把握する。「(図)像はいかにして意味を創造するか」という問いをめぐって、この授業を展開する。この問いは、ゴットフリート・ペーム『図像の哲学-いかにイメージは意味をつくるか』が発する問いである。図像は、それが何を表象するものであるかとはかく、古代文明において墳墓装飾や宮殿装飾に用いられ、あるいは、それ以前においても、洞窟の壁画として用いられ、しかして、古典古代のギリシャ・ローマにおいて人の日常の中で人の姿が目に見えるものとなったことを経て、様々な時代の様々な文化での様々な用いられ方を積み重ねながら、今日のすべてが図像化されるにまで至っている。ペーム『図像の哲学』を基本のテキストとして、ペームの問いがいかに発せられたのかを探求し、その問いへの答を検討する。

【到達目標】

図像表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について把握する。
図像表象行為の内在性と超越性について多文化横断的に把握する。
古典古代のギリシャ、そしてそれ以前の古代エジプトにまで遡って、図像表象の歴史をたどり、その継統と断絶を追って、特にルネサンス期フランドルの肖像画とそれ以降の風俗画に着目して整理を進め、今日の図像の氾濫がいかにして生じてきたかについて考察を行う。
使用する文献によって、個々の事例を具体的に知り、それらにおける図像表象の共通性を分析的に知る。
図像表象の研究を通して、間文化性について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

大学と研究科の授業実施方針に則して授業を行います。基本的に教室での対面授業としますが、必要に応じてオンラインでの受講を可とするように処置します。本授業の基本的な授業計画はシラバスに沿って進めますが、変更がある場合には、「学習支援システム」で提示します。本授業の開始日までに具体的な授業方法などを同システムで提示します。
論文精読と教員の説明に基づき、学生が能動的に学ぶ大学院授業とする。
図像研究を通して間文化性を学ぶために、4冊の研究書を順次精読し、かつ相互に参照する分析を行う。毎回、取り扱う箇所を定め、事前に履修者が内容を確認し、学術用語、固有名詞などを調べ、報告する。その報告に基づき、授業の中で内容に対するまとめと批評を行う。
関連する適切な美術展を選び、作品に対する分析を行う。
毎回の授業では、履修者の報告に対する講評を行って、フィードバックとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』	通時的・共時的な文化の共通性
第2回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』	ベンヤミンの今日的意義
第3回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』	ベンヤミンの限界
第4回	ペーム『図像の哲学』	はじめに
第5回	古代エジプトの「肖像画」	死者の表象
第6回	古代エジプトの「肖像画」	生者の表象
第7回	古代ローマの「肖像画」	古代ローマの人間表象
第8回	アレキサンダー大王の表象	持続し、変化する意味
第9回	ボンベイのパン屋夫婦の表象	個人の表象
第10回	ファイユームという転換期	個人の表象
第11回	対話する表象	私たちを見つめるまなざし
第12回	人間の表象の個人化	人間の表象の新たな変化
第13回	存在の不安	存在の不安と個人の表象
第14回	人間の表象に関するこのセメスターのまとめ	取り上げて、考察してきた人間の表象の変遷についての、このセメスターのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、内容を確認し、学術用語等を調べる。
分担発表のための準備をする。
本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛-ルネサンス期フランドル肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002年
ツヴェタン・トドロフ『日常礼賛-フェルメールの時代のオランダ風俗画』塚本昌則訳、白水社、2002年
ゴットフリート・ペーム『図像の哲学-いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版局、2017年
ミシェル・フーコー『マネの絵画』阿部崇訳、筑摩書房、2019年

【参考書】

ジュラルル・ジュネット『芸術の作品I-内在性と超越性』和泉涼一訳、水声社、2013年
ツヴェタン・トドロフ『ゴヤ-啓蒙の光の陰で』小野潮訳、法政大学出版局、2014年
ジョン・A・ウォーカー/サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門-美術史を超えるための方法論-』岸田和也訳、晃洋書房、2001年
ヴァルター・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波現代文庫、2006年

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業における報告に対する評価 50%と最後の期末レポート 50%によって評価する。
具体的事例の分析と考察により、人物表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について、及び、表象行為の内在性と超越性について、多文化横断的に把握したことを確認する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

これまでの学生の意見に基づき、学生の分担発表の計画を明確に定めます。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布と課題提出のために学習支援システムを活用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化記号論、テキスト論
<研究テーマ>間文化性研究
<主要研究業績>

「グローバル化の原理としての記号的従属および動的編成と相互受容-個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第16号、2015年
「唯一であることの相対的価値についての試論」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第15号、2014年
「絵画のナラトロジー試論-知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察」熊田泰章編『国際文化研究への道-共生と連帯を求めて』彩流社、2013年

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class, students will learn the basic concept of intercultural study on theory and examples. For that purpose, we will take European painting, an interculturally generated cultural activity, as an example. Students will understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students are expected to understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.

【Learning activities outside of classroom】

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】

Final grade will be calculated according to presentation(50%) and final report(50%).

CUA500G1 - 110

多文化相関論Ⅱ B

熊田 泰章

サブタイトル：人の表象の間文化性

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では間文化性研究の基本的考え方を理論と実例によって学ぶ。そのために、間文化的に生成された文化活動であるヨーロッパ絵画を例として取り上げる。諸文化が相互に共通点を有していることと、その共通点がゆえに相違点が際立つこと、そして、それらの共通点と相違点を相互に認識し合いながら、諸文化が間文化的関係性の中で相互に影響を与えあうことを把握する。「(図)像はいかにして意味を創造するか」という問いをめぐって、この授業を展開する。この問いは、ゴットフリート・ペーム『図像の哲学-いかにイメージは意味をつくるか』が発する問いである。図像は、それが何を表象するものであるかはともかく、古代文明において墳墓装飾や宮殿装飾に用いられ、あるいは、それ以前においても、洞窟の壁画として用いられ、しかして、古典古代のギリシャ・ローマにおいて人の日常の中で人の姿が目に見えるものとなったことを経て、様々な時代の様々な文化での様々な用いられ方を積み重ねながら、今日のすべてが図像化されるにまで至っている。ペーム『図像の哲学』を基本のテキストとして、ペームの問いがいかに発せられたのかを探索し、その問いへの答を検討する。

春学期「多文化相関論Ⅱ A」の成果を基にする。

【到達目標】

図像表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について把握する。
図像表象行為の内在性と超越性について多文化横断的に把握する。
古典古代のギリシャ、そしてそれ以前の古代エジプトにまで遡って、図像表象の歴史をたどり、その継続と断絶を追って、特にルネサンス期フランドルの肖像画とそれ以降の風俗画に着目して整理を進め、今日の図像の氾濫がいかにして生じてきたかについて考察を行う。
使用する文献によって、個々の事例を具体的に知り、それらにおける図像表象の共通性を分析的に知る。
図像表象の研究を通して、間文化性について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

大学と研究科の授業実施方針に則して授業を行います。基本的に教室での対面授業としますが、必要に応じてオンラインでの受講を可とするように処置します。本授業の基本的な授業計画はシラバスに沿って進めますが、変更がある場合には、「学習支援システム」で提示します。本授業の開始日までに具体的な授業方法などを同システムで提示します。
論文精読と教員の説明に基づき、学生が能動的に学ぶ大学院授業とする。
絵画を通して間文化性を学ぶために、テキストとして4冊の研究書を順次精読し、かつ相互に参照する分析を行う。毎回、取り扱う箇所を定め、事前に履修者が内容を確認し、学術用語、固有名詞などを調べ、報告する。その報告に基づき、授業の中で内容に対するまとめと批評を行う。
関連する適切な美術展を選び、作品に対する分析を行う。
毎回の授業では、履修者の報告に対する講評を行って、フィードバックとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』 ペーム『図像の哲学』	通時的・共時的な文化の共通性 ベンヤミンの意義と限界 ペームの問い
第2回	個人の表象	古典古代からルネサンス
第3回	個人の表象	フランドル
第4回	市民生活の表象	風俗画
第5回	フーコー『マネの絵画』	「チュイルリー公園の音楽会」
第6回	フーコー『マネの絵画』	「オペラ座の仮面舞踏会」
第7回	フーコー『マネの絵画』	「マクシミリアンの処刑」
第8回	フーコー『マネの絵画』	「ボルドーの港」
第9回	フーコー『マネの絵画』	「温室にて」
第10回	フーコー『マネの絵画』	「給仕する女」
第11回	フーコー『マネの絵画』	「笛を吹く少年」
第12回	フーコー『マネの絵画』	「草上の昼食」 「オランピア」
第13回	フーコー『マネの絵画』	「フォーリー・ベルジュールのバー」
第14回	個人の表象の間文化性	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、内容を確認し、学術用語等を調べる。
分担発表のための準備をする。
本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛-ルネサンス期フランドル肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002年
ツヴェタン・トドロフ『日常礼賛-フェルメールの時代のオランダ風俗画』塚本昌則訳、白水社、2002年
ミシェル・フーコー『マネの絵画』阿部崇訳、ちくま学芸文庫、2019年
ゴットフリート・ペーム『図像の哲学-いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版局、2017年

【参考書】

ジェラルド・ジュネット『芸術の作品I-内存在性と超越性』和泉涼一訳、水声社、2013年
ツヴェタン・トドロフ『ゴヤ-啓蒙の光の陰で』小野潮訳、法政大学出版局、2014年
ジョン・A・ウォーカー/サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門-美術史を超えるための方法論-』岸田和也訳、晃洋書房、2001年
ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波現代文庫、2006年

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業における報告に対する評価 50%と最後の期末レポート 50%によって評価する。
具体的事例の分析と考察により、人物表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について、及び、表象行為の内在性と超越性について、多文化横断的に把握したことを確認する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

前年度は学内業務の調整により、この授業を休講としました。これまでの学生の意見に基づき、学生の分担発表の計画を明確に定めます。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布と課題提出のために学習支援システムを活用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化記号論、テキスト論
<研究テーマ>間文化性研究
<主要研究業績>

「グローバル化の原理としての記号的従属および動的編成と相互受容-個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第16号、2015年
「唯一であることの相対的価値についての試論」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第15号、2014年
「絵画のナラトロジー-試論-知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察」熊田泰章編『国際文化研究への道-共生と連帯を求めて』彩流社、2013年

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class, students will learn the basic concept of intercultural study on theory and examples. For that purpose, we will take European painting, an interculturally generated cultural activity, as an example. Students will understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students are expected to understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.

【Learning activities outside of classroom】

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】

Final grade will be calculated according to presentation(50%) and final report(50%).

HIS500G1 - 111

多文化関連論Ⅲ

佐々木 一恵

サブタイトル：歴史学の諸アプローチ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、歴史学における方法論的展開の概要を理解することを目指します。また、歴史学の方法論に基づき研究論文を執筆していただけるようになることを目的とします。今年度は昨今注目されている〈感情の歴史学〉をテーマに議論していきます。

【到達目標】

1. 歴史学におけるこれまでの方法論的特徴とその展開について理解できるようになる。
2. 歴史学の方法論に基づき一次史料を用いて研究論文を書いていただけるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この授業は Zoom で行います。文献の概要を発表者がパワー・ポイントを用いて発表した後、各自が Google Classroom にアップロードしたコメントをベースにディスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1 回	イントロダクション	授業概要の説明
2 回	感情と資本主義 ・経済効率を求めて ・資本主義の論理による親密生 ・感情市場	【テキスト】 ◎エヴァ・イロウズ、ヤーラ・ベンガー・アラルフ「感情資本主義」
3 回	動物に対する感情 ・19世紀の隠された感情 ・20世紀からの感情の解放 ・投影ではない読解と翻訳 ・感情から行動	【テキスト】 ◎エリック・バラデー「動物への情愛」
4 回	強制収容所と感情 ・感情と強制収容所の権力 ・抑留者—感情をもたない存在？ ・物語と証言 ・継承とポストメモリー ・博物館で、学校で ・矯正腫瘍状の歴史家と感情	【テキスト】 ◎サラ・ジャンズビュルジェ「強制収容所の世界—それでもない情動が」
5 回	虐殺と感情 ・怪物—快楽と残酷 ・反=怪物—「普通の人々」にかけられた麻酔 ・人がそれほど普通ではない時には ・死の労働者たち—嫌気、疲労、そして無関心	【テキスト】 ◎リシャール・レクトマン「ジェノサイド実行者は殺害時に何を感じているのか」
6 回	移民・難民収容所と感情 ・世界の動揺—「自分が人間だと実感する」 ・燃え上がる憎悪の中で、好ましからざる者の発明 ・保護権と収容所—疑わしき追放から授任された憐れみまで ・希望に導かれて	【テキスト】 ◎ミシェル・ペラルディ「壁と涙—難民、国外亡命者、移民」
7 回	病・死と感情 ・変容した身体、感情、公共空間 ・喪服と苦痛 ・身体と魂をケアする	【テキスト】 ◎アンヌ・キャロル「身体潰走—病と死に向き合って」

8 回	不安と感情 ・文明への不安 ・安全を脅かされるという定義しがたい感覚 ・怖れの混交 ・大いなる怖れ ・不安の系譜学—堆積した怖れの記憶	【テキスト】 ◎ジャン ジャック・クルティエヌ「不安の時代の『怖れ』」
9 回	恥と感情 ・恥と屈辱 ・恥をかかせようとする意志 ・他者として他者を軽蔑する ・エンターテイメントとしての屈辱 ・主観的に感知される蔑み ・恥辱キャンペーンがもたらす驚くべき代償 ・恥の法則	【テキスト】 ◎クロディヌ・アロシュ「屈辱感—貶す、蔑む、引きずり落とす」
10 回	性・恋愛と感情 ・危険な誘惑 ・性と恋愛の歴史を記述する ・「マス・オブザベーション」プロジェクト—感情のアーカイブ ・「下から見る」感情の意味と重要性	【テキスト】 ◎クレア・ランガマー「恋愛・誘惑・欲望」
11 回	映画と感情 ・映画館で ・ベンヤミンと情動的な無意識 ・認知主義とニューロサイエンス ・ショックという感情と感情によるショック ・エイゼンシュテインとガンズ、あるいは落涙の天才 ・映画、感じることで生を撮影する光学装置 ・感情の諸ジャンル、メロドラマ、コメディ、ホラー映画	【テキスト】 ◎アントワニス・ド・ベック「暗闇で笑い、泣き、怖がること」
12 回	スポーツと感情 ・スポーツマンにおける至上命令—おれの感情を支配せよ ・観客において、黙想と同情のはざままで ・サポーターであるということ ・感情の婉曲化にむけて	【テキスト】 ◎クリスティアン・ブロンベルジュ「スポーツ的情熱」
13 回	演劇と感情 ・ベル・エポック期におえる快楽 ・「潜在意識への入り口にて」 ・責任をもたせるべく感動させること ・至高なるユートピア—残酷さ ・内奥、通告 ・「ヒステリーの彼方、あるいは彼方にて」 ・近くへの入り口にて ・感情の政治	【テキスト】 ◎クリストフ・ビダン、クリストフ・トリオ「感情の演劇性」
14 回	音楽と感情 ・情動の歌声、楽器、理論 ・前衛音楽、エレベーター・ミュージック ・愛、そしてその他の融合について ・エレクトリシティ、他者性	【テキスト】 ◎エステバン・ビンシュ「音楽聴取」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめて Google Classroom に授業が始まる 1 時間前までにアップロードしてください。
- ・文献の発表者はレジュメをパワー・ポイントで作成してください。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

○ジャン=ジャック・クルティエヌ編（小倉孝誠監訳）『感情の歴史 III — 19 世紀末から現代まで』（藤原書店、2021 年）。

【参考書】

- バーバラ・H. ローゼンワイン, リッカルド・クリスティアーニ (伊東剛史ほか訳)『感情史とは何か』(岩波書店、2021年)。
- ヤン・プランパー (森田直子訳)『感情史の始まり』(みすず書房、2020年)。
- ジョルジュ・ヴィガレロ編 (岩下綾ほか訳)『感情の歴史学 I - 古代から啓蒙の時代まで』(藤原書店、2020年)。
- アラン・コルバン編 (井上櫻子ほか訳)『感情の歴史学 II - 啓蒙の時代から19世紀末まで』(藤原書店、2020年)。

【成績評価の方法と基準】

授業への貢献度・参加度・提出物(30点)、発表(70点)で、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【学生が準備すべき機器他】

この授業は Zoom で行いますので、インターネットの環境や通信機器が必要です。

HOPPII での登録をお願いします。HOPPII の「お知らせ」で、授業を行う Zoom の情報をお伝えします。また、この授業では Google Classroom を使用します。初回の授業の後に、Google Classroom への登録をお願いします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

アメリカ合衆国史 思想史 ジェンダー

<研究テーマ>

・アメリカ革新主義思想の宗教・ジェンダー・セクシュアリティからの再考・20世紀転換期アメリカにおける個人主義・リベラリズム・資本主義に抗する信仰運動としての米国聖公会のアンソロ・カトリシズム

<主要研究業績>

○「善き生の回復を求めて—ラルフ・アダムズ・クラムの教会建築論に見る革新主義期アメリカに抗するアンソロ・カトリシズムの想像力(イマジネリー)」『年報アメリカ研究』第56号、2022年。

○「プロテスタンティズムの倫理と革新主義期アメリカの精神—アンソロ・カトリシズムの視点から見る生政治—」『異文化』23号、2022年。

○「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動—生と活動の様式としてのアンソロ・カトリシズム—」『ジェンダー史学』16号、2020年。

○「『第三者』性のポリティクス—19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編—」『アメリカ史研究』42号、2019年。

○「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー—女子教育とジャンヌ・ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イペロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリー—グローバル・ヒストリー—」上智大学出版社、2018年。

○Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).

○“Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” The Japanese Journal of American Studies (no.23, 2012).

【Outline (in English)】

The course introduces basic historiographical issues in the discipline of history. Students are expected to develop the ability to apply historical methods of inquiry to the analysis of their Master's theses/Research papers.

By the end of the course, students are expected to be able to: 1) understand the methodological developments in the discipline of modern history and 2) write research papers based on historical methodology using primary sources.

Students will be expected to read assigned materials and upload one-page summary of the assigned text and the points of interest to Google Classroom before class begins. Presenters of assigned materials should prepare presentations in PowerPoint format.

The final grade is determined by presentations (70%) and assignments (30%).

ART500G1 - 112

多文化芸術論 I

佐藤 千登勢

サブタイトル：映画を読む

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

この授業では、芸術テキストを審美的快楽の体験の場としてのみならず、社会批判の装置として捉え直し、その表現、表象の語る多義性と重層性について考え、議論します。ロシア(ソ連)、チェコ(チェコスロバキア)、ポーランドの文学作品や映画を用いながら、それぞれの国々の社会、経済、文化、歴史、国家間の勢力均衡を解説する作業を通して、多義的記号体系を分析・洞察する力を養います。

【到達目標】

映画作品を中心に、芸術言語が担う審美的機能と社会批判の機能という一見相反する多義的な表現の読解を重ねることで、これを自身の見解や思考の組み立て方に役立てて、論理的に議論やプレゼンテーションを展開する力を獲得することが目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である。また、「DP3」の達成のために望ましい。

【授業の進め方と方法】

旧社会主義国家で創造された芸術テキストは、その国の文化や社会構造、イデオロギー、歴史的背景、国家間の関係を濃厚に映し出す、いわば、体制と人間社会の縮図モデルです。しかし、多義的で重層的な言語(映画言語、音楽言語を含む)により、それは、多様な解釈を許容するとともに、作者の真の意図やメッセージを解説すべき錯綜した迷宮のような作品となっていることも少なくありません。私たちは、手法や表象、形式といった審美的観点に着目すると同時に、『抑圧』『イデオロギーによる民族統合』『民族差別』『冷戦』『ソ連邦崩壊と離散』『ナショナリズム』といった社会的・歴史的キーワードを基に、二重構造の芸術テキストを分析・批評していきます。授業でなされた議論や自身の見解をA4一枚程度にまとめたリアクションペーパーを毎回、提出してもらいます。リアクションペーパーにはコメントを加えて翌週、教場もしくは学習支援システムを通して返却します。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	芸術の機能について—シクロフスキーの『異化』の発見から日常批判へ	ロシア・フォルマリズム宣言としても名高いシクロフスキーの『異化』を基に、『異化—自動化』『日常—非日常』『手法—素材』等の二項対立の芸術上の、また日常における意義を考える。
第2回	芸術の機能について—シクロフスキーの『異化』の発見から日常批判へ(2)	ロシア・フォルマリズムの主導者シクロフスキーが提唱した「異化」の概念について具体例を確認しつつ、理解を深める。
第3回	煽動と挑発—モンタージュ派：エイゼンシテイン	エイゼンシテイン『ストライキ』、『戦艦ボチョムキン』、『十月』の煽動的なモンタージュについて概説。
第4回	煽動と挑発—モンタージュ派：ジガ・ヴェルトフ	都市化と複製技術の発達を背景としたヴェルトフの手法としてのモンタージュについて考察。

- 第5回 プロパガンダー― プドフキン『アジアの嵐』における多様なモンタージュを分析して審美的側面を確認しながら、同時にこの作品が呈示する多民族併合や社会主義革命の正当化という多層的テーマを読む。
- 第6回 プロパガンダー― トゥーリンの映画言語『トゥルクシブ』 プロパガンダの煽動性の記号や表象を現前化させずに、宗教的煽動とも言える超越力的存在と崇高さの創出、サブリミナル的手法によるプロパガンダの力を分析していく。
- 第7回 面従腹背の二重構造― エイゼンシュテイン『イワン雷帝』 エイゼンシュテインの世界的影響力を配下におくためにスターリンが制作依頼した『イワン雷帝』。この作品にはスターリンを批判・揶揄する記号や表象、表現が構造化されている。作品をめぐってのスターリンとエイゼンシュテインとの闘争という背景も交えつつ、概説。
- 第8回 面従腹背の二重構造― アンジェイ・ワイダの映画言語（1） ポーランドがソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、映画テキストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。『灰とダイヤモンド』、『地下水道』を扱う。
- 第9回 検閲からの解放の果て― アンジェイ・ワイダの映画言語（2） 東欧革命、ソ連邦崩壊の後、歴史は、再評価、書き換え、名誉回復を迫られ、表現に検閲は消滅した。その時、「カティンの森事件」をワイダはどう描いたかを検証する。
- 第10回 審美的《イソップ言語》― タルコフスキー『鏡』 幼年時代の回想的要素とドキュメンタリー映像が印象的な『鏡』。だが、幼年期の断片的回想にはスターリン時代の粛清のエピソードが多様な様式で重ねられている。象徴性や映画言語の二重性に着目しつつ、『父性の喪失』についても考えていく。
- 第11回 抵抗と挑発― ヴェラ・ヒティロヴァの映画言語 旧チェコスロバキアの統制から自由になろうとする国民の意志を、二人の自由闊達な少女たちを通してスタイリッシュに描出するセンス、そして映画言語の二重性、台詞と映像の不一致や台詞の重みについて考察。
- 第12回 寓話的諷刺と不条理― シャフナザーロフ『ゼロ・シティ』 ソ連社会を幾重にもパロディ化した不条理作品の珠玉『ゼロ・シティ』を基に、終末期のソ連の表象、シャフナザーロフの映画言語を考察する、また、父親（国家）とは何ものか？ について考える。
- 第13回 寓話的諷刺不条理― アブラーゼ『懺悔』 ソ連で社会現象となった映画『懺悔』。スターリンとヒトラーを融合させたような支配者、彼に両親を粛清された少女。支配者の一族のその後の償いの物語は、史実とシュールな感覚やユーモアを交えて表現される。その寓話的表象に着目しつつ、史実、記憶、不条理について考察していく。

- 第14回 国家と個人― パーヴェル・チュフライ『パパって何？』 ソ連崩壊後のロシア国民のメンタリティを、『父親』に裏切られた「義理の息子」の回想に重ね合わせた寓話的手法とその重みについて検討。『父殺し』の伝統についても考察。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

レジュメの内容や視聴した映像資料に対する自身の見解等をA4一枚程度にまとめたリアクションペーパーを次週回毎に毎回提出する（学習支援システムを利用）。リアクションペーパー作成に要する時間は1時間程度。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。教員の作成した資料を、教場もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】

参考書は使用しませんが、参考文献は、随時、レジュメに掲載します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（50%）、リアクションペーパー（50%）として総合的に判断します。本授業の到達目標の60%以上を達成した学生を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

とくにありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを通して資料配付、課題提示を行うことがありますので、ネットの通信環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

20世紀ロシア文学。ロシア・フォルマリズムを中心とした芸術理論。ソ連およびロシアの映画。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002283/profile.html>

【Outline (in English)】

● Course outline

We consider artistic texts not only as a place for experiencing aesthetic pleasures but also as a device of social criticism, and discuss the polysemy and multiplicity of their expressions and representations.

● Learning Objectives

The aim is to acquire the ability to logically develop discussions and presentations by repeatedly watching movie works and using them to formulate one's own views and thoughts.

● Learning activities outside of classroom

After each class meeting, you will be expected to submit a reaction paper that summarizes your own views on the video materials you watched by the next week. It takes about 1 hour to create the reaction paper.

● Grading Criteria/ Policy

Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(50%) and short reports(50%). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

ART500G1 - 113

多文化芸術論Ⅱ

廣松 勲

サブタイトル：フランコフォニー文学と社会

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

複数文化に跨る社会文化的現象を分析するために、この授業では「カナダ・ケベック州」と「カリブ海域諸島のフランス海外県」という、2つの「フランス語圏（フランコフォニー）」に注目する。いずれの地域もアメリカ大陸の一部であり、当然ながら「英語圏（アングロフォニー）」とも密接に関わる地域である。

これらの地域の芸術作品は、作品の形式的側面に集中した「内在分析」だけではとらえ切れない豊富な問題系を抱えている。そのため、文学・映画テキストに「社会学的なテキスト分析」を施すことで、テキストとコンテクストとの独特の繋がりを、各地域の芸術作品において分析する。

このような具体的な作品分析を行うために、事前に各地域の社会文化的・言語学的状況を紹介することになる。

【到達目標】

この授業では、複数の言語・文化が併存する地域において生産される芸術作品（主に文学と映画）を分析対象として、いかに社会文化的現象が芸術作品に書き込まれるのかを検討する。

とりわけ、英語文化とフランス語文化が併存する「カナダ・ケベック州」、そしてフランス語文化とクレオール語文化が併存する「カリブ海域諸島」を中心にしつつ、学生には文学・映画テキストの「社会学的なテキスト分析」の方法を身に付けてもらうことを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

日本語による講義を行う。受講者は関心のあるテーマまたは作品について調査・分析を行い、それを基にした期末レポートを提出してもらう。

なお、期末レポートについては、フランスまたはフランス語圏に少しでも関連させるならば、自らの研究テーマに即した発表を行うこともできる（比較分析など）。

さらに、毎回の授業においてコメントシートを提出してもらうことで、学生の理解度・考えなどを把握しておきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：フランス語圏とは何か？	「フランコフォニー」や「アングロフォニー」の歴史・地理
第2回	カリブ海域諸島のフランス語圏①	カリブ海域諸島の社会文化的・言語学的状況
第3回	カリブ海域諸島のフランス語圏②	エメ・セゼールの長編詩『帰郷ノート』
第4回	カリブ海域諸島のフランス語圏③	エドゥアール・グリッサンの小説『レザルド川』
第5回	カリブ海域諸島のフランス語圏④	パトリック・シャモワゾーの小説『素晴らしきソリボ』
第6回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑤	カリブ海域諸島の思想
第7回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑥	カリブ海域諸島の映画：『マルチニクの少年』
第8回	カナダ・ケベック州のフランス語圏①	カナダ・ケベック州の社会文化的・言語学的状況
第9回	カナダ・ケベック州のフランス語圏②	ジャック・ゴドブーの小説『やあ、ラルノー！』
第10回	カナダ・ケベック州のフランス語圏③	エミール・オリヴィエの小説『パッサージュ』（邦訳なし）
第11回	カナダ・ケベック州のフランス語圏④	ダニー・ラフェリエール的小説『吾輩は日本作家である』
第12回	カナダ・ケベック州のフランス語圏⑤	カナダ・ケベック州の思想
第13回	カリブ海域諸島からケベック州へ	カリブ海域とケベック州とのつながり：セゼールのドキュメンタリーを紹介して
第14回	総括	社会と芸術とのつながり方

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本講義で扱う文学作品については、1作を除いて、ほぼ全て邦訳が存在する。受講生には、できるだけ翻訳文献にも触れておいて欲しい。

・授業で扱うアメリカ大陸のフランス語圏については、それぞれ自分自身でも社会状況などを事前に調べておいて欲しい。本授業の準備学習・復習時間は、合計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

・特になし。
・毎回資料を配布します。

【参考書】

・平野千香子著『フランス植民地主義の歴史』人文書院、2002年。
・鳥羽美鈴著『多様性のなかのフランス語』関西学院大学出版会、2012年。
・秋田茂著『イギリス帝国の歴史』中公新書、2012年。
・井野瀬久美恵著『興亡の世界史 大英帝国という経験』講談社学術文庫、2017年。

【成績評価の方法と基準】

・平常点と期末レポートに基づき、総合的に評価する。
①平常点（コメントシートなど）：30%
②期末レポート：70%

【学生の意見等からの気づき】

・主に講義科目ではあるが、できるだけ学生が自らの考え・反応などを講義中に述べられるような雰囲気づくりに努めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>フランコフォニー文学

<研究テーマ> 脱植民地化以後のメランコリー、トランスカルチャー等

<主要研究業績> "Mélancolie postcoloniale : relecture de la mémoire collective et du lieu d'appartenance identitaire chez Patrick Chamoiseau et Émile Ollivier" (モントリオール大学提出博士論文)

【Outline (in English)】

This course introduces the foundations of literature of French speaking world (especially in the Americas) to students taking this course. They can learn also the methodology of literary research while reading literary text and social context at the same time.

The goals of this course are to understanding and explaining the socio-cultural situation of francophony literature.

Before and after each class meeting, students will be expected to spend four hours to read the relevant documents.

Your overall grade in the class will be decided based on the followings: in class contributions (discussion, reaction paper, etc): 30%, term-end report: 70%.

POL500G1 - 114

異文化社会論 I A

今泉 裕美子

サブタイトル：地域と国際関係：植民地社会からのアプローチ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

異なる文化をもつ人（及びその集団）同士の関係から植民地社会を捉え、その形成、脱植民地化のプロセスを、人のくらし、移動、諸運動、思想から理解することで、植民地社会が国際関係をどう作り、支え、変化させているのかを学びます。そこで、植民地社会としての経験/現状をもつ地域をとりあげ、考察します。本年度は「沖繩」を対象とし、「復帰 50 年」を迎える沖繩の現状を見据えながら議論します。沖繩の歴史と特徴を日本、東アジア、太平洋という地域の中で学び、これら地域を作り、支え、変化させる主体として捉え直します。

特定の地域を深く考察することで、地域研究の方法にも理解を深めると同時に、現代世界のなかで植民地としての歴史を持つ、あるいは今なお植民地的状況にある諸地域社会に生じる事象、問題の理解につなげます。

【到達目標】

- ①国際関係の行為体としての「地域」概念を理解できる。
- ②植民地社会を分析する視点と方法、鍵となる概念、理論、思想が理解できる。
- ③沖繩に関する情報を歴史的文脈のなかで、学際的な方法を通じて批判的に分析できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

- ①毎回報告者を決め、文献や資料についてレジュメもしくはパワーポイントを作成し、授業開始 4 時間まえまでに学習支援システムの指定された掲示板にアップロードする。報告者は議論するトピックを選び、非報告者も質問やコメントを準備する。
- ②自分の研究テーマや専門分野に引き付けて考え、議論する。
- ③プレゼンテーションに対するフィードバックやレポートを文書にて提出することを求めることがある。提出は学習支援システムを通じて指示された方法で提出する。
- ④授業テーマに関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション—沖繩についての「復帰 50 年」とは	授業の目的と内容の説明、受講生の関心を聞く。
2	沖繩を「植民地」の視点から捉えるとは①—沖繩近現代史の特徴	テキスト (a) を中心に学ぶ。
3	沖繩を「植民地」の視点から捉えるとは②—琉球・近世琉球	テキスト (C) (d) を中心に学ぶ。
4	沖繩を「植民地」の視点から捉えるとは③—1990 年代の「琉球独立論」をめぐって	テキスト (b)(e) を中心に学ぶ。
5	米軍占領下の沖繩①	テキスト (f) 「I の一、戦争と占領を衝く」
6	米軍占領下の沖繩②	テキスト (f) 「I の二、焦点となった復帰」
7	復帰後の沖繩①	テキスト (f) 「II の一、文化意識の再構築」
8	復帰後の沖繩②	テキスト (f) 「II の二、問われゆく復帰」前半
9	復帰後の沖繩③	テキスト (f) 「II の二、問われゆく復帰」後半と「むすび—沖繩のいまへ」 「付 沖繩戦という体験と記録」
10	中間のまとめ	ここまでの授業の論点を整理し、後半の授業につなげる。
11	受講生の関心に基づくテーマ①	テーマに関する文献、映像などを選びディスカッションする。
12	受講生の関心に基づくテーマ②	テーマに関する文献、映像などを選びディスカッションする。
13	受講生の関心に基づくテーマ③	テーマに関する文献、映像などを選びディスカッションする。
14	まとめ	本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

- (a) 鹿野政直「周辺から 沖繩」歴史学研究会『国民国家を問う』青木書店、1994 年。（『化する歴史学』校倉書房、1998 年に再所収）。
- (b) 『週刊金曜日-「沖繩独立論」を考える』1997 年 6 月 20 日
- (c) 高良倉吉「風土と人間- 強い自己意識をもつ島々」安里進他編『沖繩県の歴史』2004 年。
- (d) 豊見山和他編『琉球・沖繩と海上の道』吉川弘文館、2005 年。
- (e) 上村英明他編著『市民の外交』法政大学出版会、2013 年。
- (f) 鹿野政直『沖繩の戦後思想を考える』（岩波現代文庫版）岩波書店、2018 年。

【参考書】

「沖繩を知る事典」編集委員会編『沖繩を知る事典』日本アソシエーツ、2000 年。
 「沖繩を知る事典」編集委員会『沖繩を深く知る事典』日本アソシエーツ、2003 年。
 新沖繩フォーラム刊行会議『けし風』各号。
 越境広場刊行委員会『越境広場』各号。

【成績評価の方法と基準】

【授業の進め方と方法】に基づき以下の配分で評価する。
 授業への参加度・貢献度 30 %、報告 30 %、レポートなどの提出物 40 %。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【学生が準備すべき機器他】

- ・ ZOOM でのオンラインライブ授業に必要な通信機器を準備する。
- ・ 動画や画像を配信する場合があるため、安定的な接続、通信容量に制限がない環境で受講する。

【その他の重要事項】

- ・ 連絡や報告レジュメは学習支援システムの掲示板にて行うため、投稿通知の連絡が入るよう設定すること。
- ・ やむを得ない事情で欠席する場合は事前に連絡すること。事前に連絡出来ないタイミングでやむを得ない事情が生じて欠席した場合は、事後に速やかに連絡すること。
- ・ 社会情勢の変化、これに伴う大学の方針によって授業形態が変化する場合は通知する。
- ・ 沖繩県史、県内の市史など地方自治体史の編さん、執筆に関わって来た。研究では日本、ミクロネシアでの聞き取り、米国議会図書館の Nan'yo Collection や琉球大学付属図書館矢内原忠雄文庫（資料整理を記念して開催された展示会目録 <https://www.lib.u-ryukyuu.ac.jp/library/digia/tenji/yanai/h7300.html>）など複数の機関で、旧南洋群島関係の史料の発掘、整理、公開に関わった。「大文字の歴史」と「小文字の歴史」の関係を、史資料の発掘、分析と同時に、地域住民の経験をどう記録し、歴史として次世代に継承するか、そのための聞き取りの方法、地域外の研究者として地域にいかに関わるのか、を追究している。これらのことを受講生とともに考えてゆきたい。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html> を参照。

【Outline (in English)】

This course will introduce students to understand colonial society consisting of diverse cultural backgrounds under colonial system of international relations. As we focus on Okinawa, students will seek to understand this region through themes include global process of colonization and decolonization, nationalism and identity, militarization as neocolonialism reflecting the complex nature of contemporary global issues. Students will be also familiar with International Studies and Regional Studies.

【Learning Objectives】

Students will be able to:

- ① Understand “region” as an actor to develop and change international relations.
- ② Analyze the issues of colonial societies in the evolution of international relations with understanding of relevant concepts, theories, and thought.
- ③ Critically analyze information and documents pertaining to Okinawa, setting them in historical context and in interdisciplinary perspective.

【Methods】

- ① Students are expected to read assigned readings and related material to be able to engage in active discussion prior to the class. Presenter should upload resume or Power Point of summary and discussion topics of assigned reading via Hoppii until 4-hour before the class. Other students should prepare for comments and questions.
- ② Students are expected to discuss the topics based on students' research field and subject.
- ③ Each student should submit presentation feedback or essay via Hoppii when they are required.
- ④ Schedule is subject to change depending on present situation both at home and abroad related Okinawa or students' interests and understanding.

【Learning activities outside of classroom】

Based on the 【Methods】, the standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

Participation and contribution:30%; Presentation :30 %; Essay and feedback:40%
 Students are required to take more than 60% score in total to pass.

POL500G1 - 115

異文化社会論 I B

今泉 裕美子

サブタイトル：国際関係学 (International Studies)：植民地社会研究からのアプローチ

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

国際○○研究/論/学とは、専門分化した学問が、世界の複雑な事象を分析することを通じて発展してきた。なかでも、国際関係に関する研究の発展過程では、対象を国内から国外へと変化させたことに留まらず、その時々の国際関係とこれを構成する行為体をどう捉え、その相互の関係をいかに特徴づけるかを分析し、また国内と国外の事象の相互連関も対象としてきた。

日本の高等教育機関が「国際関係論」を掲げた教学組織を設け、本格的に取り組み始めたのは、第二次世界大戦後の東京大学においてであった。国際政治学との一体的性格を強めるアメリカの **International Relations (IR)** にはほぼ対応しつつも、広領域学として構成されたことや地域研究を附随させた点にオリジナリティがみられた。

本授業では、敗戦後日本の高等教育機関が、国際関係研究を取り入れるうえでの問題意識や方法、特に社会や文化をも対象とし、歴史的な視点を重視するようになったことに着目する。そこで、広領域学として成立した国際関係学を、その系譜のひとつである植民地社会 (正確には植民及び植民政策) 研究からの発展を確認したうえで、学としての方法論を考察し、現在の国際 (あるいはグローバル) ○○研究/論/学への理解につなげる。

【到達目標】

- ①国際関係研究の進展のなかで、国際関係学の特徴を理解できる。
- ②関連する基本的な概念、理論、思想を理解できる。
- ③国際関係学の方法論、特に“関係性”をめぐる視点や方法、学際的アプローチのなかでの専門分野の追究、を自分の研究テーマや専門分野での取り組みにひきつけて理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

- ①毎回報告者を決め、文献や資料についてレジュメもしくはパワーポイントを作成し、授業開始 4 時間まえまでに学習支援システムの指定された掲示板にアップロードする。報告者は議論するトピックを選び、非報告者も質問やコメントを準備する。
- ②自分の研究テーマや専門分野に引き付けて考え、議論する。
- ③プレゼンテーションに対するフィードバックやレポートを文書にて提出することを求めることがある。提出は学習支援システムを通じて指示された方法で提出する。
- ④授業テーマに関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の目的と内容の説明、受講生の関心を共有する。
2	国際関係学とは何か	テキスト (a) を中心に学ぶ。
3	植民及び植民政策研究、地域研究から「国際関係論」へ：矢内原忠雄	テキスト (c)(d) を中心に学ぶ。
4	出発点としての「国際関係論」：川田侃	テキスト (e) を中心に学ぶ。
5	もう一つの出发点としての「国際関係論」：斎藤孝	テキスト (f) を中心に学ぶ。
6	「広義の国際関係論」：社会・文化への広がり歴史への視点	テキスト (a)(g) を中心に学ぶ。
7	中間のまとめ	ここまでの授業の内容を整理し、後半の授業につなげる。
8	国際関係学の方法論	テキスト (b) を中心に学ぶ。
9	国際関係のなかで専門分野を問い直す①-政治・経済	テキスト (a)(b) を中心に学ぶ。
10	国際関係のなかで専門分野を問い直す②-社会・文化	テキスト (a)(b) を中心に学ぶ。
11	「学際的国際関係論」?	テキスト (h) を中心に学ぶ。

12	国際関係学と地域研究	テキスト (b) (i) を中心に、国際関係の行為体としての「地域」、地域研究の視点と方法を学ぶ。
13	現代世界を分析する	テキスト (b) を中心に議論する。
14	まとめ	本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト (教科書)】

- (a) 百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993 年。
- (b) 百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003 年。
- (c) 木畑洋一「植民政策論・国際関係論」鴨下重彦他編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011 年。
- (d) 今泉裕美子「矢内原忠雄の国際関係研究と植民政策研究-講義ノートを読む」『国際関係学研究』23、1996 年。
- (e) 川田侃『国際関係概論』東京大学出版会、1958 年。
- (f) 斎藤孝『国際関係論入門』(新版) 有斐閣、1981 年。
- (g) 南塚信吾他編『国際関係論基礎研究』福村出版、1976 年。
- (h) 岩田一致『国際関係研究入門 (増補版)』東京大学出版会、2003 年。
- (i) 大島美穂他編『「国際化」する地域研究』文化書房博文社、2009 年。

【参考書】

- 武者小路公秀他編『国際学-理論と展望』東京大学出版会、1976 年。
 衛藤藩吉他編『国際関係論』東京大学出版会、1982 年。
 フレッド・ハリデイ (菊井禮次訳)『国際関係論再考』ミネルヴァ書房、1997 年。
 Bruce Cumings, "Boundary displacement: Area Studies and International Studies during and after the cold war," Bulletin of Concerned Asian Scholars, 29:1(1997):E-publication <https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/14672715.1997.10409695>
 島根國士編『国際文化学への招待』新評論、1999 年。
 平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000 年。
 進藤榮一『現代国際関係学』有斐閣、2001 年。
 『地域研究 (特集：地域研究方法論)』vol.12, No.2, 2012 年。
 酒井啓子編『グローバル関係学とは何か』岩波書店、2020 年。
 鈴木基史他編『国際関係研究の方法』東京大学出版会、2021 年。
 【事典など】
 松原正毅他編『世界民族問題事典 (新訂増補版)』平凡社、2002 年。
 川田侃他編『国際政治経済事典 (改訂版)』東京書籍、2003 年。

【成績評価の方法と基準】

【授業の進め方と方法】に基づき以下の配分で評価する。

授業への参加度・貢献度 30 %、報告 30 %、レポートなどの提出物 40 %。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【学生が準備すべき機器他】

- ・ ZOOM でのオンラインライブ授業に必要な通信機器を準備する。
- ・ 動画や画像を配信する場合があるため、安定的な接続、通信容量に制限がない環境で受講する。

【その他の重要事項】

- ・ 連絡や報告レジュメは学習支援システムの掲示板にて行うため、投稿通知の連絡が入るよう設定すること。
- ・ やむを得ない事情で欠席する場合は事前に連絡すること。事前に連絡出来ないタイミングでやむを得ない事情が生じて欠席した場合は、事後に速やかに連絡すること。
- ・ 社会情勢の変化、これに伴う大学の方針によって授業形態が変化する場合も通知する。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html> を参照。

【Outline (in English)】

The aim of this course is to review the Japanese features of International Studies in institutionalization in Japanese Universities after WWII and to understand of its academic discipline. After WWII, Tokyo University inaugurated "kokusai kankei ron" as a system of education and research of international relations introducing Anglo-American International Relations (IR) with a kind of acculturation. "Kokusai kankei ron" came to prevail in postwar Japan and have its specific feature in the method. This class explore the development of the International Studies originated from colonial studies in the variety of approaches. It will lead to understanding of transformation of traditional disciplines into "International so and so."

【Learning Objectives】

Students will be able to:

- ① Comprehend the Japanese features of International Studies in institutionalization in Japanese Universities after WWII and its academic discipline.
- ② Understand key concepts, theory, and thought of International Studies.
- ③ Comprehend International Studies based on students' research field and topics.

【Methods】

- ① Students are expected to read assigned readings and related material to be able to engage in active discussion prior to the class. Presenter should upload resume or Power Point of summary and discussion topics of assigned reading via Hoppii until 4-hour before the class. Other students should prepare for comments and questions.

- ② Students are expected to discuss the topics based on students' research field and subject.
- ③ Each student should submit presentation feedback or essay via Hoppii when they are required.
- ④ Schedule is subject to change depending on present situation both at home and abroad related the objects of the class or students' interests and understanding.

[Learning activities outside of classroom]

Based on the **[Methods]**, the standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.

[Grading Criteria /Policy]

Participation and contribution:30%; Presentation :30 %; Essay and feedback : 40%

Students are required to take more than 60% score in total to pass.

PSY500G1 - 116

異文化社会論Ⅱ A

浅川 希洋志

サブタイトル：文化はどのように人の心を形成するのか

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際社会で生きる時、私たちは様々な文化的背景を持つ人々との相互理解を通して責任のある判断と行動を期待される。ところが、異文化間理解ということを考えてとき、私たちは異文化に見られる行動様式や思想を理解することが国際社会における他者理解のすべてであると考える傾向にあるように思われる。では、心の働きは文化と関係のない普遍的なものなのだろうか。

本授業では、文化心理学や心理人類学に関わる文献（特に、河合隼雄著『日本文化のゆくえ』、東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』、恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』、斎藤環著『ひきこもり文化論』等）を読み解きながら、心の働きと文化の関連性について学んでいく。

【到達目標】

心の働きと文化の関連性、特に家庭でのしつけや学校教育が子どもたちに何を期待し、そのような期待と文化の間にどのような関連があり、そのような期待を内在化した教育システムの中で、子どもたちがどのような心の働きを身につけていくのか、を理解する。また、私たちが普段普遍的と考えている人間観、発達観、家族観、そしてそれらと深い関わりを持つ心理的機能（心の働き）がいかに特殊な文化に根ざしたものであるかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この授業は、Zoomによるオンライン（リアルタイム配信型）で実施する予定である。

授業はゼミ形式（文献の輪読）で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もあり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第1章「『私』さがし」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第7章「異文化体験の軌跡」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	東洋『日本人のしつけと教育』第1章「意欲の構造」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	東洋『日本人のしつけと教育』第2章「役割社会と受容的勤勉性」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	東洋『日本人のしつけと教育』第3章「内在モデルとしての『いい子』」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	東洋『日本人のしつけと教育』第4章「『気持ち』への関心」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	東洋『日本人のしつけと教育』第5章「滲み込み型のしつけと教育」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	東洋『日本人のしつけと教育』第6章「道徳意識と道徳判断」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
10	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第1章「リサの疑問」、第2章「かくれたカリキュラム」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
11	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第3章「集団の中の個人」、第4章「小さな選民たち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。

- 12 恒吉僚子『人間形成の日米比較』第5章「キング先生の戦い」、第6章「内なるアメリカ、内なる日本」を読む。学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
- 13 『ひきこもり文化論』第4章「『甘え文化』と『ひきこもり』—比較文化的考察」を読む。学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
- 14 授業の総括 授業のまとめを行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備しておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるように準備しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

- ①河合隼雄著『日本文化のゆくえ』（岩波書店、2000年）
 ②東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』（東京大学出版会、1994年）
 ③恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』（中公新書、1992年）
 ④斎藤環著『ひきこもり文化論』（ちくま学芸文庫、2016年）
 *テキストはできる限りPDF化し、授業支援システムにアップする。

【参考書】

必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

「評価基準」：（1）授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論（討論への参加）と（2）報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表（担当日の発表）により、下記の配分で評価する。

「配分（%）」：討論への参加（50%）+ 担当日の発表（50%）

【学生の意見等からの気づき】

受講生が自身の研究を進展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれに与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ポジティブ心理学、文化心理学
 <研究テーマ> （1）フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、（2）文化と心理機能の関連性について
 <主要研究業績>
 『フロー理論の展開』世界思想社（2003年）、「フロー経験の諸側面」島井哲志編『ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版（2006年）、「Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?」Journal of Happiness Studies（2010年）、「『フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造』学文社（2011年）、「楽しさと最適発達の現象学—フロー理論」鹿毛雅治編『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版（2012年）、「クリエイティビティ」チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社（2016年）、「Universal and cultural dimensions of optimal experiences.」Japanese Psychological Research（2016年）、「持続的な幸福（マーズ・セリグマン）—ポジティブ心理学と感情」『臨床心理学』（第20巻第3号）金剛出版（2020年）。

【Outline (in English)】

(1) Course outline

In this seminar, students will explore issues related to culture and psychological functioning by reading more like anecdotal books and articles, and discuss how culture shapes psychological processes of people. Each student's own experiences they have had in different cultures will be welcomed to deepen class discussions.

(2) Learning Objectives

One of the main objectives of this seminar is to understand how educational practices in a culture are intended to bring up children as culturally desired and also expected adults through the educational process of the culture.

(3) Learning activities outside of classroom

Students will be expected to spend 4 hours to understand the course content (2 hours each for before/after class meeting). Besides, students will be expected to spend their daily lives having course topics in the back of their mind.

(4) Grading Criteria/Policy

Final grade will be decided based on following:

In-class contribution (50%), Class-presentation (50%).

PSY500G1 - 117

異文化社会論ⅡB

浅川 希洋志

サブタイトル：文化はどのように人の心を形成するのか

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

異文化社会論ⅡAでは文化の違いから生じる教育システムの違いやそれによって培われる心のあり方に関する文献を読み、心の働きと文化の関連性について考察していくが、本授業ではそのような「文化と心」にまつわる事象を文化心理学の枠組み、つまり文化心理学における理論として捉えなおすことを主たる目的とする。授業では、北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』、リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』等をテキストとして用い、掘り下げた議論の必要なトピックスに関しては適宜、英語論文を含めた原著にあたっていく。また、授業全般を通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを考えていく。

【到達目標】

心の働きと文化の関連性を文化心理学の枠組みの中で捉えることができる。特に、Markus & Kitayama が提唱した文化的自己観のモデルに注目し、人々の持つ文化的自己観が彼らの認知、感情、モチベーションなどどのように関連しているのかが理解できること。また、授業で扱ったトピックスを通して、異文化社会における適応とはどういうことなのか理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この授業は、Zoom によるオンライン（リアルタイム配信型）で実施する予定である。

授業はゼミ形式（文献の輪読）で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もあり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第1章「古代ギリシャ人と中国人は世界をどう捉えたか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第2章「思考の違いが生まれた社会的背景」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第3章「西洋的な自己と東洋的な自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第4章「目に映る世界のかたち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第5章「原因推測の研究から得られた証拠」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第6章「世界は名詞の集まりか、動詞の集まりか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第7章「東洋人が論理を重視してこなかった理由」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第8章「思考の本質が世界共通でないとしたら」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。

10	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第2章「自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
11	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第3章「感情」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
12	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第4章「欧米における自己高揚と日本における自己批判」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
13	ディスカッション	授業で扱った文化心理学的知見が、受講者の修士論文のテーマを発展させる上で、何らかの新しい視点を与え得るものだったかどうかを討論する。
14	授業の総括	授業のまとめを行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備しておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるように準備しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

- ①北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』（共立出版、1998年）
 - ②リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』（ダイヤモンド社、2004年）
- *テキストはできる限りPDF化し、授業支援システムにアップする。

【参考書】

必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

「評価基準」：（1）授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論（討論への参加）と（2）報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表（担当日の発表）により、下記の配分で評価する。
 「配分（%）」：討論への参加（50%）+ 担当日の発表（50%）

【学生の意見等からの気づき】

受講生が自身の研究を発展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれに与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ポジティブ心理学、文化心理学
 <研究テーマ> （1）フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、（2）文化と心理機能の関連性について
 <主要研究業績>
 『フロー理論の展開』世界思想社（2003年）、「フロー経験の諸側面」島井哲志編『ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版（2006年）、「Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?」*Journal of Happiness Studies*（2010年）、「『フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造』学文社（2011年）、「楽しさと最適発達現象学—フロー理論」鹿毛雅治編『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版（2012年）、「クリエイティビティ」チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社（2016年）、「Universal and cultural dimensions of optimal experiences.」*Japanese Psychological Research*（2016年）、「持続的な幸福（マーティン・セリグマン）—ポジティブ心理学と感情」『臨床心理学』（第20巻第3号）金剛出版（2020年）。

【Outline (in English)】

(1) Course outline

This seminar will read theory-oriented books and articles in cultural psychology and try to understand relevant issues with a theoretical framework of cultural psychology. Main topics of this seminar will be on how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships. In addition, what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies will be argued throughout the course.

(2) Learning Objectives

By the end of the course, students are expected to understand (a) how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships, and (b) what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies.

(3) Learning activities outside of classroom

Students will be expected to spend 4 hours to understand the course content (2 hours each for before/after class meeting). Besides, students will be expected to spend their daily lives having course topics in the back of their mind.

(4) Grading Criteria/Policy

Final grade will be decided based on following:

In-class contribution (50%), Class-presentation (50%).

CUA500G1 - 201

ナショナリズム／エスニシティ論A

石森 大知

サブタイトル：文化人類学の諸アプローチ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・本授業では、ナショナリズム・エスニシティ論を文化人類学的視点から学ぶとともに、自らの興味関心あるいは学習・研究テーマと関連付けて考える能力を身につけることを目的とする。
- ・春学期のナショナリズム／エスニシティ論Aでは「文化人類学の諸アプローチ」について学び、秋学期のナショナリズム／エスニシティ論Bにおいてナショナリズム・エスニシティ論の中心的な理論や概念を学ぶための準備とする。

【到達目標】

- ・現代文化人類学に関する専門的な知識を習得する。
- ・文献の内容をただ理解するだけでなく、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの研究テーマの構想・発展につなげる。
- ・ものごとを相対的に捉えることによって得られる他者理解の力や洞察力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- ・本授業はリアルタイム・オンライン型で行う予定です（変更の場合は学習支援システムを通して事前に連絡します）。
- ・本授業は主に文献の輪読形式で行いますが、学生の理解促進のために講義形式も適宜取り入れる。
- ・文献の輪読では、毎回発表者を立てます。発表者はレジュメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
- ・春学期は、現代文化人類学の中心的な概念や理論を広く学ぶ（一方、秋学期は、民族・国家・エスニシティをはじめ、人種主義、反植民地運動、国民統合、先住民運動、国家からの逃避などに関する論文を取り上げる）。
- ・リアクションペーパー等における興味深いコメントや質問等を授業内で取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、履修上の注意、自己紹介、各自の問題関心を発表
第2回	文化相対主義	文化相対主義の諸相に関する文献の発表およびグループ討論
第3回	文化と経済	贈与交換に関する文献の発表およびグループ討論
第4回	家族と親族	家族・親族研究に関する文献の発表およびグループ討論
第5回	紛争・暴力・国家	戦争と平和に関する文献の発表およびグループ討論
第6回	宗教と世界観	宗教概念とアニミズムに関する文献の発表およびグループ討論
第7回	儀礼と国家	人類学的儀礼研究に関する文献の発表およびグループ討論
第8回	エスニシティ	エスニシティ論に関する文献の発表およびグループ討論

第9回	多文化主義	多文化主義論に関する文献の発表およびグループ討論
第10回	開発と文化	開発人類学に関する文献の発表およびグループ討論
第11回	人類学批判	ポストコロニアル論に関する文献の発表およびグループ討論
第12回	自然と文化	存在論的転回に関する文献の発表およびグループ討論
第13回	科学と文化	科学に関する文献の発表およびグループ討論
第14回	総括	春学期のまとめと秋学期の準備

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
- ・授業内で紹介する文化人類学や地域研究の関連文献を読む。
- ・図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
- ・自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
- ・本授業の準備学修・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】

授業中に適宜紹介するが、以下のものを挙げておく。
 内堀基光・山本真鳥（編）『人類文化の現在—人類学研究』放送大学教育振興会、2016年。
 桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論 文化人類学—基本と最新のトピックを学ぶ』ミネルヴァ書房、2018年。
 松村圭一郎・中川理・石井美保（編）『文化人類学の思考法』世界思想社、2019年。

【成績評価の方法と基準】

討論・発表内容、授業への参加態度など平常点（70%）を重視するとともに、授業内で課す予定のレポートやレジュメの内容（30%）も評価対象とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

学生同士の議論がより活発になるような授業運営（議論を引き出すための工夫、発言しやすい雰囲気や授業の流れ）を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用します。

【その他の重要事項】

・第1回目授業には必ず出席してください。事前の連絡や相談もなく第1回目授業を欠席した場合は原則、履修を認めません。

【担当教員の専門分野】

<専門領域>文化人類学、オセアニア地域研究
 <研究テーマ>オセアニア地域を主な対象とし、宗教運動、キリスト教信仰、植民地主義、地域紛争などに関する研究
 <主要研究業績>

石森大知・丹羽典生（編）2019『宗教と開発の人類学—グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。

石森大知 2019「民族性から土着性へ—ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の一側面」『国際文化学研究』53:1-27。

石森大知 2019「新しいロトゥ」としてのパハーイー教—ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』45:1-18。

【Outline (in English)】

This course introduces the basics of cultural anthropology, which seeks to understand cultural diversity in the world. And also, we learn the theories and concepts of nationalism and ethnicity from the perspective of cultural anthropology, and to acquire the ability to think in relation to students own research themes. At the end of the course, students are expected to understand how nation is defined and how people use this concept for nation-building, economic development and welfare policy. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on briefing paper and report (30%) and in class contribution (70%).

CUA500G1 - 202

ナショナリズム／エスニシティ論B

石森 大知

サブタイトル：民族・国家・エスニシティ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、ナショナリズム・エスニシティ論に関連するテーマを扱った論文を講読し、それらと自らの学習・研究テーマを関連付けて考える能力の習得を目指す。具体的には、民族・国家・エスニシティをはじめ、人種主義、反植民地運動、ナショナリズム、国民統合、先住民運動、国家からの逃避などに関する論文を取り上げる。

【到達目標】

- ・太平洋諸島、東南アジア、日本など世界各地の民族誌の講読を通して、ナショナリズムおよびエスニシティの多様性・普遍性に関する洞察力を身につける。
- ・日本語だけではなく、英語の学術論文の内容を的確に理解できるようにする。
- ・文献の内容を理解することに加え、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの研究テーマの構想・発展につなげる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- ・本授業はリアルタイム・オンライン型で行う予定です（変更の場合は学習支援システムを通して事前に連絡します）。
- ・本授業は主に文献の輪読形式で行いますが、学生の理解促進のために講義形式も適宜取り入れる。
- ・文献の輪読では、毎回発表者を立てます。発表者はレジュメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
- ・秋学期は民族・国家・エスニシティをはじめ、人種主義、反植民地運動、国民統合、先住民運動、国家からの逃避などに関する論文を取り上げる（一方、春学期は現代文化人類学の中心的な概念や理論を広く学習する）。
- ・リアクションペーパー等における興味深いコメントや質問等を授業内で取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、授業の概要説明
第2回	民族と国家	民族・国家・エスニシティに関する文献の発表およびグループ討論
第3回	同時代のエスニシティ	エスニシティとその論争に関する文献の発表およびグループ討論
第4回	人種主義と植民地化	人種概念の社会的構築に関する文献の発表およびグループ討論
第5回	反植民地運動と国民統合—太平洋の事例①	太平洋の植民地主義と国家独立に関する講義
第6回	反植民地運動と国民統合—太平洋の事例②	太平洋の反植民地運動に関する文献の発表および討論
第7回	反植民地運動と国民統合—太平洋の事例③	太平洋の国民統合に関する文献の発表および討論
第8回	先住民・エスニシティ・国家①	先住民の権利に関する講義

- 第9回 先住民・エスニシ ティ・国家② 文献A（日本の事例）の発表および討論
- 第10回 先住民・エスニシ ティ・国家③ 文献A（アジアの事例）の発表および討論
- 第11回 国家からの逃避－東南アジアの事例① 文献B（1章）の発表および討論
- 第12回 国家からの逃避－東南アジアの事例② 文献B（5章）の発表および討論
- 第13回 国家からの逃避－東南アジアの事例③ 文献B（6章）の発表および討論
- 第14回 総括 秋学期に学んだことを振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・ 輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
- ・ 授業内で紹介する文化人類学や地域研究の関連文献を読む。
- ・ 図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
- ・ 自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
- ・ 本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】

- 授業中に適宜紹介するが、以下のものを挙げておく。
- 田辺明生ほか（編）『環太平洋地域の移動と人種－統治から管理へ、遭遇から連帯へ』京都大学学術出版会、2020年。
- 深山直子ほか（編）『先住民からみる現代世界－わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年。
- 丹羽典生・石森大知（編）『現代オセアニアの〈紛争〉－脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂、2013年。
- ジェームズ・C・スコット『ゾミア－脱国家の世界史』佐藤仁監訳、みすず書房、2013年。

【成績評価の方法と基準】

討論・発表内容、授業への参加態度など平常点（70%）を重視するとともに、授業内で課す予定のレポートやレジュメの内容（30%）も評価対象とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

学生同士の議論がより活発になるような授業運営（議論を引き出すための工夫、発言しやすい雰囲気や授業の流れ）を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用します。

【担当教員の専門分野】

- <専門領域>文化人類学、オセアニア地域研究
- <研究テーマ>オセアニア地域を主な対象とし、宗教運動、キリスト教信仰、植民地主義、地域紛争などに関する研究
- <主要研究業績>
- 石森大知・丹羽典生（編）2019『宗教と開発の人類学－グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。
- 石森大知 2019「民族性から土着性へ－ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の側面」『国際文化学研究』53:1-27。
- 石森大知 2019「新しいロトゥ」としてのノハーイー教－ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』45:1-18。

【Outline (in English)】

This course introduces the theories and concepts of nationalism and ethnicity from the perspective of cultural anthropology, and to acquire the ability to think in relation to students own research themes. At the end of the course, students are expected to understand how nation is defined and how people use this concept for nation-building, economic development and welfare policy. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on briefing paper and report (30%) and in class contribution (70%).

CUA500G1 - 203

マイノリティ社会論A

曾 士才

サブタイトル：米国の中国系移民

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

①アメリカにおける中国系移民集団、②トランスカルチュラルリズム概念に基づく移民研究、③ホスト社会での共生の可能性と課題、以上3点について分析し、理解を深める。

【到達目標】

中国系移民を主たる事例にマイノリティとしての移民集団の歴史と文化、特に定着後のアイデンティティについての知見の獲得を目標にしている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

グローバリゼーションのもと、国際的規模の移民現象が近代以降見られるようになった。その特徴は個人が主体となって国境を越えて移動する点にある。本授業では、四大移民の一つである中国系移民について、移住の経緯、移住先である欧米におけるコミュニティの形成、第二世代以降のアイデンティティの変化、ホスト社会での民族共生などについて考察したい。今学期は、中国系移民の辿った歴史とともに、定着後の祭りや料理をテーマに、日系移民と比較しながら、考察したい。具体的には選定したテキストの講読と討論を織り交ぜて授業を進めていく。課題へのフィードバックはHoppiiの掲示板で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義1 イントロダクション	授業の進め方の説明、分担決め
第2回	講義1	国際移民、エスニック文化主義、トランスカルチュラルリズム
第3回	講義2	米国におけるアジア系移民の略史
第4回	講読と討論 1-1	ハワイ沖繩系コミュニティ、オキナワン・フェスティバル、エスニック・フード、先住民系文化との交差
第5回	講読と討論 1-2	ハワイのオキナワ料理の創造、ハワイのアメラジアン
第6回	小括と考察	ハワイにおける日系移民やその集団の社会と文化について整理する。映像観賞。
第7回	講読と討論 2-1	移民国家アメリカの誕生
第8回	講読と討論 2-2	中国人移民と南北戦争・再建期、苦力、異教徒
第9回	講読と討論 2-3	「国民」の管理、排華法
第10回	講読と討論 2-4	中国系移民、日系移民と二つの世界大戦
第11回	講読と討論 2-5	アジア系アメリカ人の戦後、モデル・マイノリティ
第12回	講読と討論 2-6	米国生まれのチャプスイ、日本生まれのフォーチュンクッキー
第13回	講読と討論 2-7	ハワイの中国系のエスニック・フェスティバル

第14回 まとめと考察

米国における中国系移民やその集団の歴史と文化について整理するとともに、中国系移民、日系移民の比較分析を試みる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。授業日程と講読する論文名のリストは初回の授業で配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

A 白水敏彦編『移動する人びと、変容する文化—グローバリゼーションとアイデンティティ』お茶の水書房 2008年（1章～4章：講読1の教材；5章：講読2-7の教材）

B 貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』岩波新書 2018年（各自で要購入）

【参考書】

江淵一公編『トランスカルチュラルイズムの研究』明石書店 1998年
S. カースルズ/M. J. ミラー『国際移民の時代（第4版）』名古屋大学出版会 2011年

ロバート・G. リー（貴堂嘉之訳）『オリエンタルズ：大衆文化のなかのアジア系アメリカ人』岩波書店 2007年

中町泰子「日系チャブスレストランにおけるフォーチュンクッキーの受容」『神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター年報非文字資料研究』（5）, 173 - 186, 2009年

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加 70%、期末レポート 30%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化人類学、中国民族学

<研究テーマ>華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ

<主要研究業績>

『日本華僑社会の歴史と文化—地域の視点から』明石書店、2020年（共編著書）

「戦中・戦後における神戸華僑の体験—華僑学校の教職員の事例」『異文化（論文編）』第19号（法政大学国際文化学部）、2018年

「日本残留中国人—札幌華僑社会を築いた人たち」今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、2016年

『落地生根—神戸華僑と神阪中華会館の百年<増補版>』研文出版、2013年（中華会館編、共著）

【Outline (in English)】

(Course Outline)

This course deals with the history of Chinese migrant in the United States and their acculturation. It also deals with the history and acculturation of Japanese migrant in the United States.

(Learning Objectives)

At the end of the course, participants are expected to (1) obtain basic knowledge about the history and culture of Chinese migrant in the United States, (2) enhance the basic concept of transculturalism and ethnic culturalism.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, participants will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text and prepared a resume. Your required study time is two hours for each class meeting. Your study time will be two hours.

(Grading Criteria/Policy)

Final grade will be calculated according to the following process: in-class contribution (70%) and term-end report (30%).

CUA500G1 - 204

マイノリティ社会論B

曾 士才

サブタイトル：米国と中国における先住民

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

①現国民国家と少数民族、先住民族、②マイノリティの文化とアイデンティティ、以上2点について分析し、理解を深めていく。

【到達目標】

現代世界とエスニシティを読み解く知見と力を身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

フランス革命後に誕生した国民国家がその後世界中に広まるなか、国家権力を握った強大な民族へ従属する地位に追いやられた先住少数民族集団は、不平等な状況下で、差別や偏見にさらされながらも、自らの文化の維持継承を図り、アイデンティティを追求してきた。今学期は、主に米国や中国の先住少数民族を事例に、民族の文化とアイデンティティの変容を見ていきたい。課題へのフィードバックは Hoppii の掲示板で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	自己紹介（志望動機）、授業説明、教材の配布
第2回	講義1	民族とエスニシティについて
第3回	講義2	米国の先住民族、中国の少数民族
第4回	講読と議論1	事例研究①：ラコタ・スーの概況
第5回	講読と議論2	事例研究①続：ラコタ・スーの精神世界の現在
第6回	講読と議論3	事例研究②：ナバホの概況
第7回	講読と議論4	事例研究②続：ナバホの民族芸能の現在
第8回	講読と議論5	事例研究③：ホピの概況
第9回	講読と議論6	事例研究③続：ホピのインディアナ・ジュエリー
第10回	講読と議論7	事例研究④：ラフの宗教
第11回	講読と議論8	観光開発と先住民
第12回	講読と議論9	事例研究⑤：ミャオ族の観光開発
第13回	講読と議論10	事例研究⑥：中国貴州省のエコ・ミュージアム
第14回	講義とまとめの議論	先住少数民族の文化とアイデンティティについて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。授業日程と講読する論文名のリストは初回の授業で配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テーマごとにプリントを配布

【参考書】

綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂 1993年

綾部恒雄編『アメリカの民族：ルツボからサラダボウルへ』弘文堂 1992年

末成道男、曾士才編『世界の先住民族：ファースト・ピーブルズの現在01 東アジア』明石書店 2005年

富田虎男、スチュアートヘンリ編『世界の先住民民族：ファースト・ピープルズの現在 07 北米』明石書店 2005 年
綾部恒雄編『世界の先住民民族：ファースト・ピープルズの現在 10; 失われる文化・失われるアイデンティティ』明石書店 2007 年

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加 70 %、期末レポート 30 %。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化人類学、中国民族学

<研究テーマ>

華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ

<主要研究業績>

「聖なる時空の現出とその観光資源化」長谷川清・河合洋尚編『資源化される「歴史」—中国南部諸民族の分析から』風響社 2019 年

「中国貴州省における生態博物館の二〇年」塚田誠之編『民族文化資源とポリテクス—中国南部地域の分析から』風響社 2016 年

「西南中国のエスニック・ツーリズム」鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶応義塾大学出版会、2009 年

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

GDR500G1 - 205

ジェンダー論

佐々木 一恵

サブタイトル：ジェンダー史の展開

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ジェンダーの視点から歴史を捉えていきます。これまでのジェンダー史の取り組みや成果をたどるとともに、方法論としてのジェンダー史学について考察していきます。そこから、国際文化学におけるジェンダー史の研究論文を書いていけるようになることを目指します。

【到達目標】

1. ジェンダー史の視点や方法論について基礎的な理解ができるようになること。
2. ジェンダー史の視点や方法論を、自分自身の研究に応用できるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この授業は Zoom で行います。文献の概要を発表者がパワー・ポイントを用いて発表した後、各自が Google Classroom にアップロードしたコメントをベースにディスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要に関する説明
第 2 回	・人種資本主義	【テキスト】 『帝国のヴェール』序文
第 3 回	・アメリカ帝国主義と人種・ジェンダー	【テキスト】 『帝国のヴェール』第 1 章
第 4 回	・19 世紀アメリカにおけるフリー・ラブ思想	【テキスト】 『帝国のヴェール』第 2 章
第 5 回	・黒人女性が経験した人種差別的交差性	【テキスト】 『帝国のヴェール』第 3 章
第 6 回	・クィア理論—概念	【テキスト】 『帝国のヴェール』第 5 章
第 7 回	・インドにおけるゲイ向け観光	【テキスト】 『帝国のヴェール』第 6 章
第 8 回	・インターセクショナルリティとは何か？ その 1	【テキスト】 『インターセクショナルリティ』第 1 章前半
第 9 回	・インターセクショナルリティとは何か？ その 2	【テキスト】 『インターセクショナルリティ』第 1 章後半
第 10 回	・批判的な探求と実践としてのインターセクショナルリティ その 1	【テキスト】 『インターセクショナルリティ』第 2 章前半
第 11 回	・批判的な探求と実践としてのインターセクショナルリティ その 2	【テキスト】 『インターセクショナルリティ』第 2 章後半
第 12 回	・インターセクショナルリティの歴史を整理する？ その 1	【テキスト】 『インターセクショナルリティ』第 3 章前半
第 13 回	・インターセクショナルリティの歴史を整理する？ その 2	【テキスト】 『インターセクショナルリティ』第 3 章後半
第 14 回	総括	今学期のまとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめて Google Classroom に授業が始まる 1 時間前までにアップロードしてください。
・文献の発表者はレジュメをパワー・ポイントで作成してください。
・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

○荒木和華子、福本圭介編著『帝国のヴェール—人種・ジェンダー・ポストコロニアリズムから解く世界』（明石書店、2021 年）。

○パトリシア・ヒル・コリンズ、スルマ・ビルゲ（小原理乃訳、下地ローレンス吉孝監訳）『インターセクショナルリティ』（人文書院、2021 年）。

【参考書】

授業の中で紹介していきます。

【成績評価の方法と基準】

- ・授業への貢献度・参加度（30％）
- ・授業内での文献発表（70％）

【学生の意見等からの気づき】

N / A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

アメリカ合衆国史 思想史 ジェンダー

<研究テーマ>

・アメリカ革新主義思想の宗教・ジェンダー・セクシュアリティからの再考
 ・20世紀転換期アメリカにおける個人主義・リベラリズム・資本主義に抗する信仰運動としての米国聖公会のアングロ・カトリシズム

<主要研究業績>

○「善き生の回復を求めて—ラルフ・アダムズ・クラムの教会建築論に見る革新主義期アメリカに抗するアングロ・カトリシズムの想像力（イマジェリー）」『年報アメリカ研究』第56号、2022年。

○「プロテスタンティズムの倫理と革新主義期アメリカの精神—アングロ・カトリシズムの視点から見る生政治—」『異文化』23号、2022年。

○「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動——生と活動の様式としてのアングロ・カトリシズム」『ジェンダー史学』16号、2020年。

○「『第三者』性のポリテイクス—19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編—」『アメリカ史研究』42号、2019年。

○「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー—女子教育とジャンヌ=ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イベロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリー—ナショナルを超えて』上智大学出版社、2018年。

○ *Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).

○ “Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” *The Japanese Journal of American Studies* (no.23, 2012).

【Outline (in English)】

The course introduces an overview of the standpoints and methodologies of gender history so that students can develop the ability to examine issues of gender cross-culturally and inter-racially.

By the end of the course, students are expected to be able to: 1) acquire a basic understanding of the perspectives and methodologies of gender history and 2) use the perspectives and methodologies of gender history to their own research.

Students will be expected to read assigned materials and upload one-page summary of the assigned text and the points of to Google Classroom before class begins. Presenters of assigned materials should prepare presentations in PowerPoint format.

The final grade will be decided by contribution to class discussion (30%) and presentation (70%).

ARSa500G1 - 206

多言語社会論 A

大中 一彌

サブタイトル：現代ヨーロッパの基礎研究

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語圏やヨーロッパを中心とし、複数の言語や文化をめぐる関係性にフォーカスしながら、政治や社会について専門的に学びます。

【到達目標】

・使用言語は日本語とする。英語、フランス語など言語の運用能力の習得はこの授業の到達目標に入らない。

・必ずしも現代ヨーロッパについて専門的に学んだことのない方をふくめ、大学院生として研究をおこなうのに最低限必要な教養を身につける。

・【教科書】フランスの歴史についての基礎的な知識を得る。

・【映像】時事問題などより現代的な話題と教科書で得た知識を関連づけられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

1. 教科書の輪読
2. 毎週の授業で簡単な話題提供（1人5分程度）
3. 映像の分析

この授業は、リアルタイム・オンライン授業（Zoom）で実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	初顔合わせ	授業計画の説明
2	パリはなんとっても花の都	教科書 4-8 頁の講読、学生による話題提供
3	まとまりのよい国土	教科書 8-11 頁の講読、学生による話題提供
4	義務教育普及は日仏ともに	教科書 12-18 頁の講読、学生による話題提供
5	家庭ではフランス語を話さない地方がある	教科書 18-21 頁の講読、学生による話題提供
6	時代を逆に眺めるとだんだん減る国土	教科書 22-30 頁の講読、学生による話題提供
7	「国引き」の凄い話を一つ	教科書 30-34 頁の講読、学生による話題提供
8	フランス人の頭に入っている古代史の要点	教科書 34-38 頁の講読、学生による話題提供
9	他の地方ではわからない地方の心	教科書 38-41 頁の講読、学生による話題提供
10	ケルト暮らしの長さは縄文暮らしに匹敵	教科書 42-46 頁の講読、学生による話題提供
11	ローマ支配下の「ガロ=ロマン」文明	教科書 46-50 頁の講読、学生による話題提供
12	フランク族のガロ=ロマン化	教科書 50-55 頁の講読、学生による話題提供
13	ブルトン人がらみで仏英関係を見る	教科書 55-60 頁の講読、学生による話題提供
14	まとめ	予備日

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

（ア）教科書の次回の範囲を予習してきてください。

(イ) 指定する LMS (学習支援システム-Hoppii か Google Classroom) の場所に、話題提供用のリンクと文章を授業前に貼り付けてください。

(ウ) この授業の準備や復習に必要な学習時間は、上記 (ア) (イ) を行うのに必要な時間とします。日本語やその他の言語の習熟度が異なる学生が履修する授業であるため、一律の時間の長さは掲載しませんが、大学設置基準に鑑みた場合、2単位の講義及び演習の準備・復習時間は1回につき4時間以上とされています。

【テキスト (教科書)】

篠沢秀夫『フランス三昧』中公新書、2006年。

【参考書】

鹿島茂編『バースデイ・セイント』飛鳥新社、2000年。

【成績評価の方法と基準】

(ア) 学生による発表 (話題提供1回3点) 55%

(イ) 授業参加の積極性 (担当範囲外での発言など) 30%

(ウ) その他 (授業運営への協力など) 15%

【学生の意見等からの気づき】

法政大学が提供している LMS (学習支援システム-Hoppii や Google Classroom) を、Zoom と併用しますが、中華人民共和国など Google への接続が困難な国から接続せざるをえない履修者がいた場合には、配慮をします。

就職活動などによる欠席者のために、Zoom の授業録画などを、履修者のみのあいだで視聴できるかたちで共有しています。

2020年度に続き、2021年度もリアルタイム・オンライン授業を行いました。教室における対面授業に比べると、オンラインにおける学生間のコミュニケーションには難しいところがありますが、比較的雰囲気は良かったのではないかと思います。教員も努力しますが、履修学生の皆さんも、できれば Web カメラを ON にするなどして、活発な雰囲気づくりにご協力ください。

【学生が準備すべき機器他】

①資料の配布や学生からの成果物の提出、その他さまざまな連絡は、基本的にすべてウェブ上 (学習支援システム-Hoppii 等) で行ないます。

②パソコン、タブレット等を用いたプレゼンテーションを行って頂きます。Zoom 上での画面共有をもちいたプレゼンテーションをしたことがない方は、法政大学大学院から Zoom のアカウントが配布されますので、練習をしておいてください。

③学外から法政大学図書館のオンラインデータベース (JapanKnowledge や PressReader の利用を推奨しています) が利用できるよう、VPN 接続の使い方をマスターしてください。

④法政大学が提供している VPN 接続の使用方法については「全学ネットワークシステムユーザ支援 WEB サイト / VPN サービス」を検索、参照してください。

【その他の重要事項】

①いわゆる日本の教育課程を経てきた大学院生だけでなく、外国大学を経て法政大学大学院に留学しにきている大学院生や研修生、各種コンソーシアムの大学院生、法政大学国際文化学部の学部生の履修を歓迎します。

②学外の方でこの科目への参加を希望される方は、科目等履修生としてご参加下さい。詳しくは法政大学大学院の事務窓口までお問合せ下さい。

③教科書となっている篠沢教授の文章は、初学者にわかりやすく、また人柄がしのばれて面白いですが、講師とは意見が異なる場合があります。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001982/profile.html>

私の研究指導 (論文主査) で修士論文を執筆することを希望される方に向けたお願いを、学術研究データベースに記してありますので、該当する方は必ず出願する前にご覧ください。

【Outline (in English)】

[Course Outline]

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

[Learning Objectives]

1) By taking this course, students, including those who have not necessarily studied modern Europe in a specialized way, will acquire the knowledge necessary to conduct independent research at the graduate level.

2) Textbook readings will provide students with a basic knowledge of French history and culture.

3) Students will watch video clips in class to help them relate historical knowledge from the textbook readings to contemporary political, social, and cultural topics in Europe.

[Learning activities outside of classroom]

(a) Read the textbook assigned each session.

(b) Post a link and a text for your topic in the classroom on the designated LMS (Learning Support System - Hoppii or Google Classroom) before each session.

(c) The study time required for preparation and review for this course will be the time required to do (a) and (b) above. Since this course is taken by students with different levels of proficiency in Japanese and other languages, a uniform length of time will not be indicated. However, according to the Standards for the Establishment of Universities, the preparation and review time for a two-credit lecture or seminar should be at least four hours per session.

[Grading Criteria/Policy]

(a) Topics presented by students - 55%

(b) Active participation in discussions - 30%.

(c) Other contributions (e.g., cooperation in class management) - 15%.

ARsA500G1 - 207

多言語社会論 B

大中 一彌

サブタイトル：現代ヨーロッパの基礎研究

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語圏やヨーロッパを中心とし、複数の言語や文化をめぐる関係性にフォーカスしながら、政治や社会について専門的に学びます。

【到達目標】

- ・使用言語は日本語とする。英語、フランス語など言語の運用能力の習得はこの授業の到達目標に入らない。
- ・必ずしも現代ヨーロッパについて専門的に学んだことのない方をふくめ、大学院生として研究をおこなうのに必要な教養を身につける。
- ・【教科書】 フランスの歴史についての基礎的な知識を得る。
- ・【映像】 時事問題などより現代的な話題と教科書で得た知識を関連づけられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

1. 教科書の輪読
 2. 毎週の授業で簡単な話題提供（1人5分程度）
 3. 映像の分析
- この授業は、リアルタイム・オンライン授業（Zoom）で実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	新学期の顔合わせ	授業計画の説明
第2回	ノルマン人がらみで仏英関係を見る	教科書 60-63 頁の講読、学生による話題提供
第3回	国家観念の芽生えは百年戦争	教科書 64-71 頁の講読、学生による話題提供
第4回	ルネッサンスは神に人間の尊厳を主張	教科書 71-75 頁の講読、学生による話題提供
第5回	ナントの勅令は関が原の二年前	教科書 75-78 頁の講読、学生による話題提供
第6回	ブルボン王朝による国勢の得失	教科書 78-83 頁の講読、学生による話題提供
第7回	大革命によるキリスト教の否定	教科書 83-90 頁の講読、学生による話題提供
第8回	大革命の発明 「国民国家」と「徴兵制」	教科書 91-98 頁の講読、学生による話題提供
第9回	「文化」と「文明」の区別	教科書 174-178 頁の講読、学生による話題提供
第10回	中央集権性	教科書 178-181 頁の講読、学生による話題提供
第11回	自己完結性	教科書 181-189 頁の講読、学生による話題提供
第12回	自己完結性は自己満足に結びつく	教科書 190-193 頁の講読、学生による話題提供
第13回	革命はフランスの自己完結性の実現	教科書 193-197 頁の講読、学生による話題提供
第14回	まとめ	予備日

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(ア) 教科書の次回の範囲を予習してきてください。

(イ) 指定する LMS（学習支援システム-Hoppii か Google Classroom）の場所に、話題提供用のリンクと文章を授業前に貼り付けてください。

(ウ) この授業の準備や復習に必要な学習時間は、上記（ア）（イ）を行うのに必要な時間とします。日本語やその他の言語の習熟度が異なる学生が履修する授業であるため、一律の時間の長さは掲載しませんが、大学設置基準に鑑みた場合、2単位の講義及び演習の準備・復習時間は1回につき4時間以上とされています。

【テキスト（教科書）】

篠沢秀夫『フランス三昧』中公新書、2006年。

【参考書】

鹿島茂編『パースデイ・セイント』飛鳥新社、2000年。

【成績評価の方法と基準】

- (ア) 学生による発表（話題提供1回3点）55%
- (イ) 授業参加の積極性（担当範囲外での発言など）30%
- (ウ) その他（授業運営への協力など）15%

【学生の意見等からの気づき】

法政大学が提供している LMS（学習支援システム-Hoppii や Google Classroom）を、Zoom と併用しますが、中華人民共和国など Google への接続が困難な国から接続せざるをえない履修者がいた場合は、配慮します。

また就職活動などによる欠席者のために、Zoom の授業録画などを、履修者のみのあいだで視聴するかたちで共有しています。2020年度に続き、2021年度もリアルタイム・オンライン授業を行いました。教室における対面授業に比べると、オンラインにおける学生間のコミュニケーションには難しいところがありますが、比較的雰囲気は良かったのではないかと思います。教員も努力しますが、履修学生の皆さんも、できれば Web カメラを ON にするなどして、活発な雰囲気づくりにご協力ください。

【学生が準備すべき機器他】

- ①資料の配布や学生からの成果物の提出、その他さまざまな連絡は、基本的にすべてウェブ上（学習支援システム-Hoppii 等）で行ないます。
- ②パソコン、タブレット等を用いたプレゼンテーションを行って頂きます。Zoom 上での画面共有をもちいたプレゼンテーションをしたことがない方は、法政大学大学院から Zoom のアカウントが配布されますので、練習をしておいてください。
- ③学外から法政大学図書館のオンラインデータベース（JapanKnowledge や PressReader の利用を推奨しています）が利用できるよう、VPN 接続の使い方をマスターしてください。
- ④法政大学が提供している VPN 接続の使用方法については「全学ネットワークシステムユーザ支援 WEB サイト / VPN サービス」を検索、参照してください。

【その他の重要事項】

- ①いわゆる日本の教育課程を経てきた大学院生だけでなく、外国大学を経て法政大学大学院に留学しにきている大学院生や研修生、各種コンソーシアムの大学院生、法政大学国際文化学部の学部生の履修を歓迎します。
- ②学外の方でこの科目のみの聴講を希望される方は、科目等履修生としてご参加下さい。詳しくは法政大学大学院の事務窓口までお問合せ下さい。
- ③教科書となっている篠沢教授の文章は、初学者にわかりやすく、また人柄がしのばれて面白いですが、講師とは意見が異なる場合があります。
- ④この授業は、秋学期（後期）のみでも受講できます。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001982/profile.html>
私の研究指導（論文主査）で修士論文を執筆することを希望される方に向けたお願いを、学術研究データベースに記してありますので、該当する方は必ず出願する前にご覧ください。

【Outline (in English)】

【Course Outline】

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

[Learning Objectives]

1) By taking this course, students, including those who have not necessarily studied modern Europe in a specialized way, will acquire the knowledge necessary to conduct independent research at the graduate level.

2) Textbook readings will provide students with a basic knowledge of French history and culture.

3) Students will watch video clips in class to help them relate historical knowledge from the textbook readings to contemporary political, social, and cultural topics in Europe.

[Learning activities outside of classroom]

(a) Read the textbook assigned each session.

(b) Post a link and a text for your topic in the classroom on the designated LMS (Learning Support System - Hoppii or Google Classroom) before each session.

(c) The study time required for preparation and review for this course will be the time required to do (a) and (b) above. Since this course is taken by students with different levels of proficiency in Japanese and other languages, a uniform length of time will not be indicated. However, according to the Standards for the Establishment of Universities, the preparation and review time for a two-credit lecture or seminar should be at least four hours per session.

[Grading Criteria/Policy]

(a) Topics presented by students - 55%

(b) Active participation in discussions - 30%.

(c) Other contributions (e.g., cooperation in class management) - 15%.

多民族共生論 I A

松本 悟

サブタイトル：東南アジア・日本の開発と民族

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は「開発と民族」をテーマとし、民族概念、東南アジアの開発と民族、日本の民族問題という3つのモジュールで議論を行う。それを通して、民族という視点から開発や国家を捉えられるようにする。

【到達目標】

(1) 民族、人種、少数民族、部族、先住民族をめぐる議論を理解し説明できる。
(2) 言語、健康、教育、インフラ整備など、開発課題と民族の関係を批判的に理解し、東南アジアや日本の事例を使って論理的に自らの見解を述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

■基本方針：入国できない留学生や基礎疾患を持つ学生に配慮しリアルタイムオンライン授業で実施する。授業効果など、履修者の希望があれば対面授業に切り替える可能性はある。

■第1回は教員が担当し、第2回からは事前課題文献をもとに学生が発表・議論する。進め方は以下の通り。

(1) 履修者全員が事前課題文献(20頁程度を想定)を熟読し、①「文献の簡潔な要約」(15分以内)、②「この文献から重要だと考えた点」を3つ程度とそう考えた理由、③そこから導いた論点(履修者同士で議論したい点)を発表する。

(2) (1)を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り(全ての論点でもよい)議論する。

(3) 必要に応じて教員が補足授業を行う。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の狙いを説明し、履修者の関心を引き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	概念①民族理論の展開と課題	1980年代の社会学の文献を通して民族という概念について考える。
3	概念②少数民族を考える座標	東南アジアの少数民族に関する文献をもとに、少数民族を考える視点について考える。
4	概念③民族・国家・言語	19世紀以降のヨーロッパでの議論を通じて、民族と言語を繋げることの背景と問題について考える。
5	概念④先住民族の登場	開発学で先住民族が着目されるようになった歴史的背景を理解し、この概念との付き合い方を考える。
6	総合討論 I	第2回～第5回の学びをもとに、「開発と民族」を考える上で留意すべきことを議論する。
7	東南アジアの開発と民族①タイ	タイの山地民をめぐる論争を通して開発と民族について考える。
8	東南アジアの開発と民族②ラオス	北ラオスの焼き畑民の調査を通して開発と民族について考える。
9	東南アジアの開発と民族③メコンデルタ	民族が混在するメコンデルタのベトナム戦争の記憶を通して開発と民族について考える。
10	東南アジアの開発と民族④	ミャンマーを追われるロヒンギヤの歴史を通して開発と民族について考える。
11	日本の民族問題①単一民族国家論	なぜ、いつから日本が単一民族国家と言われるようになったのかを通して、国と民族の関係を考える。
12	日本の民族問題②アイヌ民族の健康問題	健康の社会的決定要因からアイヌ民族差別について考える。
13	日本の民族問題③自ら語ること	とくく調査対象とされやすいアイヌ民族が自ら記録することの意味について考える。
14	総合討論 II	総合討論 I 及びその後の授業を踏まえた論点を抽出し議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・課題文献は時間をかけて読み、内容を十分理解したうえで事前課題に取り組むこと。
- ・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

課題文献（英語、日本語）は学習支援システムを通じて配布。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 事前課題・発表 60%（文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出）
- (2) 平常 20%（授業での積極的な発言・議論のファシリテート）
- (3) 研究報告 20%

【学生の意見等からの気づき】

Jamboard のようなブレインストーミング用のアプリを使用することで、授業中の議論をスムーズにファシリテートできる。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、および Zoom 等のオンライン授業に必要な通信環境。

【その他の重要事項】

- ・少数民族が多く暮らす東南アジアの開発現場に長く関わっている教員が、自らの経験をもとに課題文献や発表者へのコメントを行う。
- ・履修者の人数や語学力によって課題文献は柔軟に対応する。また履修者の研究に関する発表や議論を柔軟に組み入れる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際組織、開発援助、NGO、メコン地域の開発と環境

<主要研究業績>

『国際協力と想像力』（主編者、日本評論社、2021 年）

『調査と権力』（単著、東大出版会、2014 年）

『NGO と世界銀行』（主編者、ミネルヴァ書房、2012 年）

『人々の資源論』（分担執筆、明石書店、2008 年 9 月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（分担執筆、日本評論社、2005 年 9 月）

※詳しい研究業績は以下を参照のこと。

<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/detail.html?lang=ja&achievement=choso>

【Outline (in English)】

【Course outline】

The theme of this course is "development and ethnic groups" focusing on the concepts, the ethnic groups in development in Southeast Asia and the history of the ethnicity issues in Japan. The course aims to discuss and analyze development from the perspectives of ethnic groups.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- 1) Understanding and explaining the controversy over the concept of ethnic group, race, ethnic minorities, tribe and the indigenous people.
- 2) Express her/his opinion critically on the social/historical/interactive relations between development issues and ethnic groups.
- 3) Applying the cases of development in Southeast Asia and in Japan for 1) and 2) above.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the assigned literature. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria / Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

- 1) Extent of understanding about the assigned literature including the presentation based on your reading: 60%
- 2) Short reports on your own research: 20%
- 3) In class contribution: 20%

SOS500G1 - 209

多民族共生論 I B

松本 悟

サブタイトル：先住民族と国際法—国際文化からのまなざし—

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は「先住民族と国際法」をテーマとする。国際法の知識のない国際文化研究科の学生が履修するため、先住民族の生活や文化を国際法ではどのように扱うのかを「他流試合」として学び、理解したうえで、「国際文化」の視点からこのテーマについて批判的に考える。

【到達目標】

- (1) 国際法学では先住民族の権利をどのように捉えてきたのかを説明できる。
- (2) 国際文化と国際法の繋がりを分析的に説明できる。
- (3) 当該分野の専門的な文献を読んで要点を説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

■基本方針：入国できない留学生や基礎疾患を持つ学生に配慮しリアルタイムオンライン授業で実施する。授業効果など、履修者の希望があれば対面授業に切り替える可能性はある。

■第 1 回は教員が担当し、第 2 回からは事前課題文献をもとに学生が発表・議論する。進め方は以下の通り。

- (1) 履修者全員が事前課題文献を熟読し、①「文献の簡潔な要約」（15 分以内）、②「この文献から重要だと考えた点」とそう考えた理由、③そこから導いた論点（履修者同士で議論したい点）を発表する。なお、専門外の分野に関する文献なので、わからない用語は事前に調べ済みに書き込んでおく。
- (2) (1) を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り（全ての論点でもよい）議論する。
- (3) 必要に応じて教員が補足授業を行う。
- (4) 例年通り、各自の研究進捗報告とコメントを行う。

【例】研究計画（問題意識、研究の問い、先行研究、研究方法、期待される研究意義など）／既存文献レビューの要点とそこから見つけたこと／その時点での悩みや教員・学生の意見を聞きたい点、などの共有・相談・議論。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の狙い、課題文献を説明し履修者の関心を引き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。発表の担当者を決める。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	国際法創設過程と先住民族	20 世紀初頭までの先住民族の法的地位づけについて考える。
3	先住民族権利運動	先住民族権利運動の高まりと国連宣言に到る道のりをひもとく。
4	国連宣言への抵抗	先住民族の権利を守る国連宣言に対するアフリカからの「抵抗」について考える。
5	国連宣言の実施	国連宣言が国際機関等でその後どのように実施されているのかを学ぶ。
6	国際法と文化	第 5 回までの学びを踏まえて、国際人権法を文化の視点で捉えてみる。
7	履修者による発表	履修者による研究発表と質疑応答を実施する。
8	先住民族と土地	ラテンアメリカを事例に、先住民族の土地に対する権利について考える。
9	「人民の権利」と先住民族	バンジュール憲章における「人民の権利」について学び、先住民族への適用を考える。
10	自由権規約と先住民族	自由権規約第 27 条に焦点を当て、先住民族の集団的権利について考える。
11	社会権規約・人種差別撤廃条約と先住民族	社会権規約第 15 条や人種差別撤廃条約の起草過程から先住民族の集団的権利について考える。
12	FPIC 原則と先住民族	自由で、事前に十分な情報を提供した上で合意 (FPIC) 原則をめぐる論争を通して国際機関の義務について考える。
13	国際法学と先住民族	これまでの授業を通して、国際法学や権利運動の意義について考える。

14 総合討論

「国際文化」の視点から授業全体を再構成し、意味ある論点を抽出して議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・事前課題文献は時間をかけて読み、課題に取り組むこと。
- ・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

小坂田裕子（2017）『先住民族と国際法——剥奪の歴史から権利の承認へ——』（信山社）。

【参考書】

適宜授業で紹介するとともに、必要に応じて学習支援システムの「教材」で共有する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 事前課題・発表 60%（文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出）
- (2) 平常 20%（授業での積極的な発言・議論のファシリテート）
- (3) 研究報告 20%

【学生の意見等からの気づき】

Jamboard のようなブレインストーミング用のアプリを使用することで、授業中の議論をスムーズにファシリテートできる。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、および Zoom 等のオンライン授業に必要な通信環境。

【その他の重要事項】

- ・国際金融機関の先住民族政策を含むセーフガード政策の改善を働きかける活動に NGO 職員として関わっていた教員が、その経験を発表へのコメントや補足講義に活かす。
- ・履修者の人数や語学力によって課題文献は柔軟に対応する。希望があれば、Esman, M.J. and Herring, R.J. eds, 2001, Carrots, sticks, and the ethnic conflict: rethinking development assistance, The University of Michigan Press. を課題文献として使用する。
- ・履修者の研究に関する発表や議論を柔軟に組み入れる。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>国際開発研究
- <研究テーマ>影響評価、国際組織、開発援助、NGO、メコン地域の開発と環境
- <主要研究業績>
- 『国際協力と想像力』（主編者、日本評論社、2021 年）
- 『調査と権力』（単著、東大出版会、2014 年）
- 『NGO と世界銀行』（主編者、ミネルヴァ書房、2012 年）
- 『人々の資源論』（分担執筆、明石書店、2008 年 9 月）
- 『シリーズ国際開発 生活と開発』（分担執筆、日本評論社、2005 年 9 月）
- ※詳しい研究業績は以下を参照のこと。
- <https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/detail.html?lang=ja&achievement=choshou>

【Outline (in English)】

【Course Outline】

The theme of this course is the indigenous people and international law. Although the students who will be enrolled for the Graduate School of Intercultural Communication may have little knowledge on international law, this course will enable students to understand the way how the international laws have treated culture and the livelihoods of the indigenous people.

【Learning Objectives】

- By the end of the course, students should be able to do the followings:
- 1) Explaining how the International Law has treated the rights of the indigenous people.
 - 2) Explaining how the Intercultural Studies relates to the International Law in terms of indigenous people's rights analytically.
 - 3) Explaining the summary of the academic literature in the International Law.

【Learning Activities】

Before each class meeting, students will be expected to have read the assigned literature. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria / Policy】

- Your overall grade in the class will be decided based on the following
- 1) Extent of understanding about the assigned literature including the presentation based on your reading: 60%
 - 2) Short reports on your own research: 20%
 - 3) In class contribution: 20%

HIS500G1 - 210

多民族共生論 II A

高柳 俊男

サブタイトル：人物でたどる日本近現代史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- 「多民族共生論 II」は、春学期と秋学期で学ぶ内容を変えている。
- 春学期の II A では、朝鮮やアジアと関係の深い日本人個人に関する伝記的著作を読んで、アジアをめぐる近現代日本の思想や社会運動の潮流を振り返っている（秋学期の II B は、在日朝鮮人をめぐる日本の多民族共生について考察）。
- II A ではこれまで、鶴見俊輔・和田春樹・石田雄・富山妙子・岡部伊都子・日高六郎・松本昌次・上田正昭・茨木の子りを扱ってきた。今年度は、黒川創による立派な伝記（大佛次郎賞受賞）が刊行されたことを踏まえ、哲学者で行動する知識人だった鶴見俊輔（1922～2015 年）をあらためて取り上げたい。
- ①鶴見俊輔という一人の歩んだ道や、その中で身につけた思想・ものの見方を知る
- ②鶴見俊輔と彼と関わりのあった他の人物を通して、近現代日本の社会・思想・文化などの潮流をたどる
- ③とくに、アジアとの関わりの中で、どのような社会運動・思想潮流があったかに着目する
- ④特定の個人に関する伝記的著作の中から追究すべき課題を見出し、調査・探求する
- ⑤これまでの各人の研究や関心に応じて、受講者相互間に有益な討論を成立させる

【到達目標】

- 上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。
- 具体的には、歴史の中を生きる個人の伝記的記述を読むことを通して、日本近代史をアジアとの関わりの中で再検証するための契機をつかめるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP3」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- 今回のテキストは、鶴見俊輔に関する評伝である。500 頁に及ぶ大冊なので、1 回につきほぼ 50 頁ずつのペースで読み進めていく。
- レポーターの報告と全員の討論により、ゼミのような形で進める。レポーターは、登場する人物や事件などの事象のうち、大切と思われる点や関心のある点を中心に事実調べをし、授業で議論すべき論点を提出すること。近年格段に検索が容易になった各種のデータベースを駆使し、関連する当時の新聞・雑誌記事などにも目配りをしながら、時代を実証的に再現するよう努めることが大事である。
- 受講者数が少ない場合は、負担が極端に多くなることを避け、レポーター無しで進める回も設ける。
- また、関連する映像を観る回も、数回入れる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入（その 1）	受講者各自の自己紹介、授業計画の解説、参考文献の紹介などのガイダンス
第 2 回	導入（その 2）	年譜や各種新聞記事などを使いながら、鶴見俊輔の伝記的な事項をあらかじめ整理する
第 3 回	テキスト 第一章第一節～第二節	生い立ちと家族関係
第 4 回	テキスト 第一章第三節～第二章第二節	米国留学、佐野碩のこと
第 5 回	テキスト 第二章第三節～第二章第六節	日米開戦と「交換船」での帰国、応召
第 6 回	関連映像の上映①	鶴見俊輔の映像鑑賞①
第 7 回	テキスト 第三章第一節～第四節	戦後の出発、『思想の科学』の創刊
第 8 回	テキスト 第三章第五節～第七節	雑誌『思想の科学』での諸活動
第 9 回	テキスト 第四章第一節～第五節	六〇年安保闘争と「声なき声の会」、竹内好
第 10 回	関連映像の上映②	鶴見俊輔の映像鑑賞②
第 11 回	テキスト 第四章第六節～第一〇節	ベトナム戦争と「べ平連」の活動、韓国・朝鮮との関わり
第 12 回	テキスト 第五章第一節～第五節	民芸運動への関心

- 第 13 回 テキスト 第五章第六節 日高六郎、アジア女性基金、老いへの
～第九節 向き合い方
第 14 回 関連映像の上映③ 鶴見俊輔以外の人物の映像を観て、ま
とめとする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指示する関連文献の講読、関連映像視聴、関連箇所への訪問など。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

黒川創『鶴見俊輔伝』（新潮社、2018 年）

【参考書】

以前この授業でテキストとした鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したものの：鶴見俊輔に戦後世代が聞く』（新曜社、2004 年）をはじめ、膨大にある鶴見俊輔の著作。
そのほか、本書のなかで登場する他の著述家たちの著書に、適宜あたってみることに。

【成績評価の方法と基準】

レポーター時の報告 30 %、普段の授業への貢献度 40 %、学期末に提出する授業総括報告書 30 %を目安とし、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。
近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生も、ともに意義を感じるような授業を目指したい。

【学生が準備すべき機器他】

リモート授業になる場合は、PC と接続環境

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究
<研究テーマ>

在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。

<主要研究業績>

- ・「渡日初期の尹学準一密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第 5 号論文編、2004 年）
 - ・「短歌と在日朝鮮人—韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第 26 号、2007 年）
 - ・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実践から」（『学輪 IIDA』機関誌『学輪』第 2 号、2016 年）
- *詳細は、「学術データベース」をご参照のこと

【Outline (in English)】

This class aims to study about the trends of contemporary Japanese thought and social movements over Asia, by reading of a biographical work on Japanese individual closely related to Korea. In this year, we read the book on Shunsuke Tsurumi.
Final grade will be calculated according to the following process. In-class presentation 30%, in-class contribution 40%, and term-end report 30%.

HIS500G1 - 211

多民族共生論 II B

高柳 俊男

サブタイトル：朝鮮・在日朝鮮人と日本社会

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①在日朝鮮人をめぐる日本の多民族共生について考察する。
- ②在日朝鮮人（総称）が経てきた歴史を明らかにする
- ③政治史や運動史のみならず、生活史・文化史・精神史の解明に重点を置く
- ④日本における朝鮮民族との民族間関係や相互認識の諸相を考察する
- ⑤在日朝鮮人の事例をもとに、日本国内の他の民族間関係について考える際の視点を養う
- ⑥一次資料を含めた文献の調査や読解に関してレベルアップを図る

【到達目標】

上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。
具体的には、在日朝鮮人の経てきた歴史・文化やその日本社会との関わりを、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解し、受け売りや図式的把握ではなく、自らの言葉で具体的・実証的に語れるようになることを目指す。

また、「研究」という自らの行為を、より客観的・多面的に眺める契機を得るようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP3」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

秋学期のこの授業では、日本社会に大きな比重を占める「異民族集団」である在日朝鮮人を素材に、日本における異文化摩擦や多民族共生の姿を具体的に考察している。

2012 年度から 8 年間、戦後、各種の民族団体・政党・社会運動団体ないし日本政府関係機関などが出した朝鮮関係のパムフレット・小冊子を読み解きながら、戦後の朝鮮・在日朝鮮人をめぐる論調や運動の系譜を追う作業を行った。取り上げたテーマは、戦後初期の在日朝鮮人運動、都立時代も含めた民族学校、朝鮮戦争、北朝鮮帰国事業、祖国自由往来運動、朝鮮高校生への襲撃事件、日韓条約、外国人学校法案、出入国管理法案、金嬉老事件、日立就職差別事件と民間連運動、韓国民主化運動、在日韓国人政治犯、丸正事件、在日朝鮮人理解のための副読本作成、などである。

定年前最後のサバティカルを経た昨年度からは、私自身が大学生以来、このテーマで執筆してきた各種の文章を取り上げている。研究者としての自己の歩みを組上に載せるのは、必ずしも受講者に範を垂れる意味ではなく、その試行錯誤や紆余曲折の歩みを示すことで、同じく「研究」に携わる立場である受講生に、何らかの参考や示唆となることを期待するからである。

今年度は、映像関係、都立朝鮮人学校、北朝鮮帰国事業を中心に扱う。取り上げるそれぞれの著作は、その時代の社会潮流や研究動向の産物であり、また当然のこととしてその後のことは書いていないので、現在からみたら不十分な箇所もある。受講者は、テキスト内容を正確に読み解くとともに、それらを「当時」と「現在」という 2 つの文脈の中に置いて、客観的・学術的に分析していく。すなわち、なぜこのような主張がなされたか、「当時」の背景を明らかにすると同時に、「現在」の目から見た認識の問題点や、当該課題のその後の推移、さらには研究史の進展などもフォローしつつ報告するよう努めること。

授業の進め方としては、テキストをレポーターの報告と全員の討論で読んでいく。受講者が少なければレポーター無しの場合も設けたい。関連映像の視聴も、適宜織りまぜる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	受講者の自己紹介、授業計画の解説、当面のテキスト配付、など。
第 2 回	朝鮮人の登場する映画①	朝鮮人の登場する日本映画作品の流れを追う。(その 1)
第 3 回	朝鮮人の登場する映画②	朝鮮人の登場する日本映画作品の流れを追う。(その 2)
第 4 回	都立朝鮮人学校の映画	「朝鮮の子」に関する論考を考察する。
第 5 回	枝川町朝鮮人簡易住宅建設	関連して、枝川町の朝鮮人簡易住宅建設に関する論文を読む。
第 6 回	都立朝鮮人学校資料集	関連して、都立朝鮮人学校資料集の解題を読む。
第 7 回	北朝鮮帰国事業関係の映画①	帰国事業関係の映画について、その概略をたどる。
第 8 回	北朝鮮帰国事業関係の映画②	代表作『海を渡る友情』に関する論考を組上に載せる。(その 1)

第 9 回	北朝鮮帰国事業関係の映画③	代表作『海を渡る友情』に関する論考を組上に載せる。(その2)
第 10 回	北朝鮮帰国事業関係の映画④	『海女のリャンさん』『ちょっと北朝鮮まで行ってくるけん。』を扱う。
第 11 回	北朝鮮帰国事業	金英達氏とつくった帰国事業の資料集について回顧する。
第 12 回	教育の中の北朝鮮帰国事業	北朝鮮帰国事業をどう教えるかについて考える。
第 13 回	尹学準先生	北朝鮮帰国事業にも関わりのあった尹学準先生の経てきた道をたどる。
第 14 回	まとめ	これまでの全 13 回の授業をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストに登場する文献や授業中に指示する関連文献の講読、関連映像の視聴、関連箇所への訪問など。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

その都度、紙媒体もしくは pdf で配付する。

【参考書】

『韓国朝鮮を知る事典』（平凡社）、『在日コリアン辞典』（明石書店）などの事典類

【成績評価の方法と基準】

レポーター時の報告 35 %、普段の授業への貢献度 30 %、および学期末の授業総括報告書 35 %を目安に、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。
近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生も、ともに意義を感じるような授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究、日朝関係史
<研究テーマ>
在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。
<主要研究業績>
・「渡日初期の尹学準一密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第 5 号論文編、2004 年）
・「短歌と在日朝鮮人—韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第 26 号、2007 年）
・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実践から」（『学輪 IIDA』機関誌『学輪』第 2 号、2016 年）
*詳細は、本学の「学術研究データベース」をご参照

【Outline (in English)】

This class aims to study about Japanese multicultural coexistence, by reading of my own papers on Japan-Korea relations or Korean minority in Japan.
This year, we will focus on films about Korea, the Korean schools established by the Tokyo Metropolitan Government, and immigration to North Korea.
Final grade will be calculated according to the following process. In-class presentation 35%, in-class contribution 30%, and term-end report 35%.

SOC500G1 - 213

国際ジャーナリズム論

神林 毅彦

サブタイトル：グローバル化社会におけるジャーナリズムの役割

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際報道の現状、影響、重要性を分析し、ジャーナリズムの役割、その問題点や対策等を重点的に議論する。下記が主な内容となる。

1. 気候変動、パンデミックなど深刻化する国際問題と報道、SNS の影響
2. 外交とジャーナリズム
3. 国際報道にみられる政治的、経済的、社会的影響

【到達目標】

ジャーナリズムの役割、ジャーナリズムの倫理、ジャーナリズムが直面する問題などに理解を深めることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

国内外の問題に関する、日本、海外メディアの報道を検証しながら、ジャーナリズムの本来の役割について議論する。あらかじめ与えられた課題に関して各自が発表、また、その内容に関して議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	ジャーナリズムの役割
第 2 回	メディアの特性（Ⅰ）	メディアと公共性、ニュースの構造、要素
第 3 回	メディアの特性（Ⅱ）	国際報道とその背景
第 4 回	メディアの特性（Ⅲ）	国際報道と多様化するメディア
第 5 回	メディアの特性（Ⅳ）	国際報道と外交
第 6 回	メディアの特性（Ⅴ）	報道の客観性と倫理的問題
第 7 回	国際ジャーナリズム（Ⅰ）	パンデミックに関する報道
第 8 回	国際ジャーナリズム（Ⅱ）	気候変動問題に関する報道
第 9 回	国際ジャーナリズム（Ⅲ）	移民問題に関する報道
第 10 回	フィールドワーク	インタビュー、取材
第 11 回	国際ジャーナリズム（Ⅳ）	領土問題、歴史問題に関する報道
第 12 回	国際ジャーナリズム（Ⅴ）	経済、貿易問題と報道
第 13 回	国際ジャーナリズム（Ⅵ）	原発問題に関する報道
第 14 回	今後の国際報道	メディアの多様化、SNS の影響

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

グローバルな問題に関する報道に目を向け、批評を行う。また、報道の方法、背景などを周囲の人と話し合う。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

とくになし。担当者が資料等を配付する。

【参考書】

ビル・コヴァッチ、トム・ローゼンスティール「ジャーナリズムの原則」日本経済評論社 2002年（原書 The Elements of Journalism）
The Washington Post, The New York Times, The Financial Times, The Guardian, BBC, Xinhua News Agency, Yonhap News, NHK、他

【成績評価の方法と基準】

平常点 30%、授業での発表や議論 40%、レポート（内容評価）30%

【学生の意見等からの気づき】

以前は、授業で配布する記事、資料、また、授業中に扱う海外の報道番組は英文がほとんどだったが、学生の英語力に個人差があるため、日本語の記事、資料を増やしている。
映画監督や福島原発事故避難者とのインタビューなどは学生が積極的に参加していた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ジャーナリズム論
<研究テーマ>国際ジャーナリズム論、ジャーナリズム倫理
<主要研究業績>
1) Chapter “A Very Happy Life” Kuhaku & Other Accounts from Japan, 2005, Chin Music Press
2) “Japan’s elections showcase constraints on its democracy,” 2021, The Christian Science Monitor.
3) 「奪われた生活と語れない被害」 「部落解放」 2021 年 3 月号、解放出版社

【Outline (in English)】

(Course outline) The theme of this course is theories of international journalism in the information age. This course provides opportunities for students to critique news coverage in Japanese and foreign media outlets and discuss mainly the impact of social media; journalism and diplomacy; and political, economic and social factors influencing media content.

(Learning Objectives) At the end of the course, students are expected to do the followings:

A. Have a clear understanding of the principles of journalism.

B. Have a clear understanding of the integral role of international journalism, especially in the face of increasingly serious global issues such as migration, climate crisis and the pandemic.

C. Discuss the most pressing issues facing international journalism today.

(Learning activities outside of classroom) Students will be expected to read articles in major Japanese and foreign media regularly about diplomatic and global issues.

(Grading Criteria /Policy) Grading will be determined by 30% class attendance, 40% presentations and discussion, 30% writing assignments.

HIS500G1 - 215

国際文化交流論Ⅱ A

木村 真

サブタイトル：人の移動現象にアプローチするさまざまな方法

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、さまざまな形態の人の移動が地域社会やさまざまな人間集団に与えた影響を考察します。人の移動は近現代の世界に限られた現象ではありませんが、とくに、19世紀以降の国民国家形成過程、都市化や近代化の過程、世界各地の紛争のなかで見られた出稼ぎ、国外・国内移住、強制的な住民交換、政治的亡命などの移動現象と人々のネットワーク、人々の帰属意識、さらに国家による政策の関係に注目します。それによって、現代社会で生じている多様な、多面的な移動現象の理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

- ①国民国家形成過程の人の移動について、多面的な理解を修得すること
- ②住民交換政策の地域社会に与える影響についての知見を得ること
- ③人々の多様な形態の移動にともなう送り出し地域、受け入れ地域の人々の文化的影響に関する知見を得ること
- ④以上のテーマについて、とくに歴史研究や地域研究の方法を学ぶこと

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

近代バルカン、東欧の事例を中心に担当者が講義も行いますが、受講者全員で関連文献、論文を読み、発表してもらいます。また、受講者の専門地域もしくは関心を持つ地域の事例について報告発表してもらいます。各授業の内容について質問、意見をリアクションペーパーの形で提出してもらいます。なお、対面式を前提としますが、状況によってオンラインとなるかもしれません。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方について
第2回	近代の東欧、バルカン社会(1)	東欧、バルカン地域における国民国家形成以前の人の移動
第3回	近代の東欧、バルカン社会(2)	帝国内の各地、ならびに帝国内外を結ぶさまざまな人の移動
第4回	国民国家形成過程と人の移動(1)	バルカン地域における国民国家形成のプロセス
第5回	国民国家形成過程と人の移動(2)	国家形成にともなう人の移動(武装勢力、軍隊、住民移動など)
第6回	国民国家形成過程と人の移動(3)	国家形成にともなう人の移動(出稼ぎ、季節労働など)
第7回	国民国家形成過程と人の移動(4)	国家形成にともなう人の移動(さまざまな移民形態)
第8回	国民国家形成過程と人の移動(5)	国家形成にともなう人の移動(亡命など)
第9回	紛争と人の移動(1)	紛争にともなう人の移動と国家の対応(住民交換)
第10回	紛争と人の移動(2)	紛争にともなう人の移動と国家の対応(強制移住)
第11回	紛争と人の移動(3)	紛争にともなう人の移動と国家の対応(難民)
第12回	移動する人々の帰属意識(1)	帰属意識の構築
第13回	移動する人々の帰属意識(2)	重層的な帰属意識
第14回	人の移動をめぐる研究から得られる知見	人の移動をめぐる歴史学的な研究アプローチの可能性と限界

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告発表に際しては、あらかじめ、関連する文献を読み、レジュメを作成準備することが求められます。また、発表者以外の参加者も、関連する概念、事象などについて調べることを期待されます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の関心に即して決めるつもりです。さしあたり、下記の文献を素材とする予定です。テキストはこちらでコピーを準備します。

Ulf Brunnbauer(ed.) Transnational Societies, Transnational Politics. Migration in the (Post-)Yugoslav Region, 19th-20th Century. Munchen, 2009.

【参考書】

授業において指示します。さしあたり、以下のものを挙げます。
 ノーマン・M・ナイマーク『民族浄化のヨーロッパ史』刀水書房、2014年
 山本明代、パプ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』刀水書房、2017年

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業における発表、ならびに議論への参加）（50%）、レポート課題（50%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】

対面式、オンラインのどちらの場合でも、なるべくコミュニケーションを取り合うよう努力したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉バルカン近現代史、東欧地域研究
 ブルガリア史、南スラヴ地域を中心に、バルカン近現代史、東欧地域研究を専門としております。現在は授業のテーマでもある南東ヨーロッパ地域の近現代の人の移動を研究しています。また、東欧地域の史学史研究にも関心を持っております。
 〈主要研究業績〉
 『バルカン史と歴史教育』（共著）2008年 明石書店
 『東欧地域研究の現在』（共著）2012年 山川出版社
 『移動がつくる東中欧・バルカン史』（共著）2017年 刀水書房

【Outline (in English)】

【Course outline】 This course introduces a historical approach for a diversity of migrations after the 19th century to students taking this course.

【Learning Objectives】 At the end of the course, students are required to obtain knowledge about various patterns of migrations after the 19th century.

【Learning activities outside of classroom】 Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【Grading Criteria/Policy】 Final grade will be decided based on in-class contribution (50%), and term-end report (50%).

ARSk500G1 - 217

比較宗教文明論

臼杵 陽

サブタイトル：イスラームなどの一神教と日本

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

イスラム国（IS）は壊滅したものの、宗教・宗派・民族紛争は世界中で続いている。ヨーロッパではシリア内戦からの難民に対する排斥運動が続いている。トランプ米政権は「アメリカ・ファースト」を前面に押し出してその政権の交代後も、今後世界がどんな方向に向かうのか、見えてこない。授業では、日本社会で宗教がどんな意味をもっているのかを出発点として世界の宗教紛争の現状を具体的な問題を取り上げながら検討していく。

【到達目標】

受講者がイスラーム世界を含む現代の宗教紛争を考える際に重要な点は、欧米社会に特徴的に見られる宗教を個人の信仰として捉えるのではなく、共同体あるいは社会における機能に注目して考えることである。文明として宗教を捉えるということはわれわれが現代社会における宗教現象を理解するうえでも重要な視点である。宗教文明における衝突はその教義のちがいがというよりも、それぞれの宗教文明がそれぞれの歴史的過程を経て、その現在が形成されてきたということでもある。したがって、宗教文明を比較の視点から捉えるということは、現在の状況を歴史的な観点からプロセスとして読み直す作業でもある。したがって、宗教の名の下でのテロなどをたんに野蛮で時代錯誤的としてみるのではなく、現代における歴史的過程の帰結という観点からも考え直してみるということである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

出席者数によるが、テキストを決めて演習の形式で進めていくことを原則としたい。必要に応じて、DVDなどの映像資料などを用いながら、「宗教」に関していったい何が問題なのかを含めて考えていくことにしたい。まずは「多神教」といわれる日本社会にとって「宗教」とは何かを考えていき、参加者の関心によってイスラームやユダヤ教などの「一神教」の世界へと話を移していきたい。毎回、授業に関する小レポートを書いて提出してもらおう。本科目はオンラインで行うが、コロナ感染状況が好転し、国際文化研究科の判断で可能となった場合は対面授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業で何を学んでいくのか。
第2回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ①日本人の宗教観	近現代に注目して日本人の宗教観がいかなるものなのかについて考える。
第3回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ②明治期から太平洋戦争まで	明治期から太平洋戦争までの日本人にとっての「宗教」とは何かを考える。
第4回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ③戦後日本	戦後日本の日本人にとっての「宗教」の変容について考える。
第5回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ④9・11事件後	9・11事件後の日本人のイスラーム観を考える。
第6回	日本と中東イスラーム世界の関係①明治・大正期	明治・大正期の日本・イスラーム関係史を考える。
第7回	日本と中東イスラーム世界の関係②戦前昭和期	戦前昭和期の日本・イスラーム関係史を考える。
第8回	日本と中東イスラーム世界の関係③大川周明の初期イスラーム研究	国家主義者の大川周明の青年期のイスラーム神秘主義研究について考える。
第9回	日本と中東イスラーム世界の関係④大川周明晩年のコーラン研究	国家主義者の大川周明の晩年のコーランの翻訳、その研究について考える。
第10回	日本人のユダヤ人観①戦前期	戦前日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義
第11回	日本人のユダヤ人観②戦後期	戦後期日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義
第12回	日本人のユダヤ人観③欧米との相違	キリスト教徒の多い欧米と日本のユダヤ人観観はどのように違うのか？
第13回	日本人のユダヤ人観④イスラーム世界	同じ一神教のイスラーム世界のユダヤ人観はキリスト教世界とどのように違うのか？
第14回	まとめ	総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

中東イスラーム世界、とりわけイスラーム主義あるいはテロはいつ起こるか分からない。したがって、毎日、新聞、テレビ、インターネットでニュースをチェックする習慣をつけてほしい。また、日々起こる事件の表層だけではなく、その底流に流れる事態の本質をきちんと見極める眼力を養ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996 年。
島園進『国家神道と日本人』岩波新書、2010 年。
白杵陽『イスラームはなぜ敵とされたのか』青土社、2009 年。
白杵陽『大川周明—イスラームと天皇のはざままで』2010 年。

【参考書】

井筒俊彦『イスラーム文化』岩波文庫、1991 年。
井筒俊彦『コーランを読む』岩波現代文庫、2013 年。
大川周明『回教概論』ちくま学芸文庫、2008 年。
大川周明『復興亜細亜の諸問題』中公文庫、2016 年。

【成績評価の方法と基準】

授業内における報告および質疑応答など積極的な姿勢をもって参加しているかによって評価する（40％）。期末にはレポートを提出してもらう（60％）。

【学生の意見等からの気づき】

院生諸君との授業内でのコミュニケーションによって授業のあり方を検討する機会をもつことにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中東地域研究、宗教・エスニック問題
<研究テーマ>パレスチナ／イスラエル紛争、日本の対中東関係、とりわけ聖地問題
<主要研究業績>『見えざるユダヤ人』（平凡社）『原理主義』（岩波書店）、『大川周明』（青土社）『イスラエル』（岩波新書）、『イスラームはなぜ敵とされたか』（青土社）『アラブ革命の衝撃』（青土社）『世界史の中のパレスチナ問題』（講談社現代新書）など。

【Outline (in English)】

【Course outline】

Religious and ethnic conflicts still continue in the world even though the Islamic State(IS) was destroyed. In Europe there still exist anti-immigration movements against refugees from Syrian civil war. It is not clear where the world is going after Trump administration declared “America First” policy and also the change of the US administration? In the class, current religious conflicts in the world are analyzed by picking up some cases after discussing what religion is meant in Japanese society.

【Learning Objectives】

The important point to think about current religious conflicts in the world including Muslim world is to focusing upon the functions of religions in communities or societies, not the personal beliefs of religions in the Western societies. To grasp religions as civilizations is also important to understand religious phenomena in contemporary society. The clashes of religious civilizations happen not due to the differences of doctrines but because of the historical formation process of religious civilizations. To understand religious civilizations from comparative perspectives is, therefore, to reinterpret the current situation from historical process. Terrorism in the name of religion should be understood not as barbaric anachronism, but as the consequence of the historical process.

【Learning activities outside of classroom】

In the Muslim societies or Middle Eastern world, nobody can anticipate what would happen such as terror attacks. Therefore, students attending this class are asked to follow news in newspapers, television or internet so on. Students are also asked to improve their abilities to grab the underlying cause of what are happening every day. Preparation and review are needed for two hours as a standard.

【Grading Criteria /Policy】

Grading Criteria is to participate actively in reports and questions & answer in class (40%). Semester-end reports are needed to submit (60%).

FRI500G1 - 301

多文化情報空間論 I A

森村 修

サブタイトル：九鬼周造の哲学研究

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要

2022 年度は、九鬼周造の哲学をテーマに主要著作を読んでいく。日本の哲学、特に京都学派の中でも特異な位置にある哲学者が九鬼周造（1888-1941）である。八年の間、フランスやドイツに滞在し、当時の最先端の哲学思想を体験した稀有な存在である。そうした経験もあって、西田幾多郎（1870-1945）や田邊元（1885-1961）などのいわゆる「京都学派」の哲学とは一線を画す存在でもある。その一つの例が、九鬼周造を一躍有名にした『「いき」の構造』（1930）であろう。

そこで、春学期は同書を用いて、日本人や日本の文化における「美意識」を九鬼が哲学的に分析したかを考察する。それゆえ、本講義の目的は、同書によって分析される「いき」という現象を通じて、「日本の美意識」がどのように成立しているかを明らかにすることにある。

【到達目標】

- ①九鬼周造の哲学を概括することができる。
- ②日本の美意識について考えることができる。
- ③レジュメを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- (1) 基本的に「演習」形式で行う。
 - (2) 毎回、担当者を決め、レジュメを作成してもらう。
- ◆レジュメには、①担当箇所翻訳と解説、②用語説明、③考察、④問題点を記載する。
- (3) 授業の進め方
 - ①特定質問者を決めて、担当者の発表に対して、質問を行う。
 - ②それ以外の授業参加者と教員を含めて質疑を行い、問題点について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	・授業の進め方についての説明 ・発表の順番等の決定
第 2 回	一 序説	・「いき」とは何か
第 3 回	二 「いき」の内包的構造	・内包性（intensionality）
第 4 回	三 「いき」の外延的構造	・外延性（extensionality）
第 5 回	四 「いき」の自然的表現	・「いき」の文化
第 6 回	五 「いき」の芸術的表現	・「いき」と芸術・美学
第 7 回	六 結語	・九鬼哲学における『「いき」の構造』の位置づけ
第 8 回	「風流に関する一考察」①	・風流とは何か？
第 9 回	「風流に関する一考察」②	・「ものあわれ」 ・「幽玄」
第 10 回	「情緒の系図」①	・文学における「情緒」とは何か
第 11 回	「情緒の系図」②	・歌における「情緒」
第 12 回	「情緒の系図」③	・「情緒」の哲学分析
第 13 回	九鬼哲学における文学の位置①	・九鬼周造の「文芸論」
第 14 回	九鬼哲学における文学の位置②	・文学の形而上学に向けて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・担当者は、テキストの該当箇所のレジュメを発表前日までに教員に提出すること。
- ・特定質問者は、テキストの該当箇所に関する質問を 3 つ以上考え、簡単な質問表を作ってくる（発表当日でよい）
- ・それ以外の参加者は、該当箇所について質問を 1 つは考え、当日の議論に参加する準備をすること。
- ・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

九鬼周造『「いき」の構造』、岩波文庫、1979 年
九鬼周造『「いき」の構造』全注釈・藤田正勝、講談社学術文庫、2003 年
『対訳「いき」の構造』奈良博訳、講談社インターナショナル、2008 年

【参考書】

安田武・多田道太郎 『いき』の構造』を読む、ちくま学芸文庫、2015 年
◆ その他については、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・ 個別報告発表 (50 %) (回数および内容による評価)
- ・ 特定質問担当 (30 %) (質問内容による評価)
- ・ 討論参加 (20 %) (内容による評価)
- ※ 以上に基づいて、総合的に評価する。
- ※ なお、無断欠席は認めない。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

最近の大学院生の中には、基本的なテキスト読解が不十分な者が見受けられる。テキストを「読む」というのは、テキストを「読み解く」のであって「読み込む」のではないことは肝に銘じるべきである。「読み込む」ということは、自分の考えをテキストに投影することであり、それは単なる勝手な解釈に過ぎない。それでは、真にテキストを「読解する」ことにならない。あくまで「虚心坦懐」にテキストに向かい、「眼光紙背を徹する」態度でテキストに向かわなければ、哲学的なテキストを「読む」ことはできない。

また、担当者はレジュメを作成する上で、引用されているテキストはもちろん、それ以外にも用語・概念などについて、徹底的に下調べを行うべきである。担当者以外に対して、教員から授業中に質問することが多々あるので、担当者と同様に準備を怠らないでほしい。

演習とは **practice** (=実践) を意味しているものであり、テキストを「読む」という実践は五感を十分に活用することです。授業に参加する皆さんは、哲学を「実践する」態度で臨んでもらいたい。

【受講上の注意】

本授業は、哲学・倫理学、思想の分野に深くコミットしているために、自身の思考の鍛錬を要する。テキストを読むこと、それに基づいて自分の思考を実践すること、これらの作業は哲学研究にとって必須のものとして心得てもらいたい。単に、カルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアリズム研究などとは異なるので、注意を要する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代哲学 (現象学・構造主義以後のフランス哲学)・現代倫理学 (ケアの倫理学・応用倫理学)

<研究テーマ> 生命体・地球を含む「生の倫理学」(例えば、暴力や虐待、テロなどによるトラウマや PTSD に苦しむ人々を「生・生活・人生・生命 (life)」という観点からケアしていくためにしなければならない義務・責任を考察する)

<主要研究業績>

1. 【単著】 森村修 『ケアの形而上学』、大修館書店、2020 年
2. 【共著】 森村修 『「社会政治的トラウマ」の倫理』、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編 『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019 年 【臨床哲学・生の倫理学】
3. 【共著】 森村修 『アマルティア・セン——自由と正義のアイデア』、榎木玲子/法政大学国際文化学部編 『境界』を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016 年 【現代倫理学】
4. 【共著】 森村修 『ヨーロッパ』という問題—テロと放射能時代における哲学』、熊田泰章編 『国際文化研究への道：共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013 年 【現代哲学】
5. 【論文】 森村修 『西田幾多郎の「グラマトロジー」——〈書〉の美学=感性学 (エステティクス) の可能性』、東北大学哲学研究室編 『思索』、2021 年 (近刊) 【日本哲学】
6. 【論文】 森村修 『西田幾多郎の〈グラマトロジー〉序説——〈日本語で哲学すること〉の〈意味〉について』、法政大学国際文化学部編 『異文化 21』、2020 年 【日本哲学】
7. 【論文】 森村修 『市川白弦の「空-無政府-共同体論 (Ś ūnya-Anarchist-Communism)」——小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって』、法政大学国際文化学部編 『異文化 20』、2019 年 【日本哲学】
8. 【論文】 森村修 『技術は「ヒューマニズムを超える」か? (1) ——ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガールの「技術哲学」(1)』、法政大学国際文化学部編 『異文化 19』論文編、2018 年 【現代ドイツ哲学・応用倫理学】
9. 【論文】 森村修 『パウル・ツェランという問題 (1) ——ガダマーとデリダの「途切れない対話」(1)』、法政大学国際文化学部編 『異文化』論文編、2017 年 【現代ドイツ・フランス哲学】
10. 【論文】 森村修 『思想の翻訳と文字の問題——比較思想から間文化性の比較思考へ』、比較思想学会編 『比較思想研究』第 42 号、2016 年 【日本哲学・Intercultural Philosophy】
11. 【論文】 森村修 『センの「道徳哲学」(1) ——バトナム「事実/価値二分法の崩壊」論を手がかりに (1)』、法政大学国際文化学部編 『異文化 17』論文編、2016 年 【現代倫理学】
12. 【論文】 森村修 『「性的差異」のケア倫理学——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題』、『比較思想研究』第 41 号、2015 年 【日本哲学・ケアの倫理学】
13. 【論文】 森村修 『喪と／あるいはメランコリー (1) ——デリダの〈精神分析の哲学〉(1)』、法政大学国際文化学部編 『異文化 16』論文編、2015 年 【現代哲学】

【Outline (in English)】

(Course outline)

The aim of this course is to help students acquire Japanese aesthetic consciousness through the phenomenon of "iki" analyzed in "the structure of iki."

(Learning Objectives)

At the end of the course, students are expected to understand the Japanese aesthetic.

(Learning activities outside of classroom)

例 1: Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following oral presentation: 50%, discussant: 30%, in class contribution: 20%.

The purpose of this course is to clarify how time is expressed in literary works (especially *waka* and *haiku*) and to elucidate the philosophical meaning of time for Kuki's philosophy.

(Learning Objectives)

At the end of the course, students are expected to understand the Japanese aesthetic.

(Learning activities outside of classroom)

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation: 50%, discussant : 30%, in class contribution: 20%.

FRI500G1 - 305

多文化情報メディア論 I A

大嶋 良明

サブタイトル：ソーシャルメディアの調査と分析

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ、文化情報学的なアプローチで分析するなかから、異文化理解に資する視点の開拓を試みる。これまで社会科学的发展の中で構築されたメディア論や人文科学分野での文化理論とも関連させた検討を試みている。とくにインターネット上の言説に着目し、その分析手法やメディアデータとしての特徴や書物との違いについて学ぶ。

【到達目標】

この科目では現代のテキストを最新の手法によって分析できるようになる。現代のネット社会をテキストの計量的・統計的な諸特性においてとらえる。英米文化の理解と異文化理解の観点から、インターネット上の言説や文化表象に関連するメディアに着目し、その主要な分析手法やモデル化について説明できるようにする。また実際のデータに適用して分析することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

講義と輪講により行う。

- ・複数レポート制による輪講とパソコンを用いたインターネット上のデータの分析を試みる。
- ・各自が学習内容を相互閲覧可能な形で Web に記録する。
- ・日本語のみならず各国語文化圏の Web テキストに関する各自の話題提供を通じて、視野を拡げ問題意識を深化させる。
- ・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション: 社会と機械学習	Web から海外社会を観察することと分析の課題を学ぶ。
2	即時性の検出	時系列のテキストからキーワードの出現傾向を検出する方法を学ぶ。
3	評判分類	評判分類とは何か、ロジスティック回帰などの手法を学ぶ。
4	意味表現の学習	意味表現とは何かを理解し、そのモデル化と可視化の手法について学ぶ。
5	表現の連鎖	リンクに基づくテキストデータの分析手法を学ぶ。
6	関連性の評価	テキストから関連性の高い文書を見つける手法を学ぶ。
7	話題性の抽出	トピックモデルと言説空間の分析法を学ぶ。
8	感情分析	感情分析とは何かを理解し文章から意見の抽出方法を学ぶ。
9	推薦の仕組み	予測とレコメンド手法、バスケット分析の手法を学ぶ。
10	ジャンルの抽出	テキストのジャンル分類を学ぶ。
11	クラス分類	テキストのクラス分類の方法を学ぶ。
12	特徴抽出	大規模データからの特徴抽出の手法を学ぶ。
13	特徴量の圧縮	大規模データからの特徴量圧縮の手法を学ぶ。
14	次元削減	第 14 回：まとめ - 総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。

予習復習として、テキストおよび毎回の授業で担当教員が指定する文献を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは指定しない。必要な資料は授業内で配布する。

【参考書】

全体を通じての参考書は特に指定しない。
必要に応じて提示する。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
【多言語環境】三上喜貴ほか、「言語天文台からみた世界の情報格差」、慶應義塾大学出版会 (2014)、ISBN: 978-4-7664-2178-1
【英米言語文化】Swiss, T., “Unspun,” NYU Press(2001), ISBN: 978-0814797594
【ネット社会の文化的特性】川上量生 (監修)、「ネットが生んだ文化」、角川学術出版 (2014)、ISBN: 978-4-04-653884-0
【言語分析の手法】
(1) ボレガラ、岡崎、前原、「ウェブデータの機械学習」、講談社 (2016)、ISBN:978-4-06-152918-2
(2) Richart, W. and Coelho, L.,P.,(著)、齋藤康毅 (訳)、「実践 機械学習システム」、オライリー・ジャパン (2014)、ISBN:978-4-87311-698-3

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%
輪講 25%
課題 20%
学期末レポート 30%
を総合的に評価する。
設定した達成目標を 60 %以上達成している場合に合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

2018 年度より日本語および中文のテキストマイニングに取り組んでいる。留学生も合わせてテキストの分析への履修学生の関心を喚起したい。また履修者少数の場合にも効率よく学習できるよう常に心がける。2021 年度は担当教員が国内研究を取得したので、2022 年度にはこの間の深化を盛り込んだ内容としたい。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノート PC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。また言語 Python を用いた機械学習の問題解決に親しんで欲しい。学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集する Wiki やポートフォリオツール等の CMS を個々の研究科科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用して欲しい。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード： テキストマイニング、Web、機械学習、データサイエンス、ビッグデータ、インターネット、オンラインデータ

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【担当教員の業務経験】

担当教員は IT 企業での研究所勤務において 15 年間のデジタル信号処理 (特にデジタル音響、統計モデルによる音声認識)、マルチメディア処理 (音楽音響、電子透かし) 分野の経験がある。

【Outline (in English)】

This course provides with perspectives on the Internet in the context of multi-cultural cyberspace. It also covers well-known research methodology and basic analysis techniques for online text data as well as various types of media data on the Internet.

Grading policy is as follows:

In-class contribution: 25%

Analysis report on reading assignment: 25%

Homework: 20%

Term paper: 30%

Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.

The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

FRI500G1 - 306

多文化情報メディア論 I B

大嶋 良明

サブタイトル：ポピュラー音楽制作とスタジオ技術の歴史

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

この科目では現代社会をメディアとしての特性から分析する。スミソニアン学術協会が中心となって編纂する *Artefacts* シリーズより音楽文化をテーマとしてとりあげ、アメリカ、イギリスとヨーロッパでの電気楽器、音楽制作との関連を学ぶなかから英米現代文化を理解する。原書購読にとどまらずフィールド録音、映画音楽、放送音源など様々なメディア媒体を活用して、演奏の記録や音楽史上での関連事項についても調べ理解を深める。

【到達目標】

近現代の英米社会における口承音楽、楽器演奏、実験音楽、ポピュラー音楽の制作や分析に関心を持ち、それらの欧米での研究の最新動向が身につく。またミュージコロジーのさまざまな研究領域について認識できる。ここで取り扱うこれらの楽器や音楽手法に触発された現代の芸術家とその活動についても関連を見いだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

講義と輪講により行う。

- ・複数レポート制による輪講 (英語文献の講読を中心とする)
- ・各自が学習内容を相互閲覧可能なオンライン記録とすることを目指す。
- ・視野形成と問題意識の深化を目的として、リスナーとして演奏者、制作者としての音楽体験に関連する話題提供を歓迎する。
- ・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	本講義のねらいと取り扱う論考の全体視野を身につける。
第 2 回	フィールド録音とブルース音楽	1940 年代のミシシッピ州刑務所 Parchman Farm でのフィールド録音と記録から口承音楽としての囚人歌からデルタ・ブルースの関連を学ぶ。
第 3 回	欧米教会音楽における電子オルガン	1930 年代のアメリカと 1960 年代ノルウェーでの Hammond オルガンの受容普及と教会文化との軋轢の歴史を学び、教会音楽での電子オルガンの果たした役割とその時代的な関係を検討する。
第 4 回	アメリカ音楽文化における Hammond オルガン	Mark Vail の “The Hammond Organ: Beauty in the B” を参考に 1950 年代以降を中心にポピュラー音楽と教会音楽の視点からアメリカ文化を考察する。
第 5 回	Ethel Smith とオルガン音楽	1940 年代から 1970 年代にかけての Ethel Smith のレコード音源、編曲楽譜、映画、新聞記事などを手掛かりにアメリカのポピュラー音楽文化に足跡を残した演奏家の芸能活動と音楽出版について学ぶ。
第 6 回	Moog シンセサイザー	Trevor Pinch による “Analog Days: The Invention and Impact of the Moog Synthesizer” ほかの資料を参考に電子楽器としての Moog の革新性と 1970 年代のポピュラー音楽に与えた影響を検討し音楽史上における文化的価値について考察する。
第 7 回	ドラムマシンとサンプリャー	初期のドラムマシンに始まり Mellotron や Fairlight などのサンプリャー楽器が 1970 年代以降の英米のポピュラー音楽に果たした役割とその影響について検討する。
第 8 回	前衛音楽とアメリカ西海岸のカウンターカルチャー	Pauline Oliveros ら San Francisco Tape Music Center のメンバーが現代作家との協力関係の中で活動し 1960 年代アメリカの対抗文化に及ぼした影響について学ぶ。

- 第9回 イギリス放送文化における電子音楽の隠された次元
Daphne Oram が取り組んだ Oramics Machine、BBC Radiophonic Workshop の Delia Derbyshire、EMS の David Cockerell らの先駆的業績を取り上げ電子音楽、放送文化、劇伴音楽における英国文化の影響について検討する。
- 第10回 電子楽器と映画音楽
テルミン、VCS3、Moog などの20世紀の電子楽器が映画音楽やレコード芸術に果たした役割を検討する。
- 第11回 前衛「楽器」としてのフィルターとダブ・ミュージックの誕生
1970年代のシュトックハウゼンと King Tubby によるポピュラー音楽のダブというかけ離れたジャンルでの音楽制作の共通項としてフィルター操作の役割と音楽表現上の位置づけを検討する。
- 第12回 CCRMA
学際的研究としての大学での電子音楽研究に焦点を当て、1970年代に開設され現在も続くスタンフォード大学の CCRMA が及ぼした影響とその功績を、デジタルシンセサイザーの開発研究と電子音楽の制作環境を中心に検討する。また同時期に開設されいづれも今日まで活発な研究活動を展開するフランスの IRCAM との対比において考察する。
- 第13回 演奏における artefacts
音楽演奏における artefacts(ここでは付加的人工物)による楽器の構造的・機能的拡大や楽器概念の拡大について検討する。
- 第14回 まとめ
総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。
予習復習として、毎回の授業で担当教員が指定するテキスト（英語原著論文を含む）を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Frøde Weium, Tim Boon (Ed), "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)", Smithsonian Institution Scholarly Press (2013), ISBN 978-1-935623-10-6

【参考書】

【アメリカ文化におけるポピュラー音楽】大和田俊之、「アメリカ音楽史 ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで」、講談社 (2011)、ISBN: 978-4062584975

【英米文化における教会音楽】越川弘英、「教会音楽ガイド」、日本基督教団出版局 (2010)、ISBN: 978-4818407497

【ポピュラー音楽、教会音楽と電子楽器】

Vail M., "The Hammond Organ: Beauty in the B," Backbeat Books (2002), ISBN: 978-0879307059

Pinch T., "Analog Days: The Invention and Impact of the Moog Synthesizer," Harvard University Press (2004), ISBN: 978-0674016170

Vail M., "Vintage Synthesizers," Backbeat Books (2000), ISBN: 978-0879306038

【フィールド録音、ブルース音楽、黒人文化】Lomax A., Jackson B., "Parchman Farm: Photographs and Field Recordings 1947-1959," Dust-to-Digital (2015), ISBN: 978-0981734293

【アメリカの電子音楽研究】Nelson A., "The Sound of Innovation: Stanford and the Computer Music Revolution," The MIT Press (2015), ISBN: 978-0262328807

【60年代カウンターカルチャーと前衛音楽】

Bernstein, D., "The San Francisco Tape Music Center: 1960s Counterculture and the Avant-Garde," University of California Press (2008), ISBN: 978-0520256170

【Ethel Smith と教会音楽、ポピュラー音楽】

大嶋良明、「Ethel Smith をめぐって」、『異文化』, 第18号, pp231-240, 法政大学国際文化学部 (2017), ISSN: 13493256

Smith E., "Ethel Smith's Favorite Hymns for Hammond Organ," Ethel Smith Music Corp.(1948).

Smith E., "Ethel Smith's Easter Music for the Spinnet Model Hammond Organ," Ethel Smith Music Corp.(1954).

Smith E., "Ethel Smith's Simplified Transcriptions of Spirituals Registered for Pipe and Hammond Organ," Ethel Smith Music Corp.(1949).

Ethel Smith Music Corp. (Ed.), "20 Stars, 40 Hits for Hammond Organ (Pre-set and Spinnet Models)," Ethel Smith Music Corp. (1957).

Smith E. (Arr.), "The Golden Organ Instructor," Charles Hansen Educational Sheet Music and Books (c1973)

その他必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%

輪講 25%

課題 20%

学期末レポート 30%

を総合的に評価する。

設定した達成目標を60%以上達成している場合に合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

文献購読とレポーター制による学習負担については工夫に努める。2018年度は購読文献に現代的視点を取り入れ、インターネット上のメディア情報についても取り扱った。2021年度は担当教員が国内研究を取得したので、2022年度にはこの間の深化を盛り込んだ内容としたい。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノート PC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。国際文化研究科では、学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集する Wiki やポートフォリオツール等の CMS を個々の研究科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用された。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード：ミュージコロジー、現代音楽、コンピュータ音楽、電子楽器、ポピュラー音楽、アーティファクト（知的人工物）、音響メディア、メディアアート

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【担当教員の実務経験】

担当教員は IT 企業での研究所勤務において 15 年間のデジタル信号処理（特にデジタル音響、統計モデルによる音声認識）、マルチメディア処理（音楽音響、電子透かし）分野の経験がある。

【Outline (in English)】

This course deals with a cross-disciplinary area of Musicology, Computer Music and History of various musical instruments and studio production gears. Course materials will be taken from "Material Culture and Electronic

Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)" by Smithsonian Institution Scholarly Press.

Grading policy is as follows:

In-class contribution: 25%

Analysis report on reading assignment: 25%

Homework: 20%

Term paper: 30%

Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.

The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

FRI500G1 - 307

多文化情報メディア論Ⅱ

重定 如彦

サブタイトル：人工知能について学ぶ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在、大きな社会的注目を集めている人工知能について、古典的なチェスなどのゲームを題材とする AI からはじめ、近年注目を浴びている画像を認識するディープラーニングを用いた AI などを題材とした実習を行いながらその仕組みについて学び、人工知能ができる事、できない事について理解できるようにする。

また、人工知能が社会に与える影響などについて考察する。

【到達目標】

人工知能の基礎を学ぶ。

人工知能が社会に与える影響について自分なりの考察を行えるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

人工知能について、古典的なチェスのようなゲームにおける手法から始め、最近注目を浴びてきているディープラーニングを使った画像認識に至るまで、具体的にその仕組みについて実習を行いながら学習していく。

授業では、あらかじめ与えたテーマについて各自が発表し、その内容についての議論なども行う。

学生の理解度に応じて、実際に動作する、簡単な人工知能のプログラミングの実習などを行うことも考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	人工知能の定義と歴史	授業の導入及び、人工知能の定義や歴史について学ぶ
2 回	ゲームの人工知能	○ × ゲームやチェスなど、ゲームにおける人工知能の考え方について学ぶ
3 回	ゲーム木と探索	ゲームを題材とした人工知能における、古典的な手法であるゲーム木とその探索について学ぶ
4 回	α β 法と、枝刈り	ゲーム木の探索を効率的に行うための手法の一つである α β 法と、ゲーム木の枝刈りについて学ぶ
5 回	様々な探索手法	ゲーム木の様々な探索手法について学ぶ
6 回	評価関数	状況を数値化するための手法（評価関数）について学ぶ
7 回	機械学習とディープラーニング	機械学習の基礎とその種類について学ぶ
8 回	ニューラルネットワーク	ディープラーニングの基礎となるニューラルネットワークについて学ぶ
9 回	画像の分類	機械学習を用いた画像認識について学ぶ
10 回	ディープラーニングによる学習	人工知能がディープラーニングにおいて、どのように学習していくかについて学ぶ
11 回	機械学習における様々な手法	機械学習で用いられる様々な手法について学ぶ
12 回	人工知能の問題点	人工知能が抱える問題点や、限界などについて学ぶ
13 回	社会に与える影響	人工知能が社会に与える影響について議論する
14 回	まとめ	授業で学んだことのまとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前半は教科書を指定しないが、授業で学んだことをしっかりと復習し、授業内で提示する次回の授業のテーマについて予習する。

後半は教科書を読んで予習を行い、授業で学んだことをしっかりと復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

「ゼロから作る Deep Learning — Python で学ぶディープラーニングの理論と実装」 斎藤 康毅 オライリー・ジャパン

その他、必要に応じて授業内で提示する。

【参考書】

なし

【成績評価の方法と基準】

「配分」

平常点 25 %、授業内での発表や議論 50 %、レポート 25 %

「評価基準」

発表及びレポートは、読解の正確さ、発表資料またはレポートの適切さ等によって評価する

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門分野＞情報科学

＜研究テーマ＞ユビキタスコンピューティング、分散 OS、ユーザインタフェース <主要研究業績>

「デジタルミュージアムのためのキオスク型 WWW ブラウザ」、電子情報通信学会論文誌, vol.J85-D1, No.3, 2002 年 3 月

「分散ハイパーメディア OS Net-BTRON におけるハイパーメディアサービスマネジメント機構」、情報処理学会論文誌, 2001 年 6 月

A Distributed Hypermedia Operating System: Net-BTRON, In Proceedings of the 2000 International Conference on Communication Technology, IFIP ICCT2000/WCC2000, vol.2 (Aug.2000)

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura, "ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure," 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010), pp. 303 - 310, July 19 - 23, 2010.

【Outline (in English)】

The objectives of this class are to learn about basics of artificial intelligence, and discuss about influence of artificial intelligence on our society.

In the first half of the class, the textbook is not specified, but students are expected to review what they have learned in the class and prepare for the next class topic to be presented in class.

In the second half, students are expected to read the textbook and review what they have learned in class. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

Distribution.

Ordinary points: 25%, presentations and discussions in class: 50%, reports: 25%.

Evaluation Criteria

Presentations and reports will be evaluated on the basis of accuracy of reading, appropriateness of presentation materials and reports, etc.

LNG500G1 - 308

外国語実践研究 A (英語)

MARK E FIELD

備考 (履修条件等) : 初回授業に出席し、受講許可を得ること

実務教員 :

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. All third and fourth-year students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country through their Study Abroad experience, which is an Intercultural Communication Activity sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

【到達目標】

The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The theme of this English Application course is to explore how the world continues to become increasingly interconnected due to better communication systems and increasing opportunities for international travel. It will also examine how more people around the world are experiencing interactions with people from different countries and cultures, i.e., directly experiencing Intercultural Communication through tourism.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System.

In this course, we will first look at the historical development of tourism and its expanding cultural significance. Later participating students will be asked to investigate potential areas and/or sites where tourism is developing or may be developed in the future. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態 : 対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
Week 2	History of Tourism: World Tourism Day	Brief English lecture on UNWTO. Students take notes, followed by class discussion and question and answer session.
Week 3	History of Tourism: Global Code of Ethics for Tourism	Brief English lecture on UNWTO's Code of Ethics, students take notes, then discuss parts of the code and their practical meaning.
Week 4	History of Tourism: The Development of Mass Tourism	Brief English lecture on the technological and economic changes that made modern mass tourism possible. Students take notes, followed by class discussion, and Q&A session.
Week 5	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourist destinations incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 6	Tourist Markets: Transportation & Infrastructure	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 7	Tourist Markets: Accommodations	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.

Week 8	Tourist Markets: Attractions & Activities	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 9	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourism related topics incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 10	New Modes of Tourism: Cruises	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 11	New Modes of Tourism: Thematic Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 12	Business Constraints: The Economics of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 13	Social Considerations: The Environmental and Cultural Impacts of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 14	Examination/Comments	Examination/Comments

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review vocabulary and previous lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト (教科書)】

The instructor will provide some course material early in the semester, and participating students will generate more course material as the semester progresses.

【参考書】

An English to English Dictionary is recommended.

This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】

40% Ongoing Evaluation (Participation, Discussions, Homework, etc.)

40% Short Presentations

20% Final Examination/Term Project

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】

Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance. The instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】

OHC and PC presentations.

【その他の重要事項】

Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester. The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

【Outline (in English)】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. All third and fourth-year students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country through their Study Abroad experience, which is an Intercultural Communication Activity sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

LNG500G1 - 309

外国語実践研究 B (英語)

大野 ロベルト

備考 (履修条件等) : 初回授業に出席し、受講許可を得ること

実務教員 :

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will practice English discourse in a variety of communication modes related to the presentation and discussion of both Japanese and foreign cultural topics. Students will speak on selected topics after consultation with the professor. Following each class time presentation, the student presenter will field questions from the other students in a standard Q&A format.

【到達目標】

The goal of this course is to assist students enrolled in Graduate School to acquire a set of language skills necessary to conduct research and present its outcome in English at a suitable level.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System.

During each class meeting students will give short lectures related to cultural topics followed by classroom practice of various styles of English discourse. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
第 2 回	Introduction to How to Make Presentations on Culture in English	Introduction to Specialized Vocabulary, Presentation Methods
第 3 回	Traditional Culture: Everyday Life	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, Group Discussions, and Written Assignment
第 4 回	Traditional Culture: Pre-modern cityscapes	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 5 回	Traditional Culture: Festivals	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 6 回	Traditional Culture: Performing Arts	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 7 回	Contemporary Culture: Student Life in Present-day Society	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions, and Written Assignment
第 8 回	Contemporary Culture: Sports as a Cultural Activity	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 9 回	Contemporary Culture: The Arts	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 10 回	Contemporary Culture: Language and Present-day Life	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 11 回	Comparison of Cultures: Japan and Asia	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions, and Written Assignment

第 12 回	Comparison of Cultures: Japan and America	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 13 回	Comparison of Cultures: Japan and the World	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 14 回	Comments/Conclusion	Comments/Conclusion

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

Read about Japanese culture.

The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト (教科書)】

The instructor will provide some reference materials.

【参考書】

An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】

50% Presentation and Class Participation

50% Written Assignments

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】

Not Applicable.

【Outline (in English)】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will practice English discourse in a variety of communication modes related to the presentation and discussion of both Japanese and foreign cultural topics. Students will speak on selected topics after consultation with the professor. Following each class time presentation, the student presenter will field questions from the other students in a standard Q&A format.

LNG500G1 - 308

外国語実践研究 A (ドイツ語)

熊田 泰章

備考(履修条件等)：初回授業に出席し、受講許可を得ること

実務教員：

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

これまでに身に付けたドイツ語の運用能力をさらに高めるためのトレーニングを行います。授業の前半では、辞書なしで文意を捉えられるよう速読の力を養い、後半ではドイツ語の構文を正しく理解し精緻に読み解けるよう、精読の訓練をしていきます。また必要に応じて会話や聞き取りの練習も行います。

【到達目標】

ドイツ語圏の生活、文化、社会、歴史など多様なテーマに関する理解を深める。抽象的なテーマを扱ったドイツ語の文章を正確に読み解く。辞書なしで文章の大意を把握できるようになる。ドイツ語のしくみや、ドイツ語圏の人々の考え方を学ぶ。様々な文化との対比を通して、間文化性を理解する。大学院生として必要なドイツ語運用能力を修得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

ドイツ語圏の文化や歴史に関する教材資料を用います。授業の前半では、初見のテキストを辞書なしで読み、理解を得ていくことを練習をします。後半では、内容を正確に読み解くとともに、そこで取り上げられているトピックについての議論も行います。毎回、学習したことをレポートとして提出する。教材資料の提示とレポートの提出は学習支援システムによって行います。各回の授業の最初に、前回のレポートについてのフィードバックとして、提出レポートの講評を行います。セメスターの後半では、受講者の提案によって、取り上げるテーマを選定し、テキストを選んでいきます。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の進め方についての解説、受講者の自己紹介とドイツ語レベルの確認。
2	2021年の世界を振り返る	2021年に起きたことや社会情勢を振り返る。
3	ドイツ語圏を知る(1) ドイツについて	ドイツ語圏のいまを知る。ドイツの社会や政治制度について、日本とも比較しながら学ぶ。
4	ドイツ語圏を知る(2) オーストリアについて	ドイツの隣国オーストリアの政局や移民政策、難民受け入れなどについて概観する。
5	ドイツ語圏を知る(3) スイスについて	EU諸外国とは大いに異なるスイスの独自性や地域性について、ニュース記事などを訳しながら情報を得る。
6	ドイツ語圏を知る(4) AfD台頭とドイツ社会	要人の殺害やシナゴーク襲撃など、ドイツにおける排外主義の高まりについて考える。
7	ドイツ語圏を知る(5) ドイツの選挙制度	似ているようで大きく異なる日独の選挙制度や政治システムの相違について考察する。
8	ドイツ語圏を知る(6) ドイツと日本の交流史を知る	1861年に修好通商条約が締結されて間もなく160年となる日本とドイツの関係について学ぶ。
9	ドイツ語圏を知る(7) ドイツとEU諸国との関係	戦後ドイツが諸外国とどのような関係を築いてきたのかを知る。
10	コロナ禍	コロナ禍について確認する。
11	受講者選定テーマ1	受講者選定テーマに即したテキストを用いる。初級・中級文法の定着を図る。
12	受講者選定テーマ2	受講者選定テーマに即したテキストを用いる。リスニングの練習を加える。
13	受講者選定テーマ3	受講者選定テーマに即したテキストを用いる。
14	このセメスターのまとめ	複雑な表現を学ぶことを加える。学んだことを整理する。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

毎回の授業の教材資料は、学習支援システムで事前に配布しますので、適宜予習してください。

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト(教科書)】

教科書は使用せず、適宜、教材資料を学習支援システムで提示します。

【参考書】

中島悠爾・朝倉巧・平尾浩三『ドイツ文法総まとめ』白水社、2003年
辻朋季『もやもやを解消! ドイツ語文法ドリル』三修社、2015年

【成績評価の方法と基準】

大学院生として、授業での発言と参加40%、課題への取り組み40%、小テスト20%。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

受講者が自ら発言する授業運営とするように努めています。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムで教材資料の提示と課題の提出を行います。

【Outline (in English)】

【Course outline】

The aim of this course is to make progress of German language skills acquired by staying and studying in Germany or in Switzerland and so on. The course is especially focused on reading German texts. On one hand we'll practice to read various types of texts rapidly without using dictionaries in order to be able to grasp the main points of the text. On the other hand we read more complicated texts precisely by paying attention to the structures of sentences as well as cases (nominative, genitive, dative and accusative).

【Learning Objectives】

The goals of this course are to make progress of German language skills acquired by staying and studying in Germany, Austria, Switzerland or so, and to gain broad cultural understanding.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following: contribution to each class meeting: 40%, short reports : 40%, examinations: 20%

LNG500G1 - 309

外国語実践研究 B (中国語)

曾 士才

備考(履修条件等)：初回授業に出席し、受講許可を得ること

実務教員：

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

本授業は、中級レベル以上の中国語コミュニケーション能力を有する学生が、長文の中国語を読解する力を身につけるとともに、それを質の高い日本語に翻訳する力を養うことをめざしている。

【到達目標】

本授業の到達目標は、中国の報道記事や評論文を辞書やネットを使用しながら十分に読みこなすとともに、レベルの高い日本語に仕上げることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

新華社のニュースサイトや中央テレビニュースアプリなど各種サイトが提供する報道記事を熟読し、和訳することによって中国語の読解力、翻訳力を高めるとともに、中国の政治、経済、社会、文化、歴史について日中双方の視点からバランスよく理解を深める。

課題等へのフィードバックは Hoppii の掲示板や授業時間を通じて行う。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

なし/No

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション、論説文の基礎①	授業の進め方の説明、教材配布。『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第 1 課
第 2 回	論説文の基礎②	『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第 2 課、第 3 課
第 3 回	論説文の基礎③	『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第 4 課、第 5 課
第 4 回	論説文の基礎④	『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第 6 課、第 7 課
第 5 回	プリント 1 ①	政治・経済関係の記事を読み、日本語に訳す。
第 6 回	プリント 1 ②	翻訳と講読を続ける。
第 7 回	プリント 1 ③	翻訳と講読を完成させ、全体を振り返る。
第 8 回	プリント 2 ①	社会関係の記事を読み、日本語に訳す。
第 9 回	プリント 2 ②	翻訳と講読を続ける。
第 10 回	プリント 2 ③	翻訳と講読を完成させ、全体を振り返る。
第 11 回	プリント 3 ①	文化関係の記事を読み、日本語に訳す。
第 12 回	プリント 3 ②	翻訳と講読を続ける。
第 13 回	プリント 3 ③	翻訳と講読を完成させ、全体を振り返る。
第 14 回	読解力テストと講評	読解力テストの実施とテスト後の講評

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

三浦正道『論説体中国語読解力養成講座』の第Ⅱ部論説体解析講座の練習問題を各自で翻訳し、第 2 回から第 4 回までの授業に備える、また、プリント教材(報道記事など)を読み、翻訳し、第 5 回から第 13 回までの授業に備えておく。本授業の準備・復習時間は、各 1~2 時間程度。

【テキスト(教科書)】

プリント教材

【参考書】

三浦正道『論説体中国語読解力養成講座-新聞・雑誌からインターネットまで』東方書店 2010 年

【成績評価の方法と基準】

第Ⅱ部論説体解析講座の練習問題の翻訳(20%)と学期末に実施する読解力テスト(80%)で達成度を判定する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。授業への出席は成績評価の大前提となる。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

【Outline (in English)】

(Course outline)

The aim of this course is to help students acquire not only the intermediate or higher Chinese reading comprehension, but also high level Japanese translation ability.

Students will mainly read the news or critique in Chinese newspapers or magazines.

(Learning Objectives)

At the end of the course, students should be able to efficiently read news articles and critiques using dictionaries and the Internet. Students are also expected to improve their ability to translate into high-level Japanese.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, students will be expected to translate exercises for reading comprehension (in the 2nd to 4th classes)、to read and translate specified news articles (in the 5th to 13th classes) . Your study time will be one or two hours.

(Grading Criteria /Policy)

Final grade will be calculated according to the following process: Translation of basic exercises (20%) and reading comprehension test conducted at the end of the semester (80 %)

LNG500G1 - 308

外国語実践研究 A (ロシア語)

佐藤 千登勢

備考(履修条件等)：初回の授業に出席し、受講許可を得ること

実務教員：

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

これまでで培ってきたロシア語の文法と読解の力を向上させ、ロシア語でロシアの文化や慣習について知る楽しみを分かち合います。CEFR A2 レベルの力が必要です。

【到達目標】

ロシアの文化や慣習に関する長文をロシア語で多読することで、それらの知識を身につけるばかりでなく、ロシア連邦教育科学省が認定するロシア語検定試験(TPKII)の第1レベル(CEFR B1)と同等の力が身につくようにします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

文法と読解に重点をおきます。TPKIIの文法問題とロシアの文化や慣習、社会をテーマとしたテキストを教材として、限られた時間に情報を的確に把握する練習を積み重ねていきます。課題は授業で確認と解説を行うかたちでフィードバックします。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

なし/No

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。使用教材の確認
第2回	ロシアの芸術に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの文法問題(形容詞・動詞)、読解(ロシア美術館について)。
第3回	ロシアの学者に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの文法問題(形容詞・名詞の格変化)、読解(メンデレーエフについて)。
第4回	ロシアの自然に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの文法問題(動詞の時制)、読解(バイカル湖について)。
第5回	ロシア社会に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの読解(現代社会で働く女性について)。
第6回	ロシア芸術に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの読解(画家グラバーリのチャイコフスキーとの出会いについて)。
第7回	ロシアの都市に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの読解(サンクトペテルブルクについて)。
第8回	ロシアの大学に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの読解(モスクワ大学の歴史と現在)。
第9回	ロシアの大学に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの読解(モスクワ大学の歴史と現在)の続き。
第10回	ロシアの国旗に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの読解(ロシア国旗の歴史)。
第11回	ロシアの国旗に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの読解(ロシア国旗の歴史)の続き。
第12回	ロシアの国旗に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの読解(ロシア国旗の歴史)の続き。
第13回	ロシアの祝日に関するテキストの読解と解説	TPKII第1レベルの読解(現代ロシアの祝日に関する概説/マロース爺さんと雪娘について)。

第14回 ロシアの祝日に関する TPKII第1レベルの読解(現代テキストの読解と解説 ロシアの新年の祝い方)。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

ロシア語能力検定試験やTPKIIの過去問題の課題、長文読解の学習に、1回につき1.5時間程度が必要となります。

【テキスト(教科書)】

適宜、学習支援システムなどを通して配付します。

【参考書】

教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点80%、小テスト20%とし、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

大学院での本科目の開設は本年が初年度であるため、学生の意見は得られていない。

【Outline (in English)】

● Course outline

The aim of this course is to maintain and improve Russian grammar and reading comprehension in Russian. We would like to share the pleasure of learning more about Russian culture and customs through reading texts in Russian. The level of this course is A2 (CEFR).

● Learning Objectives

Students aim to pass the level targeted by each of you of the Russian Language Proficiency Test or the Test of Russian as a Foreign Language(TORFL) certified by the Ministry of Education and Science of the Russian Federation.

● Learning activities outside of classroom

It takes about 1.5 hours each time to prepare for the Russian language proficiency test, past questions of TORFL, and reading comprehension.

● Grading Criteria /Policy

Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80%) and quizzes(20%). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

LNG500G1 - 309

外国語実践研究 B (ロシア語)

佐藤 千登勢

備考(履修条件等)：初回授業に出席し、受講許可を得ること

実務教員：

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

ロシア映画を3編とりあげ、その作品に関する文章をロシア語で読み、これを確認するかたちで映画作品を部分的に鑑賞します。読解力、聴解力を身につけます。読解についてはTPKI第1レベル程度の力をつけることが可能となり、ロシアの日常や慣習、歴史について知識を得ることができるといえます。

【到達目標】

読解力を向上させ、ロシア語学習に対するモチベーションをいっそう高めるために、ロシア映画の作品論・作品概要をロシア語で読み、これを確認するかたちでロシア映画の珠玉に触れます。そうすることで、TPKI第1レベルの読解力、文法力を身につけると同時に、ロシアの文化や歴史に関する知識を獲得できるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

ロシア映画の3つの作品に関する資料を講読します。みなさんの学習に基づいて進め、文法事項や文章の構造の説明を丁寧におこないます。作品に関する情報を把握した後、これを確認するために実際の映画作品を少しずつ鑑賞します。課題は授業で確認と解説を行うかたちでフィードバックします。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。資料配付。
第2回	映画 Война и мир: Андрей Болконский	映画 Война и мир: Андрей Болконский の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第3回	映画 Война и мир: Андрей Болконский	映画 Война и мир: Андрей Болконский の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第4回	映画 Война и мир: Андрей Болконский	映画 Война и мир: Андрей Болконский の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第5回	映画 Война и мир: Наташа Ростова	映画 Война и мир: Наташа Ростова の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第6回	映画 Война и мир: Наташа Ростова	映画 Война и мир: Наташа Ростова の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第7回	映画 Война и мир: 1812	映画 Война и мир: 1812 の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第8回	映画 Война и мир: 1812	映画 Война и мир: 1812 の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。

第9回 映画 Война и мир: Пьер Безухов について 映画 Война и мир: Пьер Безухов の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。

第10回 映画 Война и мир: Пьер Безухов について 映画 Война и мир: Пьер Безухов の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。

第11回 映画 Папа, сдохни について 映画 Папа, сдохни の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。

第12回 映画 Папа, сдохни について 映画 Папа, сдохни の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。

第13回 映画 Салют-7 について 映画 Салют-7 の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。

第14回 映画 Салют-7 について 映画 Салют-7 の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

ロシア映画の作品に関するテキスト読解の予習に、1回につき1.5時間程度が必要となります。

【テキスト(教科書)】

適宜、教場で配付、もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】

教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点80%、小テスト20%とし、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

大学院での本科目の開設は本年が初年度であるため、学生の意見は得られていない。

【Outline (in English)】

● Course outline

We will pick up three Russian films, read the text about the film in Russian, and partially watch the film by confirming this. Acquire reading comprehension and listening comprehension. You will be able to gain knowledge about Russian daily life, customs and history.

● Learning Objectives

Students will acquire the level of CEFR B1 of reading comprehension and grammar, as well as knowledge of Russian culture and history.

● Learning activities outside of classroom

It takes about 1.5 hours to prepare for reading comprehension of texts about the Russian movies.

● Grading Criteria /Policy

Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80%) and quizzes(20%). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

OTR500G1 - 401

Thesis Writing A

ジェイソン ポール スミス

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

The course will review the fundamentals of good English writing, and help students build a solid foundation in the English writing mechanics and style used in academic papers.

【到達目標】

Participants will take an active approach to increasing their English writing skills, and ultimately write an academic research paper. Participants will focus on basic research and academic writing methods. Mechanics of writing such as summarizing, paraphrasing, narrowing topics; and developing thesis statements and topic sentences, as well making accurate citations will be learned. The Modern Language Association (MLA) writing format will be used.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

The course will emphasize writing, coherence, and common stylistic errors in academic writing. Students will develop a bibliography and build support for their research papers. This class will not be filled by endless lectures. Instead, time will be occupied by writing practice and peer editing. Thesis Writing A emphasizes the usage of a textbook while Thesis Writing B will be taught with teacher handouts and much in-class writing. The repetition between semesters is intentional; practice & more practice. I reserve the right to make adjustments to this syllabus to meet the collective needs of the class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	Unit 1 Going to Write One Paragraph	Class introduction & going over syllabus, short lecture on academic vs. non-academic writing. Topic sentences, supporting sentences and concluding sentences.
第 2 回	Unit 2 Trying To Be Polite	Using appropriate style in writing, what is plagiarism and how to avoid it.
第 3 回	Unit 3 What Do You Think?	Generating ideas, analyzing an opinion paragraph, writing the first draft.
第 4 回	Unit 4 This May Work	Proposing a solution, brainstorming, peer review.
第 5 回	Unit 5 How Could It Happen?	Writing cause and effect paragraph.
第 6 回	Unit 6 What Is an Essay?	Essay structure, effective thesis statements, body and conclusions.
第 7 回	Unit 7 Writing Your Own Outline	More on thesis statements, main ideas and writing your own idea.
第 8 回	Unit 8 Let Me Tell You About a Beautiful Place	Descriptive Essays 1: How to write vibrant and descriptive essays, painting a picture with words
第 9 回	Unit 9 Let Me Tell You About an Amazing Time	Descriptive Essays 2
第 10 回	Unit 10 That's a Good Point	Persuasive Essays 1: Health issues, planning your strategy.
第 11 回	Unit 11 Developing Logical Points of Support	Persuasive Essays 2: Health issues; Build Your Essay, putting it all together, review.
第 12 回	Unit 12 How Are They Different?	Identifying similarities and differences.
第 13 回	Unit 13 How are They Different?	Comparison Essays 1 :Education; 5 basic stages in comparison essays.
第 14 回	Unit 14 Let's Sort It Out	Writing informative, interesting and easy-to-follow classification essays (Classification Essays 1 Events and Festivals).

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will have to do all textbook activities and finish one short unit (5-8 pages) each week as instructed.

Students on average need to allow 90 minutes for each scheduled class.

【テキスト（教科書）】

From Paragraph to Essay (NAN'UN-DO) ISBN 978-4-523-17727-2 C0082

【参考書】

Handouts given by the instructor

【成績評価の方法と基準】

Homework and assigned work must be handed in on the date announced by the instructor. Assignments submitted late without an acceptable excuse and formal verification for the absence will result in a loss of ten points per day for the assignment. Plagiarism: knowingly representing the words of another as one's own in any academic activity will automatically result in a failing grade on the assignment.

50% Participation, Discussions and Homework

50% Textbook Exercises and Writing Assignments

【学生の意見等からの気づき】

The class is now offered for one full academic year as explained above.

【学生が準備すべき機器他】

Thesis Writing A does not require any additional equipment.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> American Studies

<研究テーマ> Social Studies

<主要研究業績> The Uprising of the Molly Maguires in Eastern Pennsylvania, Washington State University Press, 1991

Lost Art of the Cornet Society, Sidgwick & Jackson Ltd; June, 2005

OTR500G1 - 402

Thesis Writing B

ジェイソン ポール スミス

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

The course will review the fundamentals of good English writing, and help students build a solid foundation in the English writing mechanics and style used in academic papers.

【到達目標】

Participants will take an active approach to increasing their English writing skills, and ultimately write an academic research paper. Participants will focus on basic research and academic writing methods. Mechanics of writing such as summarizing, paraphrasing, narrowing topics; and developing thesis statements and topic sentences, as well making accurate citations will be learned. The Modern Language Association (MLA) writing format will be used.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

Students receive feedback as follows on each assignment they submit; the teacher evaluates their work with a letter grade as well as written comments on their work and suggestions for any improvements needed. The course will emphasize writing, coherence, and common stylistic errors in academic writing. Students will develop a bibliography and build support for their research papers. This class will not be filled by endless lectures. Instead, time will be occupied by writing practice and peer editing. Thesis Writing A emphasizes the usage of a textbook while Thesis Writing B will be taught with teacher handouts and much in-class writing. The repetition between semesters is intentional; practice & more practice. I reserve the right to make adjustments to this syllabus to meet the collective needs of the class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	Tentative Course Schedule	Go over syllabus.
第 2 回	Identifying and creating thesis statements	Review: identifying and creating thesis statements. Student practice of this concept Homework: One page paper on why you are pursuing a Master's Degree (due next week). Handout list of academic topics for research paper
第 3 回	What is the difference between a thesis statement and a topic sentence?	Peer editing on the above essay, When and Where to use Personal Pronouns homework (due next week) your topic for research and why you chose it.
第 4 回	In class writing	Modern Language Association (MLA formatting), work on term paper, quotations Laptop computers required from this class and all remaining classes
第 5 回	Beginnings/Endings: Titles, Introductions, Quotations, Conclusions	More on MLA formatting. Short lecture with "avoiding ambiguity" handout. Independent work on essays and Q&A.
第 6 回	How to research	Supporting information for your essay, coherent paragraphs with transitions, citing sources.
第 7 回	Writing bibliographies	One half hour lecture on writing bibliographies followed by trip to the library to select supporting information with citations.

第 8 回	Process of Revising	Short lecture on rewriting followed by application and peer editing. Beginnings and ends (titles, intros and conclusions).
第 9 回	Review and beyond	Developing thesis statements, topic sentences, and supporting ideas & independent work on essays.
第 10 回	Feedback	Q & A ... First hard copy draft of five page essay due. In class pair-work and review.
第 11 回	Workshop	First drafts returned with feedback. Q & A as well as pair-work and independent writing of 2nd draft.
第 12 回	Lecture & Workshop	Short lecture on solidifying writing techniques followed by independent writing.
第 13 回	Wrapping things up	Hard copy of 2nd draft of five page essay due. Stressing clarity & thought provoking writing. In class writing.
第 14 回	Review	Lecture of main writing mechanics previously taught. In class writing.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will have to read and understand all handouts given in class as well as materials for each class, as instructed.

Students on average need to allow 90 minutes for each scheduled class.

【テキスト（教科書）】

From Paragraph to Essay (NAN'UN-DO) ISBN 978-4-523-17727-2 C0082

【参考書】

Handouts given by the instructor

【成績評価の方法と基準】

Homework and assigned work must be handed in on the date announced by the instructor. Assignments submitted late without an acceptable excuse and formal verification for the absence will result in a loss of ten points per day for the assignment. Plagiarism: knowingly representing the words of another as one's own in any academic activity will automatically result in a failing grade on the assignment.
50% Participation, Discussions and Homework
50% Textbook Exercises and Writing Assignments

【学生の意見等からの気づき】

The class is offered for one full academic year as explained above. Although the aim of the instructor is to follow the syllabus, he reserves the right to make adjustments or changes when necessary.

【学生が準備すべき機器他】

Thesis Writing B requires students to have a laptop computer starting the second week of the semester.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> American Studies
<研究テーマ> Social Studies
<主要研究業績> The Uprising of the Molly Maguires in Eastern Pennsylvania, Washington State University Press, 1991
Lost Art of the Cornet Society, Sidgwick & Jackson Ltd; June, 2005

OTR500G1 - 403

Oral Presentation

MARK E FIELD

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Good communication skills are necessary for anyone wanting to work in an international environment. This course is for students with a strong desire to improve their English language presentation skills. The course will focus on helping students talk about their current research theme in English and acquiring the language skills used in Oral Presentations given in English.

【到達目標】

The goal of the course is to develop students' communications skills and confidence as public speakers. Course content will include listening and vocabulary development, as well as extensive practice in using spoken English as a presentation tool. The main theme of students' presentations will be based on their current research interests.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である。また、「DP1」の達成のために望ましい。

【授業の進め方と方法】

When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System.

The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to actively participate in classroom activities, prepare weekly homework assignments, and review and practice at home for in-class presentations. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	Class Orientation:	Presentations and Speeches: What is the Difference?
2回	Structure:	The Types of Language Used in an Oral Presentation
3回	Presentation #1:	Presenting Your Background & Research Interests
4回	Learning Strategy:	Assessing Your Skills
5回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part I
6回	Presentation #2:	Introducing Geographical Locations
7回	Expanding Discourse:	Exchanging Information
8回	Reflective Communication:	Planning Your Presentation
9回	Presentation #3:	Presenting Books and Research Material
10回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part II
11回	Expanding Discourse:	Controlling Your Presentation Environment
12回	Putting It All Together:	Talking About Main Points
13回	Putting It All Together:	Clearing up Confusing Ideas
14回	Final Assessment:	Presentation of Your Research Theme

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

University guidelines suggest preparation and review are around 4 hours a week for a two-credit course and around an hour a week for a one-credit course.

Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. Effective presentations depend on sufficient preparation and practice, so students will need to prepare and practice outside of class before giving their in-class presentations. 本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

The instructor will provide some reading materials related to Oral Presentation Skills.

【参考書】

Students will be expected to bring in reading materials related to their current research interests.

【成績評価の方法と基準】

30% On-going Evaluation participation, discussions etc.

20% Homework

50% In-class Presentations

** Class attendance is a course requirement.

Students are allowed no more than three absences in the academic semester.

【学生の意見等からの気づき】

Previous students were happy with this course and currently no data is available to support changing it. However, the instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】

We will use some OHC (Over Head Camera) and/or PC (Personal Computer) equipment to Present Visual Aids.

【その他の重要事項】

The Instructor Reserves the Right to change or alter this syllabus as needed.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

異文化間コミュニケーション、西洋思想史、経済学、言語学

<研究テーマ>

文化の変化と西洋思想の進化

<主要研究業績>

国際線の代わりとなるスロートラベルは存在するか？

"Is There a 'Slow Travel' Alternative to Intercontinental Flight?" 異文化 13, 117-182, 2012/04

ピネチエト政治後のチリにおける文化的ヒーローの発見 "Discovering a Cultural Hero in Post-Pinochet" 異文化 9, 113-166, 2008/04

Communication, Culture, Diffusion and Education: The Complexity of Intercultural Communication, Learning from the Past and Looking to the Future 法政大学 教養部紀要 111/外国語学 外国文学, 141-166, 2000/02

SOS500G1 - 405

国際協力論

松本 悟

サブタイトル：歴史・社会影響・人材育成・地域協力から考える

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、国際開発協力で取り上げられる様々な「当たり前」を問い直し、「当たり前」の背景に存在する優位・劣位に立つ文化について考える。授業を通じて、履修した学生は、当初思いこんでいた「善い開発」を批判的に捉える分析軸を修得する。

【到達目標】

- (1) 授業で取り上げた概念や術語（テクニカルターム）について説明できる。
- (2) 当該分野の文献を批判的に読むことができる。
- (3) 課題文献や授業内の議論を踏まえて論理的に自分の考えを述べられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

■基本方針：入国できない留学生や基礎疾患を持つ学生に配慮しリアルタイムオンライン授業で実施する。授業効果など、履修者の希望があれば対面授業に切り替える可能性はある。

■第1回は教員が担当し、第2回からは事前課題文献（日本語）をもとに学生が発表・議論する。進め方は以下の通り。

- (1) 履修者全員が事前課題文献（20頁程度を想定）を熟読し、①「この文献から重要だと考えた点」を最低3つ、②そう考えた理由、③そこから導いた論点（履修者同士で議論したい点）を発表する。
- (2) (1)を共有した上で、履修者間でその日議論したい点を絞り（全ての論点でもよい）議論する。
- (3) 必要に応じて教員が補足授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業内容についての説明、発表担当者の割り振りなど。
第2回	質を測ること	国際協力の前提である「不足」は測ることの意味を考える。
第3回	貧しい人が持っているもの	貧しい人は何も持っていないわけではない。「不足」ではなく「充足」に目を向けてみる。
第4回	1つの事例から言えること	国際文化研究では事例を扱うことが多い。1つの事例から言えることは何か、考える。
第5回	分業が生み出したもの	分業はどういう社会を作ったのかを考える。
第6回	予想できないこと	開発協力では事前調査が重要だと言われる一方で「想定外」も多い。開発協力の「想定外」について考える。
第7回	支援が届かないこと	緊急援助物資が届かないという批判はよく耳にする。そのメカニズムを考える。
第8回	資源があること	資源がないことが問題だと思われがちだが、資源があることは幸せなのか、考える。
第9回	「貧しい国」が援助すること	「先進国」ではない国も対外協力をやっている。援助は余裕のある国や人がやることなのか考える。
第10回	必要な組織ができないこと	国際協力を効果的に行うための組織がなかなか作られない背景を考える。
第11回	お手本を示すこと	国際協力にとって、お手本（モデル）とは何かを考える。
第12回	成功すること	失敗して止めれば失敗、成功するまで続ければ成功。国際協力の成功とは何かを考える。
第13回	依存すること	開発協力の目的は「自立」だが、依存することは問題なのか、考える。
第14回	総合討議	春学期の授業全体を振り返った論点を抽出し、議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・事前課題文献は時間をかけて読み、課題に取り組むこと。
- ・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

佐藤仁（2016）『野蛮から生存の開発論—越境する援助のデザイナー—』（ミネルヴァ書房）

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 事前課題・発表 60%（文献の理解、批判的考察、説得力のある論点抽出）
- (2) 授業後課題 20%（授業内容の理解度）
- (3) 平常点 20%（授業での積極的な発言・議論のファシリテート）

【学生の意見等からの気づき】

Jamboard のようなブレインストーミング用のアプリを使用することで、授業中の議論をスムーズにファシリテートできる。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、および Zoom 等のリアルタイムのオンライン授業が可能な通信環境。

【その他の重要事項】

- ・国際協力に15年近く携わった教員が具体的な経験に基づく事例も紹介しながらコメントする。
- ・履修者の研究関心によって、授業内容や課題文献を若干変更することがある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際組織、開発援助、NGO、メコン地域の開発と環境

<主要研究業績>

『国際協力と想像力』（主編者、日本評論社、2021年）

『調査と権力』（単著、東大出版会、2014年）

『NGOと世界銀行』（主編者、ミネルヴァ書房、2012年）

『人々の資源論』（分担執筆、明石書店、2008年9月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（分担執筆、日本評論社、2005年9月）

※詳しい研究業績は以下を参照のこと。

<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/detail.html?lang=ja&achievement=choshoh>

【Outline (in English)】

【Course outline】

This course aims to question our common sense related to international development cooperation and to discuss the superior/inferior "culture" behind it.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1) to explain the concept of the technical terms covered at the class
- 2) to read the relevant literature critically
- 3) to express her/his opinion logically reflecting the literature or other opinions

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant literature assigned beforehand, and after the class, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

-Reading assignments and presentation at the class meeting: 60%

-Short reports after each class meeting: 20%

-Class contribution: 20%

POL500G1 - 406

国際人権論

藤岡 美恵子

サブタイトル：マイノリティの視点から考える人間の尊厳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人権は現代世界で常に重要な問題として扱われてきた。その保障は国際的に普遍的な課題として認識されており、何よりも、社会的に周縁化されてきた人々が自らの人間の尊厳を回復するための重要な手立てとして活用してきたのが人権であった。人権保障制度の発展は、そうした周縁化された立場の人々の尊厳を求める運動を契機に発展してきたと言ってよい。

しかし近代の国民国家体制とともに生まれた人権思想と制度は、その枠組みの中で排除や搾取の対象となってきた集団（先住民族、マイノリティ、移民）の尊厳を守るためには不十分、もしくは根源的な矛盾をはらむという課題に直面している。それに関係するのが植民地主義の継続である。植民地主義が終焉するどころか、新たな形態で継続しているという認識が広く支持されるようになってきている現在、近代の人権保障の思想と制度が植民地主義の観点から再考されるようになってきている。この課題は、ヘイトスピーチの台頭という重大な挑戦に直面する日本社会にとっても、きわめて重要な課題である。

本授業では、国際人権保障体制の発展を踏まえた上で、それが日本を含め世界のマイノリティや先住民族の人権にどのような影響をもたらしたのかを考察し、現代世界が直面する人権をめぐる危機を人種主義と植民地主義をキーワードに考えていく。とくに現代日本におけるレイシズムと多文化主義に焦点をあてる。

人権がともすれば「思いやり」の問題として考えられがちな日本において、人権が差別され周縁化されてきた集団による公正と尊厳を求める運動を契機に発展してきたことを理解することは、今後の日本社会の在り方を考えて行く上で意義が多い。どうすればあらゆる人々の尊厳を保障することができるのかを、人権を侵害されてきた／いる人々の立場から考える思考態度を身につけ、人権をめぐる生じている国際的な課題について批判的な理解・思考能力を養う。

【到達目標】

国際的な人権保障の体制や考え方がどのように進展してきたかを踏まえた上で、それが国内の人権保障とどのように関係しているかを理解し、20世紀終盤から21世紀にかけての国際秩序の変容の中で、人権の保障という課題がどのような矛盾や問題を抱えているのかを、植民地主義と人種主義というキーワードを使って整理し、説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

基本的に対面授業とするが、新型コロナ感染状況によってはオンライン授業に切り替えることもある。各回の指定テキストの報告発表と討論で進める。期末に小論文形式の試験を行う。初回授業を含め、授業参加の方法、各種お知らせは学習支援システムで通知する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業内容・授業計画の説明。 ●日本における人権に関する認識：ヘイトスピーチ、Black Lives Matter、#MeTooを手がかりに
第2回	国際人権の発展と現在	国際人権の起源と発展の跡をたどり現在の課題を知る。 【テキスト】阿部（2010）「国際法への眼差し——序にかえて」

第3回	変容する世界と国際人権 【テキスト】阿部（2010）第1章「人間」の終焉	冷戦終結と9・11以降、「テロリズム」という記号が動員される中での人権の後退と新たな問題を考える
第4回	人権と「文明化の使命」 【テキスト】阿部（2010）第2章「愚かしき暴力と、国際人権の物語」	植民地主義の観点から国際人権を捉えなおし、現在の「南北問題」との関係を考える
第5回	ヘイトスピーチの被害と人権 【テキスト】朴「京都朝鮮学校襲撃事件」、鄭「ヘイトスピーチ被害の非対称性」	近年問題になっているヘイトスピーチがどのような被害をもたらすのかを理解する。
第6回	ヘイトスピーチへの対応 【テキスト】阿部（2019）「国際人権法によるヘイトスピーチの規制」、中村「ヘイトスピーチの修復的アプローチを考える」	ヘイトスピーチに対して国際人権法がどう規制しているか、またヘイトスピーチを乗り越える一つの方法としての修復的アプローチを考える。
第7回	シティズンシップとレイシズム 【テキスト】梁「シティズンシップに潜むレイシズム」	シティズンシップとレイシズムがどのような関係にあるのか、日本の市民権制度・入管制度を取り上げて考える。
第8回	植民地主義と先住民族の自決権 【テキスト】上村（2001）「第3章 近代国家日本と「北海道」「沖縄」の植民地化	日本によるアイヌ・沖縄への植民地支配の歴史と先住民族の自決権を理解する。
第9回	先住民族の権利に関わる世界的動向と日本の先住民族の運動の国際的展開 【テキスト】上村（2018）「声を上げた日本の先住民族」、宮里「差別主義と民族主義の清算」	先住民族の権利を求める世界的動向が日本の先住民族にどう影響し、日本社会にどのようなインパクトをもたらしているかを考える。
第10回	植民地主義の克服と「多文化共生」論 【テキスト】藤岡「第1章 植民地主義の克服と「多文化共生」論」	北朝鮮バッシングを手がかりに、日本の「多文化共生」論と植民地主義の克服という課題の関係を考える。
第11回	多文化共生におけるマジョリティとマイノリティ 【テキスト】高谷「移民・多様性・民主主義——誰による、誰にとっての多文化共生か」、塩原「多文化共生がヘイトを超えるために」	「多文化共生」政策が移民、マイノリティへのレイシズムをなくすことにつながるのかを考える。
第12回	多文化主義と人権の未来 【テキスト】阿部（2010）第4章「要塞の中の多民族共生／多文化主義」	EUを例に多文化主義を標榜する社会における新たな排除の問題を考える。
第13回	過去の人権侵害への責任 【テキスト】阿部（2010）第7章「戦後責任と和解の模索」	現在の人権をめぐる課題が過去の重大人権侵害に対する責任と密接に関係していることを踏まえ、その責任をどのように問えるのかを考える。
第14回	まとめ／期末試験講評	授業のまとめと期末試験講評を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定テキストを事前に読み、報告者に指定された回は要約を作成し授業当日に発表する。毎回、授業でのディスカッションに備えて準備を行う。本授業の準備時間は各4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

★——指定書 要購入。その他はプリントを配布

①★阿部浩己『国際法の暴力を超えて』岩波書店、2010年（「序に変えて」、第1章、第2章、第4章、第7章）

②阿部浩己『国際人権法によるヘイトスピーチの規制』法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年

③上村英明『先住民族の「近代史」—植民地主義を超えるために』平凡社、2001年（第3章「近代国家日本と「北海道」「沖縄」の植民地化」）

④上村英明「声を上げた日本の先住民族」深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界—わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年

⑤塩原良和「多文化共生がヘイトを超えるために」岩渕功一編『多様性との対話—ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社、2021年

⑥高谷幸「移民・多様性・民主主義—誰による、誰にとっての多文化共生か」岩渕功一編『多様性との対話—ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社、2021年

⑦鄭 暎恵「ヘイトスピーチ被害の非対称性」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年

⑧中村一成「ヘイトクライムの修復的アプローチを考える」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年

⑨朴 貞任「京都朝鮮学校襲撃事件」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年

⑩藤岡美恵子「第1章 植民地主義の克服と「多文化共生」論」中野憲志編『制裁論を超えて—朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007年

⑪宮里護佐丸「差別主義と民族主義の清算」深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界—わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』2018年、昭和堂

⑫梁 英聖「シティズンシップに潜むレイシズム」『世界』2021年9月号

【参考書】

①岩崎稔他『継続する植民地主義—ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005年

②植木哲也『植民地の記憶—アイヌ差別と学問の責任』緑風出版、2015年

③岡和田晃／マーク・ウィンチェスター『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社、2015年

④エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラルイズム』岩波書店、1996年

⑤小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001年

⑥塩原良和『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義—オーストラリアン・マルチカルチュラルイズムの変容』三元社、2005年

⑦永原陽子編『植民地責任』論—脱植民地化の比較史』青木書店、2009年

⑧西川長夫『〈新〉植民地主義論—グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、2006年

⑨ガッサン・ハージ（保莉実・塩原良和訳）『ホワイット・ネイション—ネオ・ナショナリズム批判』平凡社、2003年

⑩バンセル、N.ほか『植民地共和国フランス』岩波書店、2011年

⑪樋口直人『日本型排外主義—在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会、2014年

⑫ミシェル・ヴィヴィオルカ『レイシズムの変貌：グローバル化がまねいた社会の人種化、文化の断片化』明石書店、2007年

⑬ジョージ・M. フレドリクソン『人種主義の歴史』みすず書房、2009年

⑭前田朗『ヘイト・クライム』三一書房労働組合、2010年

⑮松島泰勝『琉球 奪われた骨—遺骨に刻まれた植民地主義』岩波書店、2018年

⑯アルベール・メンミ『人種差別』法政大学出版局、1996年

⑰テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める—アイヌが経験する近代』みすず書房、2000年

⑱梁英聖『日本型ヘイトスピーチとは何か』影書房、2016年

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点 50%（発表、討論への参加）、期末試験 50%
- ・発表については、指定テキストの内容の報告だけでなく、討論のための論点の提示を求める。
- ・討論への参加については、内容の理解に加え、討論の進行を助け、他の参加を促すような積極的な疑問の提示、意見表明を評価する。
- ・期末試験は、予め提示する2、3題の質問に対する小論文形式で行う。答案の提出日は第13回授業と第14回授業の間で後日指定（学習支援システムを通じて提出）。授業の到達目標の達成度を基準に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本授業を受講する以前は人権問題についてよく知らなかったため、当初は内容を理解するのに精一杯だったが、次第に知的関心を刺激されるようになり、授業をとってよかったという受講生の意見を踏まえ、できるだけ具体的な問題を取り上げて関心をもてるように工夫した。

【学生が準備すべき機器他】

課題の提出、学習支援システムの利用にパソコン等が必要。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際人権論（マイノリティ、先住民族の権利）、NGO論、植民地主義と平和

<研究テーマ>人種主義と植民地主義

<主要研究業績>'Condemning J. Mark Ramseyer's Paper "On the Invention of Identity Politics: The Buraku Outcasts in Japan"' in *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, Volume 19, Issue 9, Number 8, 2021.

『脱「国際協力」—開発と平和構築を超えて』（新評論、2011年）

『資源開発への異議申し立てと先住民族の自己決定権』（東日本部落解放研究所発行『明日を拓く』第80号、2009年）、

『多文化共生』論（『制裁論を超えて—朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007年）

【Outline (in English)】

【Course outline】

The guarantee of human rights has been considered an issue of universal importance in the modern world. More importantly, socially marginalized groups of people have used human rights to restore their human dignity, contributing to the development of the international human rights systems.

However, the ideas and systems of human rights which were born along with the development of the modern nation-state system now face serious challenges: one is that they are insufficient in, or in fundamental contradictions with, the protection of human dignity of groups of people who have been excluded or exploited in that system. One factor behind it is the continuation of colonialism. The human rights protection systems are now being reconsidered from that perspective.

In this course, the participants will learn how the international human rights protection systems have developed and what impact they have brought to minority and indigenous groups in Japan and elsewhere. They will consider the challenges posed to the international human rights protection systems using racism and colonialism as key concepts. A particular focus will be put on the issues of racism and multiculturalism in present-day Japan. The course provides the participants an opportunity to acquire critical thinking abilities on the issues of human rights and the perspective of the marginalized/discriminated against in thinking about how human rights can be respected for all.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students are expected to develop an understanding of how the international human rights system has developed and how it is related to the protection of human rights within national borders, what kind of challenges the world is facing in the changes of the international order since the end of the 20th century and how those issues can be explained with the keywords of colonialism and racism.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students are expected to have read the relevant text, prepare a summary (when designated) and be ready for class discussion. Your required study time is at least four hours for each class meeting.

【Grading Criteria /Policy】

Grading will be decided based on the following.

Term-end examination: 50%; In-class contribution: 50%

FRI500G1 - 407

多文化情報ネットワーク論 A

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

情報科学、特にインターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術は広く深く発展し、情報基盤として様々な分野で必要不可欠なものとなっています。これらが、もともとどのような理由で設計された技術なのか、それが時代とともにどのように変わって来たのかを学び、インターネットの社会基盤としての役割や問題を討議します。

【到達目標】

この科目の到達目標は、コンピュータネットワークの仕組みの大枠を理解し、仮想空間を流通する情報の特性や理解を深めることです。知識を蓄積するだけでなく、自身のネットワークおよび関連情報技術の利用や社会性について論理的に考え討議することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

多文化情報ネットワーク論 A では、コンピュータネットワークの設計と基本的な仕組みを理解することにより、ネットワーク上での情報流通や形式を学びます。また、関連技術がどのように使われることを想定して設計され淘汰されてきたかを学び、普段利用している情報サービスが技術的にどの程度安全性を確保されているものか、どの程度リスクがあるものかを、学生自身の使い方に鑑みながら確認していきます。

なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更します。

今学期はオンライン併用での開講が予想されます。学期途中での授業形態の変更やそれにもなう各回の授業計画の修正については、学習支援システムでその都度提示します。履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認してください。

課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システムを通じて行いますが、必要に応じて補助的に Google Classroom 等も用いる場合もあります。

授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参 照予定の文献を紹介する。
第 2 回	身近な情報ネットワーク 技術	普段利用している情報ネットワーク関 連技術を考え、動作環境や仕組みを確 認する。
第 3 回	コンピュータが情報を 2 進数で扱う理由、情報理 論基礎	情報科学の基礎として、2 進数の復習 とネットワーク技術で使われる主なア ルゴリズムを学ぶ。
第 4 回	情報ネットワークとイン ターネット	コンピュータネットワークの形式とイン ターネットの特色を学ぶ。
第 5 回	インターネットの歴史、 OSI 参照モデル	インターネットの開発の理由や歴史、 OSI 参照モデルを学ぶ。
第 6 回	インターネット関連技術 の動向（1）	インターネットアーキテクチャの内、 物理層およびデータリンク層の仕組み を学ぶ。
第 7 回	インターネット関連技術 の動向（2）	インターネットアーキテクチャの内、 ネットワーク層の仕組みを学ぶ。
第 8 回	情報科学技術と仕事（1）	情報科学技術が社会に普及したことによ り生じる事象（利益、問題点）を仕 事の観点から論じる。
第 9 回	情報科学技術と仕事（2）	前回議論した事象から、今後対策や対 応が必要になる事象を技術的・社会 的、両方の側面から論じる。
第 10 回	情報科学技術と安全性 （1）	情報科学技術が社会に普及したことによ り生じる事象（利益、問題点）を個 人または組織に対するセキュリティの 観点から論じる。
第 11 回	情報科学技術と安全性 （2）	前回議論した事象から、今後対策や対 応が必要になる事象を技術的・社会 的、両方の側面から論じる。
第 12 回	個人情報とプライバシー	保護されるべき個人情報やプライバシ とは、どのようなものを学び、議論 する。

第 13 回 情報セキュリティとネッ
トワークセキュリティ

主な情報セキュリティ技術を学び、そ
れがインターネットにどのように利用
されているかを学ぶ。

第 14 回 授業のまとめ

授業での議論を振り返り、まとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要になります。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

課題・レポート（30%）、議論・平常点（20%）、最終レポート（50%）で総合的に評価します。

コンピュータネットワークの仕組みの概略と現在のインターネットの利用形態に関連する技術への理解度をレポートで評価し、それに対する授業中の議論を出席および授業参加として評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

履修者の理解度に合わせて学習進度や項目を柔軟に変更する。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン併用授業の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。授業内容の議論や補足は Zoom あるいは Webex を用いる。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】

大学の行動方針レベルが 2 となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> インターネット上の情報流通に関する研究
<研究テーマ> 主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題
<主要研究業績>

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline (in English)】

(Course outline)

We will grasp the mechanism and the design philosophy of the internet roughly and discuss its role in real society.

(Learning Objectives)

- To understand the general framework of how computer networks work.
- To develop an understanding of the characteristics and understanding of information circulating in virtual space.

In addition to accumulating knowledge, the course aims to encourage students to think and discuss logically about the use and social aspects of their own networks and related information technologies.

(Learning activities outside of classroom)

You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.

(Grading Criteria /Policy)

Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution(20%), and term-end report (50%).

FRI500G1 - 408

多文化情報ネットワーク論B

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術の研究背景とその時代で最先端だったシステム設計を学ぶことで情報ネットワークの仕組みを大まかに掴み、今後のインターネットや他情報科学技術の使われ方について議論します。

【到達目標】

この科目では、コンピュータネットワークの仕組みの概略を理解し、現在利用されているインターネットの利用形態に関連する技術を知ると同時に、今後の通信技術の展望を考えることを目標としています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この科目の到達目標は、現在深く広く普及しているインターネットを始めとする情報ネットワークについて、その仕組みの概略と開発背景を掴む。その上で、情報ネットワーク技術が社会通信基盤として利用されていることに鑑み、実空間情報が仮想空間上でデジタルデータとして流通することの利便性とリスクを検討し、議論する。

全体を通して、教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを指し、問題意識の整理と解決のための意見交換をしていく。

なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第 2 回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第 3 回	インターネットの歴史	インターネットの開発の理由や歴史、コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第 4 回	プロトコルとレイヤ (OSI 参照モデル)	OSI 参照モデル、および現状のインターネットアーキテクチャと主なプロトコルを学ぶ。
第 5 回	経路制御アルゴリズム	ネットワーク層で使われる主な経路制御アルゴリズムを学ぶ。
第 6 回	IP アドレスと名前解決	インターネットプロトコル (IP) の役割と名前解決の仕組みを学ぶ。
第 7 回	無線技術と移動体通信	無線通信技術の種類と変遷を学び、移動体通信技術について学ぶ。
第 8 回	クラウドコンピューティング	クラウドコンピューティングの仕組みを学び、利益と弊害を議論する。
第 9 回	インターネットの社会性	インターネットが共通通信基盤として社会的に普及したことによる利益と弊害を議論する。
第 10 回	日本の通信技術戦略	日本が進めてきた通信技術戦略の一部を紹介し、その効果について議論する。
第 11 回	個人情報とプライバシー	保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものかを学び、議論する。
第 12 回	ネットワーク技術の国際標準化	情報技術の普及戦略の一角を担う国際標準化について学ぶ。
第 13 回	知的財産とインターネット	知的財産権の一つである著作権を学び、国境を越えて利用されるインターネット上での振る舞いを考える。
第 14 回	情報ネットワークの抱える問題、授業のまとめ	情報ネットワークの将来性と問題について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要になります。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

レポートまたは小テスト (30%)、平常点 (20%)、最終レポート (50%) で総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【その他の重要事項】

大学の行動方針レベルが2となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>インターネット上の情報流通に関する研究

<研究テーマ> 主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題

<主要研究業績>

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline (in English)】

(Course outline)

We will grasp the mechanism of information communication technology roughly and discuss how future information technology is used in real society.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to provide students with a general understanding of how computer networks work and the technologies relevant to the current forms of Internet use, and to consider the future prospects for communications technology.

(Learning activities outside of classroom)

You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.

(Grading Criteria /Policy)

Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution(20%), and term-end report (50%).

OTR500G1 - 501

国際文化研究日本語論文演習 A

浅利 文子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を拡充し、専門分野の修士論文を書くための基礎力を身につける。

【到達目標】

- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章の論旨を正確に読み取ることができる。
- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約できる。
- ・与えられたテーマで 800 ～ 1200 字程度の小論文を書くことができる。
- ・自分の修士論文についてレジュメを作成し、定められた時間で口頭発表できる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて、日本語で自分の感想や意見を述べ、他の意見を良く理解して、議論することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

第1回の授業では、全受講生の作文により、日本語レベルを確認します。第2回では、自己紹介と修士論文のテーマについて作文し、日本語の文章力と研究テーマ等を確認します。第3回から第8回は、学術的・専門的な日本語の文章を課題文として配布し、正確に読めるよう確認した後、指示された字数で要約文を書く練習をします。提出された各人の要約文は、すべて添削して返却します。その後、課題文のテーマについて、全員が感想や意見を出し合い討議します。以上の要約練習により、文章の論理的展開の筋道を読み取ることから、論文の論理的構成の重要性を学びます。第9回から第12回は、小論文を書く練習をします。400字から始め、1200字程度の小論文を書くことを目標に練習しつつ、論理展開や段落構成の基礎を学びます。提出された小論文は、すべて添削して返却します。第13回と第14回は、必要に応じて、7月の概要発表会の準備をします。レジュメの書き方を学び、口頭発表の練習をします。学習内容・方法や難易度は、受講する学生の日本語の水準や希望等に合わせて適宜変更します。

春学期は、当面の間オンライン授業を行い、国際文化研究科の判断で可能となった場合は対面授業を行います。オンライン授業では、学習支援システムにおいて、添削した課題に説明を加えて提出の翌日までに返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、質問があれば説明をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方針、学び方の説明 自己紹介スピーチ・作文 受講者の日本語レベル確認、受講者の希望確認
第2回	自己紹介と修士論文のテーマについて作文する	前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答 受講生の修士論文のテーマを作文によって確認
第3回	課題文①	【演習1】前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①の音読確認、要約文の書き方を講義、要約文を書き提出

第4回 課題文②

第5回 課題文③

第6回 課題文④

第7回 課題文⑤

第8回 課題文⑤、まとめ

第9回 小論文を書く①

第10回 小論文を書く②

第11回 小論文を書く③

第12回 小論文を書く④

第13回 小論文を書く⑤、まとめ
概要発表会のレジュメ作成準備

第14回 概要発表会の口頭発表練習

【演習2】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①について討議、課題文②音読確認、要約文を書き提出
【演習3】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文②について討議、課題文③音読確認、要約文を書き提出
【演習4】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文③について討議、課題文④音読確認、要約文を書き提出
【演習5】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文④について討議、課題文⑤音読確認、要約文を書き提出
【演習6】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文⑤について討議、要約文を書くことで何が学べたか自己評価した後、感想や考えを出し合いまとめる。

【演習7】小論文のテーマ設定・論理展開・段落構成等について講義、次回の小論文テーマ指示
【演習8】小論文を書き提出
【演習9】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、次回の小論文テーマ指示

【演習10】小論文を書き提出
【演習11】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、概要発表会のレジュメの書き方について講義
【演習12】レジュメ提出、概要発表会の口頭発表練習、感想・意見交換

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
 - ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認すること。
 - ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。
- 本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の文章を書く機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

秋学期の国際文化研究日本語論文演習Bを継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学
<研究テーマ>村上春樹ほか

<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

[Outline (in English)]

Foreign students whose mother tongue is not Japanese read logical sentences written in Japanese and practice writing in Japanese to improve their basic ability to write their own master's thesis in Japanese.

[Grading criteria]

attitude toward class 75 % (attendance state, positive attitude) assignment 25 %

OTR500G1 - 502

国際文化研究日本語論文演習 B

浅利 文子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、専門分野の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を向上させ、専門分野の修士論文を書くための基礎力を拡充する。

【到達目標】

- ・専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約し、口頭で発表できる。
- ・自分の修士論文のテーマに関して、4000字程度の小論文を書くことができる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて議論できる。（発言者ひとりひとりの意見を正確に聴き取り、テーマの方向性に沿った論理的な意見を述べたり問題点を指摘したりして、テーマを深化し発展させることができる）

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

第1回の授業で、各受講生は自分の研究テーマについてスピーチします。第2回の授業では、全員が自分の研究テーマについてまとめた作文を提出し、添削を受けた後、音読発表します。第3回から第7回までは、各受講生が自分の研究テーマに沿った書籍や文献から一定の長さの日本語の文章を抜粋して全員に配布し、その要約を書いて発表し、全員でその内容や研究テーマとの関連性について感想・意見を出し合います。第8回から第13回は、各自の研究テーマに沿った小論文を書きます。1200字程度から書き始め、第13回では、4000字程度の小論文を完成させます。第14回は、完成した4000字の小論文を口頭発表し、相互評価をします。提出された要約文・小論文は、すべて添削して返却します。学習内容・方法や速度・難易度は、受講生の水準に合わせて適宜変更します。本科目は、コロナ感染の状況によってオンライン授業を行う可能性もありますが、国際文化研究科の判断で可能となった場合は、対面授業を行います。オンライン授業では、学習支援システムにおいて、添削した課題に説明を加えて提出の翌日までに返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、質問があれば説明をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション・研究テーマについてスピーチ	演習の目的と方針の説明、受講者の日本語レベル、研究テーマ、受講者の希望確認
第2回	作文「私の研究テーマ」	【演習1】作文後、添削された作文を各人が音読して発表し、添削内容について質疑応答
第3回	課題文①	【演習2】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文①について討議
第4回	課題文②	【演習3】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文②について討議
第5回	課題文③	【演習4】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文③について討議
第6回	課題文④	【演習5】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文④について討議

第 7 回 課題文⑤	【演習 6】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文⑤について討議
第 8 回 小論文を書く①	【演習 7】小論文を書く際のテーマ設定・論理展開・段落設定等について講義
第 9 回 小論文を書く②	【演習 8】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 10 回 小論文を書く③	【演習 9】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 11 回 小論文を書く④	【演習 10】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 12 回 小論文を書く⑤	【演習 11】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 13 回 小論文を書く⑥	【演習 12】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 14 回 小論文を書く⑦（まとめ）	【演習 13】4000 字の小論文を口頭発表・相互評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
 - ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認し、正確に音読できるよう練習すること。
 - ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。
- 本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の論理的文章を書く機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

各自、パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

春学期の国際文化研究日本語論文演習 A からの継続履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近現代日本文学
<研究テーマ> 村上春樹ほか
<主要研究業績> 『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房）『村上春樹 スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第 4 輯』『村上春樹研究叢書第 5 輯』『村上春樹研究叢書第 6 輯』『村上春樹研究叢書第 7 輯』（日本語版）等

【Outline (in English)】

Foreign students whose mother tongue is not Japanese practice writing in Japanese to improve their ability to write master's thesis on each specialized field.

【Grading criteria】

attitude toward class 75 % (attendance state, positive attitude) assignment 25 %

国際文化研究日本語論文演習 C

浅利 文子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語で修士論文を書き出す準備を整え、実際に執筆しながら論文の書き方や日本語表現について学ぶ。

【到達目標】

- ・修士論文完成までのスケジュール（概要発表会・中間発表会等）を確認する。
- ・従来の修士論文の体裁（構成・分量・注の付け方・図表の入れ方・参考資料の掲載方法・文体・印字体等）を確認する。
- ・修士論文の主題と副題を決める。
- ・修士論文の構成（章立て・各章の分量・各章の内容と節の数やその分量）を決める。
- ・目次を書く。
- ・概要発表会の準備をする（レジュメの準備、口頭発表・質疑応答の練習等）
- ・修士論文の序論、あるいは第 1 章を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたなどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

最初の 7 回で修士論文を書き始めるための具体的な準備を行い、その後、実際に修士論文を書き始めます。準備の段階では、まず、今まで国際文化研究科に提出された修士論文の体裁を確認し、各自のテーマに従って修士論文の構想を具体的にまとめます。次に、7 月末の概要発表会、10 月末の中間発表会のレジュメの書き方を学び、口頭発表・質疑応答の練習をすることによって、修士論文の構想・テーマを具体化し深化させます。第 8 回からは、各自修士論文の序論あるいは第 1 章を書き始めます。段落と段落、節と節がそれぞれ文章としてのまとまりを持ち、論理的構成の下で互いに関連し合うことを学ぶことを目標として、一つの章を完成させることを目標とします。受講生の希望と実態に合わせて内容を変更する可能性があります。

春学期は、当面の間オンライン授業を行い、国際文化研究科の判断で可能となった場合は対面授業を行います。オンライン授業では、学習支援システムにおいて、添削した課題に説明を加えて提出の翌日までに返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、質問があれば説明をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	・授業の目的と内容・方針の説明 ・各受講生の修士論文のテーマと進捗状況の確認
第 2 回	従来の修士論文の体裁を確認する	・構成、分量、注の付け方、図表の入れ方、参考資料の掲載方法、文体、印字体等
第 3 回	概要発表会のレジュメの書き方	・概要発表会のレジュメの書き方について講義 ・レジュメを書く
第 4 回	レジュメ提出・添削	・各人のレジュメを添削 ・質疑応答
第 5 回	レジュメに基づいて口頭発表の練習①	・声の出し方、話し方 ・時間の使い方 ・質疑応答の対応の仕方

第6回	レジュメに基づいて口頭発表の練習② スケジュール確認	・概要発表会、中間発表会、学会発表等のスケジュールを確認
第7回	修士論文の主題・副題、論文構成を確認する	・主題と副題、章立てと分量配分を書いて提出
第8回	修士論文を書く①	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出
第9回	修士論文を書く②	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第10回	修士論文を書く③	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第11回	修士論文を書く④	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第12回	修士論文を書く⑤	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第13回	修士論文を書く⑥	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第14回	修士論文を書く⑦	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の内容については、随時指導教官から指導を受けてください。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

修士論文を書き始める準備をするとともに、論文を書き進めながら、論文の論理的構成や日本語表現について、逐次アドバイスを受けることができます。修士論文執筆のペースメーカーとして利用できます。

【学生が準備すべき機器他】

各自パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

国際文化研究日本語論文演習A・B受講者が継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近現代日本文学

<研究テーマ> 村上春樹ほか

<主要研究業績> 『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房）『村上春樹 スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

【Outline (in English)】

This class help and give some advice to foreign students whose mother tongue is not Japanese to write their master's thesis in Japanese.

【Grading criteria】

attitude toward class 75 % (attendance state, positive attitude)
assignment 25 %

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A（代表シラバス）

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を引き続き練る。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに構想発表会を意識し、発表を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文リサーチペーパーの構想について、指導教員とより細かく議論を重ねる。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
14	口頭発表指導	履修者ごとに残された課題を抽出。夏期休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper,
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on the results of your study, presentations, etc. with all things considered.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B（代表シラバス）

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。必要があれば、発表会のリハーサル等も行う。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】**【授業の概要 (Course outline)】**

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper,
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

Based on the results of your study, presentations, etc. with all things considered.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

松本 悟

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
14	口頭発表指導	履修者ごとに残された課題を抽出。夏期休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

浅川 希洋志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を引き続き練る。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに構想発表会を意識し、発表を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員とより細かく議論を重ねる。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
14	口頭発表指導	履修者ごとに残された課題を抽出。夏期休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】**【授業の概要（Course outline）】**

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper,
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on the results of your study, presentations, etc. with all things considered.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

松本 悟

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。必要があれば、発表会のリハーサル等も行う。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

浅川 希洋志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏学期休暇中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。必要があれば、発表会のリハーサル等も行う。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】**【授業の概要 (Course outline)】**

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper,
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

Based on the results of your study, presentations, etc. with all things considered.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

曾 士才

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
14	口頭発表指導	履修者ごとに残された課題を抽出。夏期休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とします。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

曾 士才

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏期休暇中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。必要があれば、発表会のリハーサル等も行う。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とします。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

佐藤 千登勢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	修士1年の研究成果を基に、履修者ごとに指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに構想発表会を意識し、具体的な春学期の研究について議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
14	口頭発表指導	履修者ごとに残された課題を抽出。夏期休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

佐藤 千登勢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏学期休暇中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。必要があれば、発表会のリハーサル等も行う。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR700G1 - 001

博士論文演習 I A (代表シラバス)

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
1 回	これまでの研究の振り返り	修士論文などこれまでの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2 回	研究テーマの確認	第 1 回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを引き続き、修得する。
5 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
6 回	文献サーベイ④	必要であれば、他の文献を利用したりしながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7 回	文献サーベイ⑤	必要であれば、他の文献を利用したりしながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、引き続き修得する。
8 回	文献サーベイ⑥	必要であれば、他の文献を利用したりしながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、高度なレベルで修得する。
9 回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
10 回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を引き続き進める。
11 回	研究報告③	指導教員の指導の下に、修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
12 回	研究報告④	指導教員の指導の下に、修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を、引き続き進める。
13 回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する。
14 回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を、引き続き検討する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習 (2 単位) では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 002

博士論文演習 I B (代表シラバス)

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直し。
2回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
11回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
12回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
13回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
14回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためです。それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 003

博士論文演習ⅡA (代表シラバス)

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究計画に沿って必要な調査(文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等)を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する2本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返り	1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
5回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
6回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
7回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
8回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
9回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
10回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
11回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
12回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
13回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して、春学期の研究成果をまとめる。
14回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し、夏季休暇中の調査内容を明確化する。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

- 1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
- 2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 004

博士論文演習ⅡB（代表シラバス）

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

- 1. 博士論文の一部にあたる2本目の学術論文を投稿できる。
- 2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的な履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の報告に関しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
9回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
10回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
11回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
12回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
13回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
14回	まとめ	2年間の研究成果のまとめ、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためでするので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

授業の概要（Course Outline）

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 005

博士論文演習Ⅲ A（代表シラバス）

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
1 回	執筆・調査計画の立案	2-3 月の研究成果の報告。追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2 回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し報告し、それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する。
3 回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し報告し、それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する。
4 回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し報告し、それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する。
5 回	予備論文（草稿）の発表	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる。
6 回	予備論文（草稿）への指導	予備論文をもとにした議論と指導を行う。
7 回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8 回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する。
9 回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する。
10 回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する。
11 回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを議論する。
12 回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを議論する。
13 回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して博士論文の全体構成を固める。
14 回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントを踏まえて、博士論文全体の構成と内容を見直し本格的な執筆を行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程 3 年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためでするので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 006

博士論文演習Ⅲ B（代表シラバス）

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて最終的な指導を行う。
2回	投稿論文・学会発表準備①	提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする。
3回	投稿論文・学会発表準備②	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする。
4回	投稿論文・学会発表準備③	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導を行う。
9回	学位請求論文の要旨指導②	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導を行う。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
2. to be able to explain the contents and significances of your dissertation.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 001

博士論文演習 I A

森村 修

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：その他・未定/other, undecided

回	テーマ	内容
1 回	これまでの研究の振り返り	修士論文などこれまでの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2 回	研究テーマの確認	第 1 回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを引き続き、修得する。
5 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
6 回	文献サーベイ④	必要ならば、他の文献を利用したりしながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7 回	文献サーベイ⑤	必要ならば、他の文献を利用したりしながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、引き続き修得する。
8 回	文献サーベイ⑥	必要ならば、他の文献を利用したりしながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、高度なレベルで修得する。
9 回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
10 回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を引き続き進める。
11 回	研究報告③	指導教員の指導の下に、修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
12 回	研究報告④	指導教員の指導の下に、修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を、引き続き進める。
13 回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する。
14 回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を、引き続き検討する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習 (2 単位) では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 002

博士論文演習 I B

森村 修

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：その他・未定/other, undecided

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
11回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
12回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
13回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
14回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためです。それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 001

博士論文演習 I A

佐藤 千登勢

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	これまでの研究の振り返り	修士論文などこれまでの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2 回	研究テーマの確認	第 1 回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを引き続き、修得する。
5 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
6 回	文献サーベイ④	必要ならば、他の文献を利用したりしながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7 回	文献サーベイ⑤	必要ならば、他の文献を利用したりしながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、引き続き修得する。
8 回	文献サーベイ⑥	必要ならば、他の文献を利用したりしながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、高度なレベルで修得する。
9 回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
10 回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を引き続き進める。
11 回	研究報告③	指導教員の指導の下に、修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
12 回	研究報告④	指導教員の指導の下に、修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を、引き続き進める。
13 回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する。
14 回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を、引き続き検討する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習 (2 単位) では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 002

博士論文演習 I B

佐藤 千登勢

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
11回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
12回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
13回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
14回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためです。それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation,
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 003

博士論文演習ⅡA

高柳 俊男

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する2本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返り	1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
5回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
6回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
7回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
8回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
9回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
10回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
11回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
12回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
13回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して、春学期の研究成果をまとめる。
14回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し、夏季休暇中の調査内容を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication. They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation, 2. to start writing another paper in your relevant field. Study, read, and actively publicise and exchange ideas. Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 004

博士論文演習ⅡB

高柳 俊男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる2本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的な履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の報告に関しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
9回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
10回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
11回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
12回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
13回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
14回	まとめ	2年間の研究成果のまとめ、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためでするので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication. They are twofold: 1. to be able to write up your own doctoral dissertation, 2. to start writing another paper in your relevant field. Study, read, and actively publicise and exchange ideas. Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 005

博士論文演習Ⅲ A

佐々木 一恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1 回	執筆・調査計画の立案	2-3 月の研究成果の報告。追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2 回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し報告し、それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する。
3 回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し報告し、それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する。
4 回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し報告し、それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する。
5 回	予備論文（草稿）の発表	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる。
6 回	予備論文（草稿）への指導	予備論文をもとにした議論と指導を行う。
7 回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8 回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する。
9 回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する。
10 回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する。
11 回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを議論する。
12 回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを議論する。
13 回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して博士論文の全体構成を固める。
14 回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントを踏まえて、博士論文全体の構成と内容を見直し本格的な執筆を行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程 3 年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations. They are twofold: 1. to be able to write up your own doctoral dissertation, 2. to start writing preliminary versions of your dissertation. Study, read, and actively publicise and exchange ideas. Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 006

博士論文演習Ⅲ B

佐々木 一恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて最終的な指導を行う。
2回	投稿論文・学会発表準備①	提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする。
3回	投稿論文・学会発表準備②	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする。
4回	投稿論文・学会発表準備③	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導を行う。
9回	学位請求論文の要旨指導②	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導を行う。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されます。

【Outline (in English)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations. They are twofold: 1. to be able to write up your own doctoral dissertation, 2. to start writing preliminary versions of your dissertation. Study, read, and actively publicise and exchange ideas. Based on the results of your study, papers, presentations, etc. with all things considered.

OTR700G1 - 101

博士ワークショップ I A

浅川 希洋志、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げ、構想発表会で発表する。論文プロポーザルには、
 - (1) 研究テーマ
 - (2) 研究の目的
 - (3) 研究の方法
 - (4) 研究計画
 - (5) 期待される成果
 - (6) 文献リスト等
 が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会において論文プロポーザルを発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 6 回	研究発表とコメント①	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 7 回	研究発表とコメント②	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 8 回	研究発表とコメント③	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 9 回	研究発表とコメント④	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 10 回	研究発表とコメント⑤	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 11 回	研究発表とコメント⑥	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 12 回	研究発表とコメント⑦	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 13 回	研究発表とコメント⑧	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

第 14 回 研究発表とコメント⑨ 7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 A」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20 点
・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会での他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②論文プロポーザル：80 点
・論文プロポーザルの内容：40 点・論文プロポーザルについての発表：40 点
本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究 A」のうち、いつの授業（5 回）に討議者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Master's students, as well as to present their research proposals and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the thesis proposal to serve as a foundation for your doctoral research. It should include:

- (1) research theme
- (2) research goals
- (3) research methods
- (4) research plan
- (5) possible outcome

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as Thesis Planning Presentations (TPP). According to the MEX regulation, you are expected to 'theoretically' spend four ours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%
- Thesis proposal: 80% (its content 40%, presentations given in TPP: 40%)

OTR700G1 - 102

博士ワークショップ I B

浅川 希洋志、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げ、中間発表会で発表する。論文プロポーザルには、
 - (1) 研究テーマ
 - (2) 研究の目的
 - (3) 研究の方法
 - (4) 研究計画
 - (5) 期待される成果
 - (6) 文献リスト等
 が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 6 回	研究発表とコメント①	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 7 回	研究発表とコメント②	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 8 回	研究発表とコメント③	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 9 回	研究発表とコメント④	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 10 回	研究発表とコメント⑤	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 11 回	研究発表とコメント⑥	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 12 回	研究発表とコメント⑦	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 13 回	研究発表とコメント⑧	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

第 14 回 研究発表とコメント⑨ 11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 B」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20 点

・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②論文プロポーザル：80 点

・論文プロポーザルの内容：40 点・論文プロポーザルについての発表：40 点
本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究 B」のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Master's students, as well as to present their research proposals and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the thesis proposal to serve as a foundation for your doctoral research. It should include:

- (1) research theme
- (2) research goals
- (3) research methods
- (4) research plan
- (5) possible outcome

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the MEX regulation, you are expected to 'theoretically' spend four ours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%

- Thesis proposal: 80% (its content 40%, presentations given in TIP: 40%)

OTR700G1 - 103

博士ワークショップ II A

浅川 希洋志、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
 2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
 3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。
- 先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それを踏まえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 6 回	研究発表とコメント①	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 7 回	研究発表とコメント②	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 8 回	研究発表とコメント③	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 9 回	研究発表とコメント④	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 10 回	研究発表とコメント⑤	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 11 回	研究発表とコメント⑥	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 12 回	研究発表とコメント⑦	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 13 回	研究発表とコメント⑧	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 14 回	研究発表とコメント⑨	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 A」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20点

・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、構想発表会での他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②先行研究分析報告：80点

・先行研究分析報告の内容：40点・先行研究分析報告についての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究 A」のうち、いつの授業（5回）に討議者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。

・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Master's students, as well as to present their Prior research analysis and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the Prior research analysis to show your progress and originality.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as Thesis Planning Presentations (TPP). According to the MEX regulation, you are expected to 'theoretically' spend four ours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%

- Prior research analysis: 80% (its content 40%, presentations given in TPP: 40%)

OTR700G1 - 104

博士ワークショップ II B

浅川 希洋志、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を发表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
 2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
 3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。
- 先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それを踏まえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討議者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	討議者①	「国際文化共同研究 B」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第2回	討議者②	「国際文化共同研究 B」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第3回	討議者③	「国際文化共同研究 B」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第4回	討議者④	「国際文化共同研究 B」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第5回	討議者⑤	「国際文化共同研究 B」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第14回	研究発表とコメント⑨	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 B」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20点

・「国際文化共同研究 B」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②先行研究分析報告：80点

・先行研究分析報告の内容：40点・先行研究分析報告についての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究 B」のうち、いつの授業（5回）に討議者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。

・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Master's students, as well as to present their Prior research analysis and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the Prior research analysis to show your progress and originality.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the MEX regulation, you are expected to 'theoretically' spend four ours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%

- Prior research analysis: 80% (its content 40%, presentations given in TIP: 40%)

OTR700G1 - 105

博士ワークショップⅢA

浅川 希洋志、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。構想発表会においては、完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え、博士論文の構成（章立て）を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討議者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会においてこれまでの研究成果や博士論文の構成（章立て）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討議者①	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第2回	討議者②	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第3回	討議者③	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第4回	討議者④	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第5回	討議者⑤	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

- 第13回 研究発表とコメント⑧ 7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
- 第14回 研究発表とコメント⑨ 7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

「国際文化共同研究 A」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト(教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点(コメント・シート)：20点
 ・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート(毎回A4のシート1枚)を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②博士論文を構成する章：80点
 ・博士論文を構成する章の内容：40点
 ・博士論文を構成する章についての発表：40点
 本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究 A」のうち、いつの授業(5回)に討議者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部(研究科長、専攻副主任)。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Master's students, as well as to write up, present, and publicise their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to publish part of your dissertation. In TPP, you have to present what you have written together with the table of contents, as well as to explain the whole thesis structure.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the MEX regulation, you are expected to 'theoretically' spend four ours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

- Comment sheets submitted: 20%
- Written-up chapter(s): 80% (its content 40%, presentations given in TPP: 40%)

OTR700G1 - 106

博士ワークショップⅢB

浅川 希洋志、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメントーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。発表会においては、完成した章(投稿論文原稿)の発表に加え、博士論文の構成(章立て)を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討議者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会において博士論文の要旨を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

なし/No

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

- 第 14 回 研究発表とコメント⑨ 11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 B」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20 点

・「国際文化共同研究 A」に討論者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、中間発表会での他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②博士論文を構成する章：80 点

・博士論文を構成する章の内容：40 点・博士論文を構成する章についての発表：40 点

本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究 B」のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Master's students, as well as to write up, present, and publicise their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to publish part of your dissertation. In TIP, you have to present what you have written together with the table of contents, as well as to explain the whole thesis structure.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the MEX regulation, you are expected to 'theoretically' spend four ours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%

- Written-up chapter(s): 80% (its content 40%, presentations given in TIP: 40%)

